

# 場の概念による住空間の研究

—住居内での個人空間の形成について—

古賀紀江





場の概念による住空間の研究  
—住居内での個人空間の形成について—

古賀 紀江

目次

序言 1

第一章 研究の背景と目的 2

1-1 研究の背景 2

1-2 研究の目的 3

第二章 研究の方法 4

2-1 調査対象と調査方法 4

2-2 データの分析 5

第三章 研究の結果 6

3-1 住居内での個人空間の形成 6

3-2 場の概念による住空間の研究 7

第四章 結論 8

参考文献 9

謝辞 10

索引 11

	目次	(頁)
はじめに		(1)
第1章 研究の背景と目的		
1・1 研究の背景		(2)
1・2 研究の目的		(3)
1・3 研究の方法		(4)
1・4 既往の研究に見られる視点		(7)
1・5 既往の分析概念・空間論との違い		(12)
1・6 論文の構成		(14)
研究の諸概念の整理		(16)
第2章 一人暮らしの高齢者の個人空間に関する考察		(17)
2・1 一人暮らしの高齢者の住居内で見られた「座」のタイプ		(20)
2・2 「座」の数と住空間の関係		(24)
2・3 個別要素間関係		(31)
2・4 一人暮らし高齢者の「常座」がある空間の特徴		(33)
2・5 「常座」の構造		(41)
2・6 「座」と行為の空間的な関係 — 「場」の形成の仕方についての検討—		(45)
2・7 「常座」の周囲のモノの在り方		(59)
2・8 一人暮らしの高齢者の個人空間の特徴		(73)
第3章 一人暮らしの高齢者の個人空間の経年変化に関する考察		(77)
3・1 一人暮らしの高齢者の住空間の2年後の様子		(84)
3・2 生活者を取り巻く環境の変化		(95)
3・3 一人暮らし高齢者の2年後の生活環境の変化と個人空間の変化の関係		(100)
3・4 個人空間の経年変化について まとめ		(105)
第4章 高齢者の夫婦世帯の住まいにおける個人空間に関する考察		(106)
4・1 住居内の「座」に関する分析 (一人暮らしの高齢者との比較)		(109)
4・2 夫婦の住む住居の2年後の様子		(122)
4・3 高齢者の夫婦世帯の個人空間の特徴		(128)
第5章 核家族の住まいにおける個人空間の形成に関する考察		(129)
5・1 研究の目的・研究の方法		(129)
5・2 家族の成員の「座」のとり方からの分析		(146)
5・3 「家族が集まる空間」に形成される「場」		(160)
5・4 行為総数による個人空間の特徴		(164)
5・5 「座」と行為の対応		(165)
5・6 核家族世帯に形成される個人空間の特徴		(166)
第6章 個人空間に関するまとめと高齢者の住居への提言		
6・1 住居内に形成された個人空間について		(168)
6・2 「場」の概念から考える高齢者の住居		(188)
おわりに		(195)
主要参考文献リスト		(196)
発表論文リスト		(200)
掲載図表一覧		(201)
資料編		



論文題目 「場」の概念による住空間の研究  
—住居内での個人空間の形成について—

氏名 古賀紀江

本論文における基本的な概念

本研究は、高齢者を主とした単身者、あるいは家族が住まう住居内で居住者が自分たちの生活の場をどの様に確保しているかを明らかにすることを目的とする。

個人によって確保される空間を本研究では「個人空間」として定義（第1章）した。個人空間は個人の私室と、個人が関わりを持つ公的な空間（例えば、居間や食堂）を含めた概念である。また、公的空間内の様に必ずしも室として区画されていない場所での個人空間を捉えるために、「場」という考え方（第1章）を導入した。「場」は、個人が行為を行う場所（論文中「座」とした）に、行為に使用するモノや人を含むその他の環境と関わり合うことで形成されている空間である。従って「場」は、物理的な境界で仕切られている空間ではない。「場」の概念によって、必ずしも室と行為の対応で成立していない現実に近い住生活を捉えられると考える。即ち、各居室内の家具や物品の種類や配置の調査や、限定された行為と居室の対応、居室と居室の使用者の対応を見ることを中心とした従来の視点からは捉えきれなかったリアルな住空間の姿を映し出すものと考えている。

本研究は、主として一人暮らしの高齢者を対象として行った。一人暮らしが最もシンプルな居住形態であること、加えて社会の急速な高齢化は今日の最も大きな問題の一つとして、建築計画の面からも十分な討議がなされるべき対象であるためである。

以下に第1章から第6章までの各章の概要を順に示す。

第1章 研究の背景・目的及び概念

本研究の目的は、（1）住居内での個々の居住者の住生活の実態を個人空間として捉えること、（2）個人空間を特徴づけ、類型化すること、（3）「場」の概念が計画の中でどのような価値を持ち、どの様に生かしようかを検討すること、である。

本研究は、個人空間という生活の中で個人が個別に体験し、自分のものと認知している環境に関する考察である。従って捉えられる個人空間は、例え同じ住居に住んでいても個々人が異なる形状と性質の個人空間として持つものである。研究では、実際に調査した住居内での被験者の生活の実態から「場」を記述し、個人空間の特徴を捉えることを試みる。「場」は、生活している個人の能動的な（意識、無意識的な）環境形成の及んでいる



範囲を指す。「場」と室という空間的限定要素との関わり方には、行為を行っている室内の場合も、室の枠を超えて関わっている状況である場合もあり得る。

## 第2章 一人暮らしの高齢者の個人空間に関する考察

第2章では、東京都の文京区根津地区と北区赤羽台団地の一人暮らしの高齢者25名を対象としたデブスインタビューと住居内部の調査の結果について考察を行った。

一人暮らしの高齢者の個人空間には、食事行為を含むほとんどの生活行為が行われる「座」があり、その「座」では、行為に必要なモノを取り寄せるのに移動をしなくても良い場合が多い(論文中「ステーション化」と定義)。研究では、このような「座」を「常座」と定義した。「常座」は、たいてい座卓やこたつなどの床座で使用する家具に取られており、訪問者も通される。また、「常座」は、窓や入口の方向に向く傾向があり、外部の様子が無理なく視界に取まる位置にとられている。即ち、一人暮らしの高齢者の個人空間の「常座」に形成される「場」には、典型的な様式が存在すると見ることができる。

個人空間には、他に1、2カ所の「座」がとられているが、これらの「座」は、「常座」で行うこと以外の特別な目的のための「座」であることが多い。住居内での「座」の数は必ずしも室数だけに影響されるとは言えず、むしろ居住者自身の生活を反映する。また、個人空間の状況に、調査を行った2つの地区でやや異なる傾向が見られたことから、住居の形態や地域性等も「常座」をはじめとした「座」での「場」の形成の仕方に影響を与えることが考えられる。

一人暮らしの高齢者の個人空間には、以上の様な、実際に行為に関わるモノと「座」の関係から捉えられる「場」の他に、大切なモノの置き場所や思い出のモノの飾ってある場所、また小動物の様に見えるだけではなく「世話」という行為を必要とする対象などに対しても「場」が形成されていると考えることができる。

## 第3章 一人暮らしの高齢者の個人空間の経年変化に関する考察

第3章は、第2章の調査対象者について、2年後に前回と同様のインタビューを中心とした調査を行った結果と考察である。尚、経年調査のインタビューは14名について行うことができた。

家具配置等の大きな変化が見られたのは1例のみであった。「常座」以外の部分でのモノの位置や家具の配置の変化は目立たず、「常座」の周囲にモノや収納家具が集められる傾向(「ステーション化」)が全体的な傾向として見られた。その他、「常座」として居心地が良いように座具を工夫したり、身体的な機能の低下に対して「常座」としての機能が保たれるような工夫をする例も見られた。こうした傾向には、時間の経過に伴う体力の低下等に対する補完である場合もあることがインタビューの内容から予測された。

実際に「座」での行為に関わるわけではないが、小動物や植物のような世話をする習慣的な行為を伴うモノや見慣れた環境を形成する要素としてのモノは維持される傾向が強い。新たな住居に移るような必要が生じた場合など、これらの環境を守ることは重要と考えられる。さらに、インタビューの分析から、住居に自分以外の他者が入る機会が日常的にあ

る人には個人空間の質を維持する傾向が強く見られた。

## 第4章 高齢者の夫婦世帯の住まいにおける個人空間に関する考察

第4章は、第2章と同様の調査を、両地区内の夫婦世帯(計10世帯)を対象に行い、夫婦世帯に形成された個人空間に関する考察を行った。

夫婦世帯の場合、住居内には夫と妻の個人空間が同時に存在し、領域的な重なりも予測される。一人暮らしの場合と異なり、「常座」をとらない事例も見られた。「常座」をはじめとして、「座」の周囲にあるモノの量は一人暮らしの人の場合と比べて少なく、特に、夫婦が共に「座」をとる場所での極端なステーション化はほとんど見られない。行為に必要なモノはその都度「座」から移動して用意する(セッティング行為と定義した)場合が多い。また、夫婦世帯では食事のための「座」がとられる場合が半数の世帯で見られ、「常座」で食事行為も行う一人暮らしの人の個人空間とは異なる傾向を持つ。夫婦世帯では食事行為の他にも、全体に目的別の「座」がとられる傾向が強く、日常生活にはっきりとした空間的な秩序が守られていると考えることができる。高齢者の住居を計画する際、一人暮らしの場合と夫婦世帯に形成される個人空間の特徴が異なる傾向を持つことを考慮することが必要である。

事例数は少ないが、夫婦世帯でも経年変化に関する調査を行った。その結果、経年変化として一人暮らしの場合よりも家具の移動などを伴う大きな変化が見られた。いずれも、環境の変化や欲求に応じた改変であるが、インタビューの内容と合わせた考察から、何らかの問題が生じた場合、一人暮らしよりも楽に解決できる様子として受けとめられる。他者の存在が互いを気遣う点と、互いの衰え等の補完という点によって住環境の質を維持することが可能であると予測できる。

## 第5章 核家族の住まいにおける個人空間の形成に関する考察

第5章では大学生の子がいる核家族世帯の住居内に家族の各成員が形成する個人空間を捉え、考察を加えた。家族の各成員の属性による個人空間の特徴を考察すると共に、高齢者の個人空間との比較を行った。

調査を行った核家族世帯では、一般に前章までの高齢者世帯の事例よりも住居内にとる「座」の数が多い。核家族では、親世代では、共用の空間に個人的な「場」を形成する傾向が強く、子世代は自室に充実した「場」を形成する。親世代でも、妻は共用の空間内に自分の行為に必要なモノがある場合が多い等、妻と夫では異なった傾向が見られた。また、個人空間は私室と共用の空間のみで成立するのではなく、自分以外の人の「私室」に「場」を形成する場合も見られた。

核家族の個人空間は、家族が共用する「家族が集まる空間」にそれぞれの成員がどのような「場」を形成するかを分析の中心とした。その結果、「家族が集まる空間」を、行われる行為の内容ではなく、行為に関するモノのセッティングの状況と、行為を行うときの対人環境(一人か、複数か、他に別の行為をしている人がいるか、等)から捉える視点を提案した。これにより、行為と室を単純に対応させただけでは捉えきれない場面があること



を明らかにし、対人関係を含め総合的な環境として室の意味は捉えられるべきであることを示した。

#### 第6章 個人空間に関するまとめと高齢者の住居への提言

第6章は第5章までで得られた知見の総覧と、まとめの章である。

個人空間とは、世代や世帯形態によって異なる特徴を持つものであり、不変のものではなく、時間の経過によって変化するものである。また、自分以外の他者も個人空間の形成に影響を与える要素であり、特に高齢者では、個人空間の質の維持にも影響する場合もある。

最後に研究の結果をもとに、「場」の概念から、高齢者のための住居への提言を試みた。その一つとして、一人暮らしの人の住空間を計画する際には「常座」を確保をすることの提案を行った。特に、特別養護老人ホームの様な居住施設の場合など、寝台が中心に据えられた室に「常座」を形成することはかなり困難と思われ、結果的に今日の一人暮らしの高齢者の人の住様式とは異なる状況になっている事が多い。なるべく、自然な住環境を整えようとするならば、「常座」がとりやすい居室であるべきであり、そのためには家具の選定やレイアウトと共に、室のプロポーション等の形態の決定から考慮をすることが必要と思われる。(当然のことであるが「常座」の形成は最小限の条件である。)

「場」の概念による住居の計画の提案を通して、面積や室数からの知見の他に、「座」をとることのできる環境に関する系統立てられた資料が今後積み重ねられるべきものであることが示唆された。

#### はじめに

誰しもが同様であるとは言えないが、自分の家のことを考えるとき、家の中のどこか特定の場所のイメージが浮かんでくることが多いのではないだろうか。

家のことが話題になったときに私が頭の中に思い浮かべる場所は、何箇所かある。例えば、台所で母が調理台の前を時々よぎるのが見える居間のテーブルの前や、何冊かの本が枕の周りに置かれている自分の部屋のベッドの上である。これらのイメージにはいくつかの特徴がある。一つは、その場所を思い浮かべている私自身が日頃体験している視点からのイメージである点である。おそらく誰にもあてはまることで、「食事」の場面を、自分も含めた家族が食事をする様子としてまるでテレビの一場面の様に思い浮かべる人はあまりいないのではないだろうか。特徴のもう一点は、個人の体験している視点という点から推しても当然のことであるが、一人一人全く個別のものであるという点である。従って、自分の家についてのイメージは同じ家族の間でも、それぞれにとって異なる空間である。これは、家に限らず、あらゆる空間についてあてはまると考えることもできる。また、空間についての記憶の在り方を例とすることもできる。記憶の中の空間は、ある空間で自分が体験したことが中心となっていて、ある空間全体を万遍なく網羅するのではない。そのために、良く遊んだ公園のあのブランコや、机と本棚の間の暗がりなどがそれぞれにとって大切な意味を持ったものともなる。

住居の中には、一人一人の体験に基づくごく個人的な空間であると考えられないだろうか。この空間はどのような形をしているのであろうか。そしてまた、この空間がどのようにして形成されているかを知るとは住居の環境としての室を考える際にも有用なのではないだろうか。本研究では、住居内で人が何かをするためにいる場所と、そこで行う行為の、特に過程に注目して検討を進めることにする。



## 第1章 研究の背景・目的及び概念

本研究は、高齢者を主とした単身者あるいは家族が住まう住居内で、居住者が自分たちの生活の場をどの様に確保しているか、言い換えれば各人の「個人空間」の形成の過程や様態を観察やデプスインタビューによる調査によって明らかにすることを目的としている。個人空間という、一般的には個室や寝室など個人が占有している部屋(室)を意味することが多い。ここでは更に、公的な空間(例えば、居間、食堂、ダイニングキッチン等)の中での個人が居る場所とその周辺の環境やそこに共に居る他の人々との関係まで含んだものを個人空間の概念に含めている。この様に室として区画されていない場所での個人空間をも考慮することから特に「場」という考え方を導入したのである。こうした住まいにおける個人の間や個人空間での人々の振る舞いは、住宅の計画段階であらかじめ予測されていることもあるが、居住者の個人空間の形成過程に関する知識は現実には個人や家族が生活を始め、その住みこなし過程の中で、具体的に決められることが多い。しかし、今後、住まいの社会的寿命の延長とか、公共的集合住宅の質の改善によって必須の役割を担うものと考えている。

## 1・1 研究の背景

私たちが日常暮らしている住居の空間には少なくとも二つの意味があるのではないかと考えられる。一つは、天井や壁、床によって、物理的に限定された空間で、「居室、室、部屋」等と呼ばれている。住宅の室の数や種類を  $n \cdot LDK$  という記号として表現される空間である。もう一つは、生活の中で個人が個別に体験し、自分のものと認知している環境である。この空間は、必ずしも物理的に限定された形として取り出せるものではなく、個別性が強く、その境界はあいまいである。本研究ではこの空間を「個人空間」と定義した。ユクスキュル(1934)は、『ある動物がなしうる行為の数だけその動物は自分の環境世界において対象物を区別することができる』とする。つまり、動物がする行為は環境に意味づけをし、その行為の体系が各生物で異なるため、同じ環境の中にあっても、それぞれの「生物の見た世界」が存在する。個人空間は、この「生物の見た世界」と良く似た個人々々による個別の意味づけがなされた、一人一人が見ている独自の世界である、と言うことができる。

現実の住生活の中での個人空間は、必ずしも室と対応していない。例えば、「だんらん」という行為と結び付けられる居間では、実に多種雑多な行為が行われている。居間でなされる行為は家族がそろうという性質のものから、中には自分の部屋で個人的に行われる行為が居間に持ち込まれる場合もある。居間は、「家族という集団が揃って使用する空間」という単純な枠組みでは捉えきれないのである。即ち、室と行為(もしくは機能)の対応という概念は現実の住生活を反映しきれないと考えることができる。従来の住居の研究では、2つの種類の空間の内、物理的な要素で限定された空間を分析の対象とすることが主な傾向であったと言える。本研究では、個人空間を研究の対象とする。そして、この様な個人空間の概念やその視点による分析で得られた知見は、以下に示す様な、住環境をめぐる様々な状況の多様化に対して有用

なものと思われる。

高齢化社会では高齢者の夫婦世帯や高齢者の一人暮らし世帯以外にも、友人同士が集まって住むという形態や、娘夫婦と同居する2世帯居住など居住形態は非常に多様化している。

さらに、住居の供給形態には、コーポラティブハウスやスケルトンの提供というような発想が生まれ育ちつつある。そこでは、居住者が能動的な環境形成をしやすい環境の提供と同時に、居住者自身の空間の形成に対する積極的な態度が求められると思われる。個人空間の概念は、生活者による住居の内側からの環境形成をリアルに捉えることによってこれらの住居に関する考察をさらに深めるものである。

## 1・2 研究の目的

この研究には、大きく分けて三つの目的がある。その一つは、住居内での個々の居住者の住生活の実態を個人空間として捉えることである。住居内の個人空間を描くことである。これまで、住居を知るために行われてきた住まい方調査は、住居とそこに住む家族の生活を臨場感を伴って伝えることのできる手法である。さらに、住みこなし方の特徴を鮮やかに捉えてきた成果は今日も貴重な示唆を与え続けている。ただ一つ、この調査ではっきりと表現することのできない点が、生活者個人々々それぞれの「個人空間」である。住まい方調査では、室の意味や機能は明確になるが、生活者が生活の中で繰り広げるダイナミックな環境との関わりの実態を捉えることは難しい。しかし実際には、例えば同じ室内にも、生活する人が良くいる場所、ちょっとたたく場所などの様な異なった意味を持った場所がある。

K.Lynch(1960)は『都市のイメージ』で一様で画一的ではない都市空間のイメージの抱かれる様子を表わした。それは、人々が認識する部分が、都市全体に均一のではなく、場所によって認識の度合の違いがあること、認識の傾向に差があることなどを示している。それと似たような状況が住居内でも見ることができると考えられる。そして、この「都市のイメージ」が、ある都市の持つ一般的な印象である裏には一人一人の印象の集積があるように、住居についても同様のことが言える。鈴木ほか(1965(鈴木他 1971, 1984))による、団地内を表わした子供たちのイメージマップ調査等の例が示す様に、都市空間に対するイメージマップがそれぞれ異なり、一人一人が異なった認知の仕方をしているのと同様に、住居内の認知の仕方も個人々々で異なるものであるはずである。個人空間の概念は個々に異なる空間内の認知の状況を把握するものである。個人空間は、いくつかの「場」を核として展開されている。研究では、室の枠を超えた個人空間の形成される様子を捉えると同時に、個人空間の意味がどの場所でも同じではないことを形成された「場」の性質をつかむことから理解していくことができると考える。分析されたそれぞれの個人空間を特徴づけ類型化し住空間を考察することが、二つ目の目的である。また、「場」の概念が、計画の中でどのような価値を持ち、どの様に生かすかを検討することが3番目の目的である。これらの、テーマに関連して明らかにする具体的な事項は次の通りである。

1. 個人空間の中に個人が能動的に形成した「場」の特性を捉えること。



2. 「場」の類型化を試みること。
3. 「場」が形成されるためのきっかけについて物的環境とさらにそれ以外の環境の両面から検討を加えること。
4. 形成された「場」の様子と生活の質等についての関連を検討すること。
5. 時間の経過による高齢者の個人空間の変化を「場」の変化の仕方から捉える。
6. 実際に高齢者の住居の計画に対する提言を試みること。

尚、個人空間の分析及び考察は、高齢者（特に一人暮らし）の住居を中心に行った。高齢者が、住生活の中で色々な問題が特に生じやすい対象であること、それと併せて住空間に対してもより細やかな配慮が必要とされる層であること、加えて社会の高齢化という状況が社会的な問題として取り上げられて久しい中で、住居が高齢者にとってあるべき姿を知ることは現時点でも重要な課題として差し迫ったものであるという認識からである。

調査の中心とした一人暮らしの高齢者の他、高齢者夫婦世帯や熟年夫婦の家族世帯についても分析を行い、それぞれの住空間の特徴を「場」の視点から捉えると共に、一人暮らしの高齢者との比較を行う。また、高齢者、熟年夫婦の夫、妻、そしてその子供たちが形成する「場」の様子から世代間の特徴を検討する。

### 1・3 研究の方法

#### 1・3・1 用語の定義

本研究では、既に提示した「個人空間」とそれに付随する用語を使用する。まず、研究の方法を述べる前にそれらの用語について定義を加える。

#### 個人空間の定義

個人空間は、住居内に形成された「場」を核として個人が占有、使用、認知する空間である。住居に複数の人が住む場合は、共用の場所に置いてある個人が占有する道具とその置き場や共用の空間で一時的、あるいは恒久的に占められる個人の場所からなる空間を含める。

#### 「場」の定義

「場」とは、住まいにおける個人やグループ（家族や来訪者）の行為とそれが行われる場所（＝「座」）や人々の位置関係、その際使われるモノとその配列、そのときに認知される物的、対人・社会的環境、それらが成立する時間帯におけるそれら相互の関係の状況である。

個人空間は、ある住居に住まう二人の生活をしている領域が例え同じでも、形成される「場」の数や、「場」の特徴によって決して同じものではあり得ないと言えることができる。

#### 「座」の定義

尚、個人が空間内にとる場所を本研究では「座」として定義した。「座」は、生活する人自身（と来訪者）がある時間を過ごすために居る場所である。「座」は、決まった場所である場合も仮設的、一時的にとられた場所である場合もある。

#### 「常座」（じょうざ）とステーションの定義

一人暮らしの高齢者の住居には特徴的な「座」が見られた。この「座」は食事行為を含む数多くの行為の集まった、日常のほとんどを過ごす「座」で、これを本論では「常座」とした。さらに、日常生活のほとんどの行為が行われ、時としてほとんど一日中いることもある「常座」では行為に必要なモノが、手を伸ばせば届く範囲にあることが多かった。「座」とモノとの位置関係が以上の様な関係にあるものを「ステーション」とした。この2点については、第2章で改めて定義する。

「場」の定義にあたり、行動ではなく行為に着目するとしたが、ここで行為と行動の定義を確認する。

行為：『行動という用語は、行動主義においては刺激によって起こる反応（stimulus → reaction）という意味で使われ、受動的な意味を持っている。これに反して行為は積極的に働きかけられるもので、意思的であり、動機に基づくものであると考えられる。・・・』（誠信 心理学辞典 1981）

行動：『・・・客観的記述を使用とする心理学の用語。この場合、心理学の研究の対象は意識ではなく、行動になる。この意味で、行動は生活体（動物、人）が示す物理的活動のことを意味する。・・・それが物理的に客観的に測定される限り行動と呼ばれる』（誠信 心理学辞典 1981）

即ち、行為は主体が意思を持つという意味があり、行動は意思には着目しない概念である。「場」を抽出するという点においてこれは単純に言葉の問題であると言うこともできるが、生活をする個人の、能動的な環境への働きかけの結果「場」が形成されるという意味から、「行為」という言葉を強調したい。

#### 1・3・2 研究の方法

本研究では実際に調査した住居内での生活から「場」によって個人空間を捉えることを試みている。この様に個性性が強く、かつ物理的に明確に限定できない空間についての研究はこれまであまり多く行われていない。異ほか（1987 p.82-83）は、居場所と行為、そこで関わるものから学生の住空間を表わす試みを示しているが、それによって表わされた空間の分析には及んでいない。本研究では、個人空間の研究の取りかかりとしてシンプルな世帯形態の一つである高齢者の住居の分析を行い、研究全体を通しての基本的概念の抽出並びにデータとした。

個人空間は「場」によって形成されているという考え方（定義参照）から、研究は住居内に形成された「場」を記述し、分析することを中心とする。



具体的な「場」の記述には、住まいの中で個人がどの場所で何をを行い、そのためにどのようなしつらいをしているかに着目する。ある個人が行為をする時に居る住まいの中の場所である「座」がどのような場所にあり、そこで何をしているのか、その行為に必要なモノは何で、どこから取り出されているのかに注目した。同時に空間の中での「座」の向きや実際に行為には関わらなくても「座」から見える周囲にあるモノにも注目する。

「場」は生活をしている個人の能動的な（意識、無意識的な）環境形成の及んでいる範囲を指す。定義でも示したように「場」は必ずしも物的環境だけを意味するのではない。例えば、こたつの脇にいつも友人を座らせる場所、そしてそこで過ごす一時の状況など、对人的、社会的環境をも含む。研究では、個人の「場」と他者の関係にも注目して分析を行う。

また、「場」と室という空間的限定要素との関わり方には、行為を行っている室内の一部で生起する状況である場合も、または室の枠を超えて関わっている状況である場合（例えば、道具を他の室から持ってきて仕事をする時など）も有り得る。加えて、「場」で行われる行為と「座」の関係から、住居内の環境相互の関係を捉え、室という枠組みを超えた生活の実態を描く。

高齢者を対象とした研究の具体的な手順を次に示す。

#### 1. 調査対象者の選定

高齢者の環境行動調査に関するアンケート（1992 高橋研究室）の回答者の中から、ヒアリング対象者を抽出。（資料集参照）

アンケートは対象地区（東京都北区赤羽台団地、及び文京区根津1、2丁目）在住の65歳以上の男女全てを対象とした。回答者の中から、さらにヒアリング調査を行うことを了承し、スケジュールが調整できた人について調査を行った。

#### 2. 個人空間を捉える→分析

被験者の住居を中心とした生活全般に関するアプスイインタビューから、生活者と住居内の環境の関わりを知る手がかりを得る。その際の基本的なインタビュー項目は次の通りである。

##### (1) 基本データとして

- ① 居住歴を中心としたライフヒストリー
- ② 一日の生活時間割
- ③ 趣味や交際、関わっている地域施設などについて

##### (2) 「座」、「場」を記述する直接の資料として

###### ① 住居内の観察と記録

家具の配置、小物を含むモノの置かれる位置、収納されている場所、飾りや植物、仏壇等を図面、スケッチ、写真で記録する。

###### ② 「座」の位置、それぞれの「座」での行為

###### ③ 行為の際の振る舞いに関する質問（モノの位置や収納場所）

##### (3) 「場」の概念による個人空間の分析

#### 3. ヒアリングを行った被験者を対象に継続調査。経時的な変化を見る。

- 2と同様の内容、手順を踏み、比較する。

#### 1・4 既往の住居研究に見られる視点

この研究の特徴は、「場」という概念を用いて分析を行なう点にある。「場」は、「座」・「座」で行なわれる行為・行為に関わるモノを中心とした諸環境により成立している。即ち、「場」の概念による分析とは、ある特定の個人を対象として、これらの要素のある時点において常に行為者自身との関係性に注目して、同時に捉えることである。従来の研究では、これらの要素を個別に捉えたり、単純に生活者と要素の対応の仕方を見ることが一般的な傾向として認められる。

##### 1・4・1 室一行為の対応に着目した既往研究

既往の研究での「行為」という要素の位置付けを見ると、まず第一に、生活と空間との対応を見る際にその機能的側面を知るための要素として捉えられていたと考えられる。例えば、西山（1957）は、住空間の型を考察する論文の冒頭で『生活行為が行われる住空間の配列・構成によって、つまり一定の住み方の意味づけ（機能構成）でうらうちされた住空間の構成・型としてとらえたいと思う』と述べている。この中で行為は『・・・家族とともに話し合い、休養慰楽の一時を過ごす』といった具合に捉えられ、その行為を行うための行為の実態には触れられていない。即ち、行為は主に室空間の機能のラベルとして捉えられている。

室と人と行為の関係からは、住様式が捉えられる。（西山は、先の論文の中で『住様式は住宅と住み手との関わり合い方』としている。）例えば、鈴木（1971）の1957年の電電公社の社宅の調査報告では、住居内の各室の使用状況を家族の各員別に室と調査時に限定した生活行為との対応等により示した。その際、生活行為は「食事（朝・昼・夜）」「家族のだんらん」「接客」「就寝」「主人の読書・書きもの」「勉強」「アイロン・さいほう」に限定している。各室についてこれらの行為の有無を調べ、各室の意味や住み方のパターンを示した。

##### 1・4・2 研究で取り上げられる行為の多様化と分析

研究で取り上げられてきた主な生活行為は就寝や食事、だんらんなど基本的な日常生活行為であった。鈴木は先の調査で、『このような諸行為に分解して分析することが、住生活の全貌を捉えることにならないのは言うまでもない』が、それらを調査のための指定行為としたのは『平均的なヘヤの使い方の現状を表面的に把握しようとしたもの』であるとする。ある生活行為を限定しての分析は、どの調査対象からも同じ質の情報を得ることができるという方法上の利点がある。

しかし、住み方や、ある居室の特徴を明確にするためには、「平均的」な行為以外の行為が行われている実態を把握することが必要と考えられる。近年の研究では、日常の様々な行為をなるべく広範に取り上げようとする姿勢がうかがわれる。ただし、多様な行為が行われている様子を正しく反映することはかなり難しいことであると思われる。生活の実態は個人で異なり、得られる行為内容には様々な質のものが見ら



れる。そこで、それらの行為によって室空間の特徴を言うためには、採取された多様な行為を再び、ある軸を設定して分類するということが必要となる。

宇野ら(1991)は、北海道という地理的に特徴のある地方における住様式の特徴を、住宅の内と外に関わる行為を「中間的行為」と定義し、これらの行為が季節の変化に応じてどの様に住宅内に持ち込まれ方から明らかにすることを試みた。この研究における行為の分類の軸は意味、内容によるものではなく、行為の実態を拠り所としたものである。

また、行われる行為の量から空間を特徴づけた研究がある。住居についての研究ではないが、宮沢ら(1986)は、「発生行為量」という概念から、地域や地域の施設の意味を検討している。この研究では、行為を、人が環境へ働きかける(研究中では地域、施設の利用)事象そのものに着目したものであると見ることでもできる。

本研究での「行為」は、ある個人の生活の実態を知るための要素である。行為は何をしているかという内容とともに、どの様にして環境と関わっているかを知る重要な手がかりである。従って、ある行為の結果に至る過程にも注目する。

#### 1・4・3 空間内での個人と行為の対応に着目した既往研究

家族の「型」と住み方の対応を見るだけでなく、家族の成員間の関係性に言及しようと試みた研究がある。

例えば、家族の成員それぞれの属性に着目し、室空間内での行為を切り口としてそれぞれの属性としての住様式の特徴や、ある家族内で見られる各成員の住様式の関係から室空間の質について考察を加えるという視座を持つ研究として次の様なものがある。竹下ら(1992)の家族コミュニティに関する研究では、居間における家族の成員の属性による(父、母、子供)行為の特性を見るだけでなく、VTR調査を15家族に対して行い、それぞれの家族について居間での行動特性を個別に明らかにしている。

即ち、このような個別の検討を行うことによって家族の成員間の関係性についての考察が可能となる。竹下の研究では、この点を明らかにすることが主たる目的であったこともあるが、これまでの研究は、ある住居内で営まれる生活の全体を見るもので生活者個々の関係性は見ていない。しかし、住生活において物的環境だけではなく、対人環境も住まい方に影響を与えていることは経験的にも明らかであり、様々な点で「家族」が問題とされる昨今において考慮していくべき点であるとも考えられる。小林(1995)も既往の研究が触れなかった部分として『近代化型住宅の背景にある家族像との関係』を指摘している。

竹下は、先にあげた研究の中で『(子供のいる家族の)居間での質の高いコミュニケーション行動は居間の空間概念が主体系の性格を弱め、総括行為系として成立することで保障されることが明らかになった。』とする。主体系の室とはある個人の専用性の高い室を指し、総括行為系の室とは各成員による多様な行為が行われる空間を指す。竹下は居間が総括行為系の室であることを評価する。この様に、個々の生活者に個別に観察し検討を加えることは、よりよい生活が営まれる空間を考える上で、ライ

フステージ等による家族の型と住居、生活との関係からだけでは読み取れない空間の質について言及することが可能となる。

#### 1・4・4 場所と行為の対応に着目した既往研究

既往の研究では、住居、特に住生活全般を捉えるのに室以外の空間の概念を用いたものは少ないが、室空間を目的行為と対応した空間として全体的に見ることをせず、行為を行う人のいる場所に注目した研究がある。木原ら(1991)は高齢者が住居内で食事、就寝、接客、テレビ視聴等の基本的な行為が行われる場所を調査し、分析を行った。室の数ではなく、「座」の数によって、主に社会的交流の視点と住環境の視点からの検討を進めている。この様に居室と行為だけではなく、場所に注目することによって、環境と生活の実態が見えてくると思われる。「場」の概念では、行為に関わるモノと「座」の関係を見ることによって、生活者の能動的な環境形成の結果としての個人空間を捉える。行為の項で取り上げた鈴木(1957)でも住居内の家具配置と成員が着席する位置等が記されていたが、行為が行われる場所についての言及は特になされていない。

塩谷(1992)は、家族生活の場における住様式について、行為を行う人と、その周囲の環境に同時に着目した研究を行った。この研究は、住様式を捉えるにあたり、「生活体」(家族一人一人)と「生活の場」(『生活体の生活に必要な、また何らかの関係を持つもろもろの事物によって構成される具体的な住空間』)を定義し、その関係に迫った。ただし、ここで塩谷の言う「場」とは、予め置かれている家具等のセッティングを指し、行為を行う人が能動的に形成する環境ではない。

さらに、人と諸環境との関係も視座に据えた研究として行動場面に関するものがある。居間にいる家族の居方を行動場面として捉え、分析した研究(場所・行動研究会1991)がある。ある場面の生起に影響を与えている環境としての家具配置や家族の居方、行為の内容、住戸平面等を考えている。

#### 1・4・5 個人の空間の形成の仕方を実験によって捉えた既往研究

個人空間は個人が能動的に形成する空間である。こういった個人が独自に形成する空間の把握は実験に基づく研究によっても試みられている。

例えば、坂戸の箱庭作品群に関する一連の考察(1987他)、平沢、丸山ら(1989)によるオフィスの座席まわりの好みに関する模型実験による考察、岡崎ら(1993)の精神分裂病の患者の空間構成の特徴を箱庭を模した模型実験によって考察した研究がある。そのいずれも、箱庭療法(Lowenfelt, M 1929 (河合編 1969 P.4-P.30))に想を得たもので、箱の中に表現された物の構成を客観的に分類、類型化を行うものである。従って、物を配置する被験者を中心とした、被験者と物との間の関係性への興味はあまり強くないように思われる。これらの研究は、模型ながら、実際に被験者に生活空間を形成させているが、結果的に住まい方研究の様に、全体的な景色として



形成された空間を読んでいる。形成されたものは確かに個別であるが、配置された物や人との間の関係性が明らかではない。空間を形成する本人、またその空間を分析する時の視点もともに、形成された空間の外にある。本研究では、ある「座」において具体的に関係するモノと「座」との関係性を「場」として捉えている。即ち、実際に生活者が空間を形成している視点を分析の時点でも維持するものである。この点が、人が形成する空間を実験的に把握する研究と最も異なる点である。

#### 1・4・6 家具やモノに関する既往研究

本研究では、「座」に居て関わる環境を全て含めて「場」として捉えている。たいいの場合、家具は「座」や「座」を支えるものとして、モノは具体的な「場」の形状を表わす要素の一つとしての意味を持つ。既往の研究の中での家具やモノは、様式や室の規模を考察するための対象とされる傾向が強く見られる。

例えば、住様式に関わる研究では、家具を種類や使用者等から室の性格を見る場合がある。また、渡辺ら(1982)では家具を含む物品と人との関係の在り方から「生活様式」について総合的にまとめている。ここで生活様式は『具体的生活行為に形態的特徴』、生活行為は『生活空間をはじめ、諸物質の存在が成り立っているものであり、これら(モノ)に保障された人間(ヒト)の行為形態の特徴』として定義されている。似た視点を持つ研究の例として、山口(1991)は、チャプダイという一つの家具に限って、食事の様式や、起居様式の変化、家族関係の変化等について論じている。石渡(1973)は、その時点での住生活を映すものとして生活行為と家具・機器、及び住空間の状況との関係について検討した。

特に起居様式に視点をしぼった家具の性状や配置の様子と家族の型、人との関係を見たものに沢田(1993)等の研究がある。その他、家具そのものに焦点をあてた研究としては、家族のライフステージと家具の種類や量に関するもの(例えば既に例としてあげている鈴木(1957(鈴木他 1971))の調査)や、住居内の家具密度から考察を試みたもの(山本他 1983)、室空間内の家具の量が人の心理に及ぼす影響について検討したもの(馬場他 1988)等がある。

物品に関しては、1970年代の研究に、住戸の規模的な側面と結び付いたものが見られた。佐々木(1981)は『スペースと行為と物の関係について調査し、行為とスペースの関係について考察を行う』とした生活との関係の中で物品を見ようとした。江上(1992)は、居間での行為の多様性に対応する要素の一つとして「モノ」を取り上げ、行為に対応した諸物品の種類、在り方(「見える」「見えない」)や「散らかり評価」と居間の形状、住居との関係等について分析を行った。江上は、家族の居間としての物品の状況を捉えたが、本研究では家族それぞれについて個別に捉え、それぞれの行為に関わるモノと「座」の位置関係等を捉えていく。

#### 1・4・7 「場」を形成する要素としてのモノに関する既往研究

本研究では「場」の定義に示した様に日常の行為に使用するモノに注目した。モノは、生活者との関係において空間を形成していく。古来の日本の住空間では、日常は特に何も無い状態にあり、場面にあわせてその時々用途にあった家具や道具を配置するという「しつらい」という行為を行った。

宮内(1988)は屋根と床の構成として捉えられている日本の空間では、『可動な調度をあたかも芝居の小道具の様にして使用して生活を営んできた』とし、わが国の「住まいともの関わり」の基層として位置付けている。

多田(1978)は、皮膚で仕切られた自分自身を「第一自分」、自分だけの部屋を「第二自分」とした。多田は、第二自分は外部の人工的な環境とは、少しずつずれながら密室、個室、個室から出た家、通りへと行く様につながって行くとしている。自分の力の及ぶ所、自分の表現、感覚的な意味づけの可能なところが第二自分である。つまり、個人が住居の中で知覚する部分である個人空間と良く似た概念である。(ただし、居間での家族のだんらんのような社会的な関わりが生じる所では多田の第二自分の概念は曖昧である。)

そして、『自分のそばに何を置くか、何を選ぶか、何を自分の外延と見なすか』という様に、自分自身を『延ばしたものが第二自分となる、というものが私たちの生活の中にあるのではないかと』言う。即ち、身辺に揃えられたものは「価値のシステム」を持ち、それが自分というものを作っている。そして、このシステムが何か深い意味を宿しているのだろう、と続けている。

(この様な感覚は日本人特有のもので、ヨーロッパでは同じ外延としてもものを見なすのでも、手の延長としての道具、目の延長としてのテレビというように、超越自我的なものであるとも指摘している。)

自分のそばに置かれた、自分の外延としてのモノの在り方は、本研究における「場」の一つの形態であり、断面であると言える。例えば、一人暮らしの高齢者が日常を過ごす「座」の周囲には、日常生活に関わる多くの物品が置かれ、近くにあることの機能性と同時には完全に日常生活を反映している場合も多いのである。

モノを手がかりに住空間の質を論じたものに、栗田(1985)がある。栗田は住居内に存在する全てのモノを研究の対象とし、家庭の姿やモノを媒体とした住様式、住居の意味を論じた。『生活者が潜在的ないしは顕在的に志向している価値観に即して実現される生活の諸相』をライフ・スタイルとし、生活財の徹底した調査からそれを知ることを試みた。生活の行われる空間の規模をもとに、4つのステージに分け、生活財に関わる分析結果との相関を引き出し、ライフ・ステージの概念を導き出した。しかし、ここでモノはあくまでも家庭内にある物を客観的に記述する対象であり、現実の生活での人との関わりについて言及する対象ではなかった。



## 1・5 既成の分析概念・空間論との違い

この節では、既成の分析概念や空間論と「場」の概念の比較を行い、「場」の特徴を明らかにする。

## 1・5・1 単位空間の概念との違い

「場」は、人が自ら自身の周りに形成する空間で、『人を中心とした柔らかな空間として、個体距離が作る空間』（市橋1984）であるパーソナルスペース（Hall 1966）の様に、準身体的な空間であると言うことも可能であるが、パーソナルスペースとは一致しない。「場」は、パーソナルスペースを持った人間が形成する、環境との関係であることから、これを含む概念とすることができる。よって、空間内に他者の存在が認められたり、存在が予測される時、他者の影響が、形成される「場」に何らかの影響を及ぼすことも考えられる。

『・・・動作空間はその大きさに近似した建築モジュールによって寸法が選択され、部屋としての実在の空間ができ』（旧資料集成3）あがった空間を単位空間と呼ぶ。動作空間とは、住居内での生活行為において『個人や複数の人々が一定時間ある場所を占有する。その際、人体や動作それに必要な物品とその可動部分などが占める広がり』（同前）としての占有領域の最大の広がりである。しかし、様々な生活行為の「動作域」を満たさないような（例えば屋根裏の様な）小さな空間が楽しい場所として利用されることがある。日常の生活では常に規模を満たすことが第一の要件ではないのではないか。従って、単位空間の概念だけでは補えない部分のあることが予測される。また、単位空間の概念には生活者による自由な空間の展開は含まれず、予め考えられている場面も限定されている。しかし、現実の住生活を支えるためには、単位空間の概念では捉えきれない、生活者の多様な生活の仕方を予め含めて検討することが必要である。そして、それには、人が生活する容器としての空間ではなく、人の行動そのものを支える環境としての視点を持つことが必要である。「場」の概念を持つことで生活者の生態に即した規模や空間の単位を新たに提案することもできるのではないだろうか。

人の行動を支える環境という視点を持つ概念に、ある（構築）環境について『その中で起こる定型的な、あるいは繰り返し起こる行動パターンとの間の関係』（J. ラング1987）とした行動セッティング（Behavior settings, Baker 1968他（Lang 1987））の概念がある。しかし、「座」を中心として生活者が日常の生活行為のために形成した「場」は一種の行動セッティングではあるが、刻々と変化する生活者の日常生活の状況によって、可動な物的環境の状況は常に変化しうるものである点が行動セッティングと大きく異なる点である。加えて、「場」は、「場」を形成した個人にとって意味のあるもので、他者には同様の意味を持たない。「場」はある個人のある時点での生活そのものである。そして、単位空間や行動セッティングの概念の様に、構成する要素は限定されず、変化する可能性を持つ。

## 1・5・2 既往の空間論との違い

保坂ら（1964）は、住空間が機能と室の単純な対応では成り立っていないのに暗黙のうちに『一対一の対応としている』と指摘した。保坂らは、『（室名と）行為と一致しない場合が多い』ことを実証するために、『人間の意識から空間を捉え』る方法論を展開した。その上で人の意識の下の住居を描くことを目的とした。そのために、行為や「～するところ」としての大道具などに着目している。この様な視点は本研究と半ば一致するところであるが、保坂らが室によらない「住居」を捉えることを目的としたが、特に生活者個人の空間について着目したわけではなかった。本研究は、個々人に着目し特に「個人空間」として捉えることを試みるもので、この点が保坂らの研究の目的と異なる主な点である。

『人間の意識から空間を捉える』といった保坂らの指摘と同様に、広部（1987）も、計画学では『限定された意味での住行為が一定の構成要素に、例えば食事、団らん、就寝、排泄等々に分解されて行為の系をなし、一方これら諸行為の単位に対応して一定の空間単位、すなわち部屋が与えられ、これらが一体となって空間の系（一つの建築）を作ると考えられている。』として、人の諸行為が一定の行為の単位に安定して分解できること、行為に対応する空間形態に対する規定のないことについて疑問を出している。広部は、建築空間一般（人の住む空間）を『既に完成された、われわれの身の回りにある物との交渉やそれらの解釈の上に成り立つものとして規定』し、創作論を展開している。

以上2つの研究では、住空間を住空間の中での人の行為に発する現象によって捉えている。本研究でも個人空間を日常生活行為によって立ち現われる現象から捉える。この様な視点によって『生きられた経験の中に現前してくる生きられた空間』（Keen 1975）を捉えることができる。この空間は『その中でもろもろの物を動かし、いじり、掴み、ひっくり返し、それらの物の周りを回る、そういう空間』（同前）である。

保坂らによる住空間の捉え方において注目された行為をする場所を提供するような、大道具としての家具類は本研究では住戸内の「座」として捉えられる。従って、大道具のある所では居住者の「場」が形成される可能性を持つ。また、広部の論は建築空間の創作のための論であるが、設計の際に『住む人間の関心の対象』の範囲の設定、行為と物的な配置を関係づけている点で「場」の概念に近い。

広部、保坂らと「場」の概念の共通するところは住空間を室と対応するものとして捉えることをしないこと、実際に生活をする人が関係する場所を空間として捉えようとする態度である。

単位空間では、行為は目的を示し、目的のための一連の動作から規模や行為のための動線が抽出される。従って、極めて客観的な空間である。対して、行為の能動性を重視した「場」の概念では、なぜそこを「座」としたのか、なぜその環境と関わったのか等、環境の意味やどの様な行為が可能なのかという可能性の質にまで、言及する。また、単位空間は、ある動作に必要な空間の広がりであり、そこでの特定された行為との対応関係を持っているが、「場」は、複数の行為との対応によって形成される場合もあり、行為の内容は変化する可能性もある。従って、「場」はある形態として決定さ



れることはない。

## 1・6 論文の構成

本論文の構成を以下に示す。

### 第1章(本章)

本研究の背景、目的、及び概念等について述べる。諸概念の定義を行う。

また、研究方法の概要を示す。

### 第2章

赤羽台団地、根津地区で行ったヒアリング調査の対象者計39名のうち、一人暮らしの高齢者25名について、個人空間の考察を行う。個人空間の特徴を「場」の形成状況から捉える。

始めに、住居内で「座」がどの様に分布しているかを調べ、次にそれらの「座」と、「座」で行なわれる行為、行為に関わるモノの関係から「場」を捉え、分析を加える。一人暮らしの高齢者の個人空間に一般的に見られる特徴的な点について明らかにする。

また、この章では、個人空間に「場」の概念によって分析を加える手法を明確に提示する。

### 第3章

第2章のヒアリング対象者の内、2年後もヒアリングを行うことのできた計14名の個人空間の経年変化の分析を行う。家具配置、「座」の数や分布の状況、「場」の変化等から考察を加える。また、高齢者の対人環境や体力面の変化と個人空間の変化の関係について検討を行い、これらの要素が個人空間の形成に及ぼす影響について考察する。

この章は、日常生活が個人空間の形成に及ぼす影響についての検討でもある。

### 第4章

高齢者の夫婦世帯で形成される個人空間について考察する。調査対象は赤羽台団地と根津地区の高齢者の夫婦世帯8世帯である。分析の手法や着目する点は一人暮らしと同様で、一人暮らしの場合との比較を中心に研究を進める。即ち、自分以外の人と同居することが個人空間の形成にどのような意味を与えているのかを考えることを目的とする。

また、2年後の調査を行なうことのできた4例について、高齢者夫婦世帯における個人空間の経年変化に関する考察も行なう。

### 第5章

大学生の子供のいる核家族10世帯の家族の成員それぞれが住居内に形成する個人空間の分析を行う。分析の対象とするデータは大学生とその家族に対する一部ヒアリングを含むアンケート調査である。高齢者と異なる世代であり、少なくとも一世帯に3人が居住する状況の下での個人空間の形成の状況を、高齢者の個人空間の特徴と比

べながら考察する。

複数の人が共用する空間の特徴を、それぞれの人の「場」の形成の仕方の次元から明らかにすることも試みる。また、家族の中での異なる属性(夫、妻、子)別に見た個人空間の比較を行なう。

### 第6章

一人暮らしの高齢者、高齢者夫婦世帯、大学生の子のいる世代の核家族世帯の夫、妻、子が形成した個人空間の特徴をまとめて比較する。

高齢者の住空間についての提言を研究を通して得た知見をもとに試みる。



## 1・7 本論文に関わる調査

本論文のためのデータを得た調査は次の通りである。

- 第2章、第3章、第4章の高齢者の住環境に関するデータ  
「高齢者の住空間に対する環境行動的研究」 1993年 高橋研究室
- 第3章 高齢者の住環境の2年後の調査  
橋弘志氏との共同調査 1994年
- 第5章 核家族の住環境に関するデータ  
金平真理子氏との共同調査 1993年
- 第5章の参考とした実大空間での実験に関するデータ  
M<sup>3</sup>住宅開発研究(住宅・都市整備公団)の一環として行われた動的スペーススタ  
ディを中心とした実験  
中山優子、土師真祐子、谷口久美子氏との共同研究 1993年
- 第5章の参考とした、家族が集まる空間での行動場面に関するデータ  
「住居における行動場面に関する研究」 1991年 場所・行動研究会
- 第6章で参考とした学生の自室の使い方に関するデータ  
都内の専門学校でアンケート調査を実施 1992年

## 第2章 一人暮らし高齢者の個人空間に関する考察

この章では、一人暮らしの高齢者の個人空間について考察を加える。高齢者の住居は「場」の概念を用いて細やかに検討すべき対象の一つと考える。「一人暮らし」は、都市化した高齢化した社会での特徴的な居住形態の一つであり、現在様々な点で問題点が指摘されている。また同時に一人暮らしは居住形態でもあることから、「場」の概念による個人空間に関する研究のはじめに検討を加える対象としてふさわしいものである。本章の目的を以下に整理する。

1. 「座」の特徴を捉えること。  
住居内にある「座」の数、分布。「座」としてとられた場所の環境の特徴。
2. 「場」の特徴を捉えること。  
「座」と行為の対応関係。「座」での行為に関わるモノと「座」の位置関係。「座」の周囲のモノ環境。
3. 一人暮らしの高齢者の個人空間のモデル化を試みること。

この章の考察は高齢者を対象とした住環境および日常生活全般についてのヒアリング調査の結果に基づいて行った。調査対象の概要を以下に示す。

## &lt;調査概要&gt;

この調査は、文京区の根津地区、北区の赤羽台団地の2つの地区で65歳以上の男女全てを対象としたアンケート調査を行い、回答を得られた中でヒアリング調査の了承を得られた人を対象として根津地区26名、赤羽台地区23名についてヒアリング調査を行ったものである。ヒアリング調査には、2章の分析対象である一人暮らし世帯の他、夫婦世帯も含まれている。調査の詳しい内容、及び単純集計等については資料編に記した。

対象地域の、公団の赤羽台団地と下町の根津地区の選定に当たっては、

1. 地域性、および住戸形態の違いによる比較が可能であること。(昭和30年代後半に開発された団地である赤羽台と関東大震災や第二次世界大戦での被害の少なかった都市部において比較的住戸の様式が揃った地域としての根津)
  2. 両地区の規模(広さ、および住民数)が同程度であること。
- 以上2つに加えて、両2地区は東京の住形式の典型であることから調査対象として適切であると判断した。

表・2・1 分析対象の概要

	データ番号	男女比
北区赤羽台団地	11名	SA1からSA11まで
		男性2名、女性9名
文京区根津	14名	SN1からSN14まで
		男性3名、女性11名



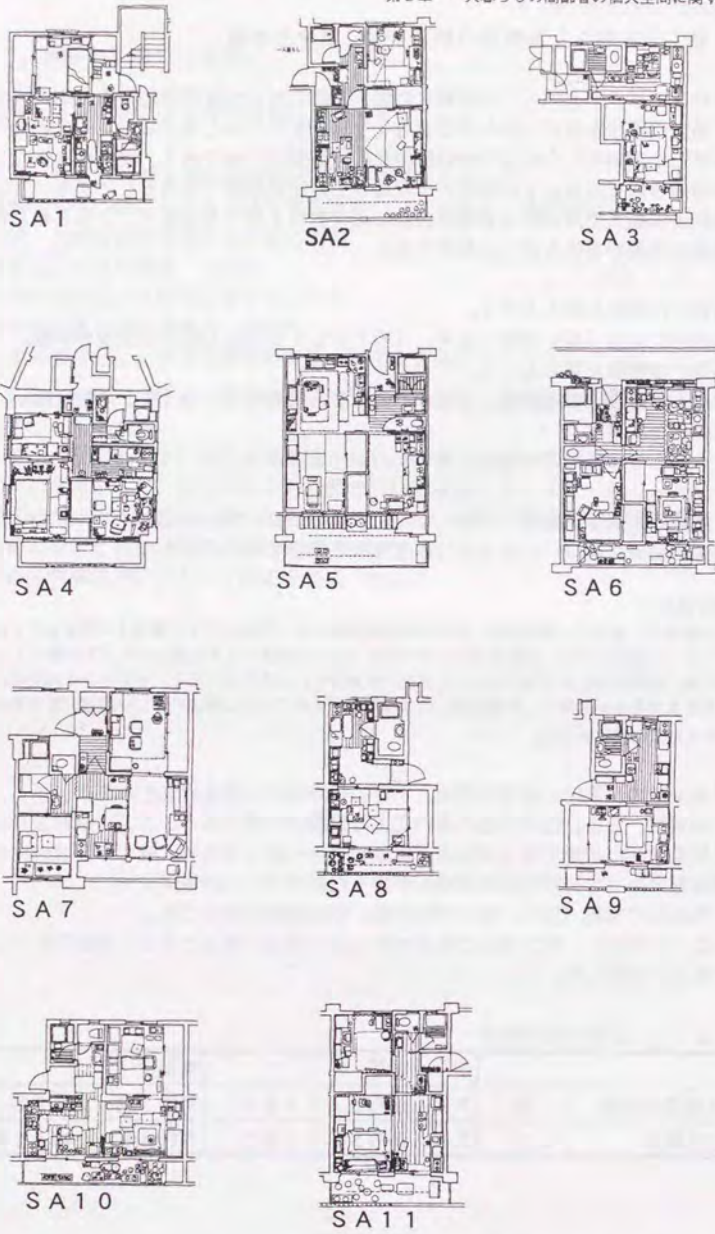


図 2・1・1 住居内部 (赤羽台)

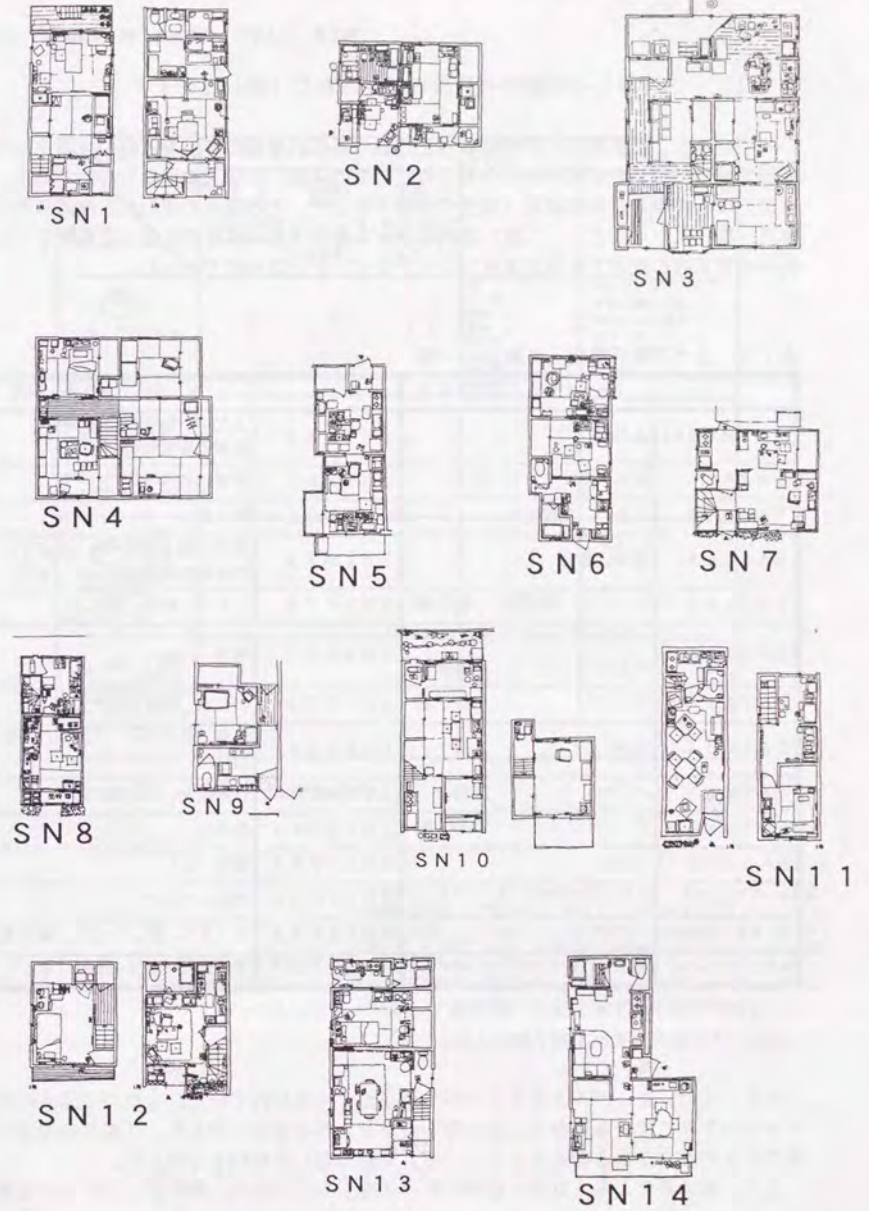


図 2・1・2 住居内部 (根津)



2・1 一人暮らしの高齢者の住居内で見られた「座」のタイプ

まず始めに、一人暮らしの高齢者の住居内の「座」を周囲の環境と共に抜き出した。時間の長短に関わらず何かを行うところとしての「座」には次の様なものがあった。「座」は人が座するための家具（椅子や座椅子など）、その場所で使われる座具以外の家具（机、こたつなど）、「座」を誘発させる場所（畳の部屋の決まった場所など）、何かをするのに使用する道具家具（ミシンなど）が主なものであった。

表・2・2 「座」を支える家具の一覧

	「座」を支える家具・環境		「座」を支える家具・環境
SA1M69	こたつ	SN1F80	こたつ、座卓、仏壇、机、2階の座敷
SA2F78	座卓、、机	SN2F81	座卓、布団の中
SA3F79	こたつ、布団の中	SN3F80	堀こたつ
SA4F68	座卓、鏡台	SN4M72	座卓、机、布団の中（おばさんの部屋の堀こたつ、テーブル）
SA5F68	テーブル、、椅子座	SN5F79	こたつ、仏壇、鏡台
SA6F78	ベッド+ティーテーブル、こたつ、椅子座	SN6F77	座卓
SA7M68	テーブル、椅子座	SN7F75	こたつ、座敷
SA8F74	座卓	SN8F76	座卓、、、作業台
SA9M69	こたつ	SN9M67	布団の中、道具箱の前
SA10F85	テーブル、こたつ、椅子座	SN10M65	座卓
SA11F67	こたつ	SN11F65	座卓（2）
		SN12F65	座卓、ベッド
		SN13F68	テーブル、机、ベッド、椅子座
		SN14F67	座卓、（ソファ：冬の「座」）

□「常座」が椅子座である場合 椅子座 のマークを記した。

：その他の「座」で椅子座のもの。

卓としては、テーブルよりもこたつや座卓がよく使われていた。こたつや座卓の卓上がすっきりしている場合と、色々なものがおかれる場合とがある。「座」の周囲に家具やものがおかれる様子をともに「座」を類型化して傾向を分析した。

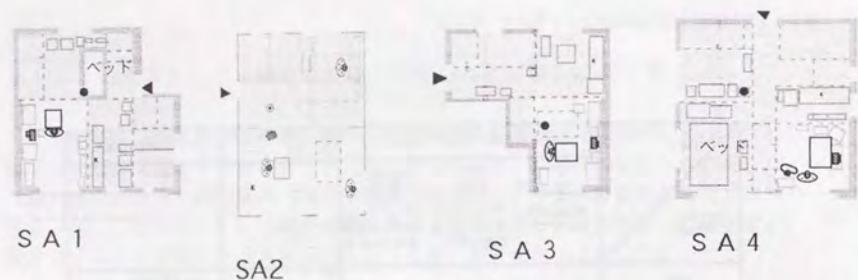
また、家具等による「目印」が特にならない「座」も見られた。例えば、SN1の2階座敷にある亡夫の遺品整理をする「座」は、必要な時にだけ現われる「ポータブルな座」である。

「座」を支える家具等	卓と座具等との対の「座」			机、道具にとられた「座」	その他の「座」
	□ 卓上には殆どモノがない	 卓上にモノが置かれている 乱雑な感じ	 卓上にモノが整理されて置かれている		
「座」の周囲の様子は 何も無い	7	1	11	机 3 キーボード 1 鏡台 3 仏壇 3 座り机 1 ミシン 1 道具箱 1 按摩椅子 1	ベッドに座る 1 布団に横になる 1 布団の上に座る スペース 3 踏台に履掛ける 1
「座」の周囲には モノが置かれている	1	2	1		布団に横になる 1
「座」の近くにモノが 収納されている	0	0	6		布団 1 ベッド 1
「座」の周囲にモノが 置かれ、収納もされている	1	1			

図・2・2 一人暮らしの高齢者の「座」の特徴

住居内にとられた「座」の特徴を捉えるために、座がとられている家具の種類を調べる。この調査では、表・2・2で示されているように、卓（こたつ、座卓、テーブル等）と、ある限定された目的を持つ家具（机、キーボード、仏壇等；ただし、仏壇は本人が「座」としてあげたときに採用した。）、その他のものが見られた。次に「座」の周囲の様子に注目した。本人の周囲のモノの整理のされ方には違いがみられた。卓上と、卓上以外の部分に分けて図の様なマトリックスを組んで特徴を表わした。





- 卓 (座卓、こたつ、テーブル等)
- 電話、インターフォン
- テレビ
- 布団を敷く位置
- 「座」



図 2・3・1 住居内の「座」の分布 (赤羽台)



- 卓 (座卓、こたつ、テーブル等)
- 電話、インターフォン
- テレビ
- 布団を敷く位置
- 「座」



図 2・3・2 住居内の「座」の分布 (根津)



## 2・2 「座」の数と住空間の関係

「座」、及び住空間に関わるものを抽出し、分析を行った。

## &lt;抽出事項&gt;

「座」の数、住居様式、室数、最も日常的な「座」での滞在時間、日常的な「座」のある室の面積、日常的な「座」のある室にある「座」の総数、日常的な「座」のある空間と就寝空間が一致しているかどうかを調べた。

各項目の具体的な内容は下に示す通りである。

表・2・3 分析項目一覧

「座」の数	住居内にある「座」の総数。
住居様式	赤羽台団地 もともとの住戸プランにより1DK、2DKといったタイプを住居様式とした。 根津地区 根津地区の場合は次の項目の居住スタイルのみとする。
居住スタイル	実際の住まい方の状況から、部屋数、台所の数で表現した。特に赤羽台の場合は、DKと続間を1ルーム化して使用する例が多く見られ、これをLKとして表現した。
室数	居室となり得る部屋数。
「常座」	一日の大半を過ごす「座」を「常座」とした。
居間面積	一日の大半を過ごすような「常座」がある空間を「居間」とした。
居間にある「座」の数	居間にある「常座」と「常座」以外の「座」の数の和。
就寝との一致	居間で就寝行為も行われているかどうか。

## 2・2・1 一人暮らしの高齢者が住居内に持つ「座」の数から見た特徴

インタビューでは、一人暮らしの高齢者の住居では、就寝以外の日常の多くの行為が集まり、生活の中心的な「座」が見られた。そこで、このような「座」を「常座」として定義した。「常座」では主に住居内での基本的な行為が行われ、日中の時間を過ごす様子が見られた。高齢者は家にいる時間が長い、ほとんど外出行動の無い人はほぼ一日、「常座」にいる。

「座」と行為の関係については後の節で詳しく述べるが本調査で見られた「常座」では、下宿住まいや寮で暮らしている人の例を除いた全てで日常の食事行為も行われていた。

「常座」は、赤羽台団地の1例を除いて住居内に1ヵ所である。一人暮らしの高齢者の住居内にある「座」の数は、平均2.5箇所、で、「常座」のある空間の「居間」にある「座」の数は「常座」を含めて1.5ヵ所以下である。この結果は、一人暮らしの高齢者の住居には、一日の大半を過ごすような「常座」と他の「座」が少なくとも一箇所はあるが、それは二つ以上の室にまたがってあることが多いことを示している。住居内での高齢者の生活は次第に一つの空間へと縮小していきと言われているが、「座」は決して一つの室に収まるわけではない。しかし、一人暮らしの高齢者には「常座」という特徴的な「座」が存在する傾向が強い。

表・2・4 一人暮らしの高齢者の住居内にある「常座」の数と「座」の合計

座の数	赤羽台団地		根津地区	
	「常座」	住居内の「座」の数の合計	「常座」の数	住居内の「座」の数の合計
1	10例 SA10以外全て	3例 SA1、8、9	全14例	3例 SN3、6 10
2	なし	5例 SA3、4、6、 7、11	なし	7例 SN2、4、7 9、11 12、14
3	1例 SA10	1例 SA2	なし	2例 SN5、13
4	なし	2例 SA5、10	なし	1例 SN8(SN4)**
5	なし	なし	なし	なし
6	なし	なし	なし	1例 SN1

\*「ポータブルな座」として確認できた「座」は全てカウントした。ただし、その様な「座」が見られたのはSN1のみである。

\*\*SN4は、SN3の家に下宿する。朝と夕方の食事の前後に階下のSN3宅に取る「座」が2



カ所ある。

### 2・2・2 「居間」の面積

「常座」のある室の面積の平均は約11.3㎡(約6.8畳)であった。

### 2・2・3 「居間」にある「座」の数

一人暮らしの高齢者の「常座」について分析を行う。調査では「常座」のある室が、「居間」であった。居間に「常座」以外の「座」が見られたのは、赤羽台団地に4例、根津地区に7例である。赤羽台団地のSA10は居間に複数の「座」があるが殆ど同質の「常座」である。SA10の様に複数の「常座」を持つ例は他になかった。

一般に、一人暮らしの高齢者の居間には「常座」だけがある傾向が強い。この傾向は、赤羽台団地でかなり強く見られた。

「居間」に複数の「座」を持つ場合、「常座」以外の「座」は何か特別な目的行為に使われる専用の「座」であった。よって、「座」にいる時間もその行為を行う間に限られることが推測される。そこで、これらの「座」の呼び名を便宜的に「目的座」とする。「居間」での「目的座」となっていた「座」を支える環境要素を表・2・6に示す。

表・2・5 「居間」にある「座」の数

	居間に「座」が一つある	複数の「座」が居間にある
赤羽台団地	6例 SA1, SA5, SA6, SA7, SA8, SA9,	4例 SA2, SA3, SA4, SA10, SA11
根津地区	7例 SN2, SN3, SN6, SN7, SN10, SN12, SN14	7例 SN1, SN4, SN5, SN8, SN9, SN11, SN13

表・2・6 居間にある「座」を支える物的環境

	「常座」を支える環境	「目的座」を支える環境
SA2	座卓	キーボード
SA3	座卓	布団の中
SA4	座卓	鏡台
SA10	テーブル、座卓	なし
SA11	座卓	座卓
SN1	座卓	鏡台
SN4	座卓	机
SN5	座卓	仏壇、鏡台
SN8	座卓	作業台、ミシン
SN9	布団の上	道具箱
SN11	座卓A	座卓B
SN13	テーブル	机

\*SA10は、同じくらいの使用頻度のテーブルと座卓に「常座」がある。座卓に取る「常座」は2カ所、特に優位な位置はない。

「目的座」を支える物的な環境には、キーボードやミシンの様な単一目的のための道具、行われる行為が限定された「机」、その他に仏壇や鏡台が見られた。

### 2・2・4 「座」の様子から見た居住スタイル

赤羽台団地では、「座」がないDKや、2室を一つづきとした使い方が見られた。つまり、DKとして用意された室空間が「D」として使用されていなかったり、隣室との境の襖などを取り払って1室として使用するなど、当初のプランが誘導しようとしたと思われる住み方と、実際の住み方が一致しない場合があった。2室を一つづきにしたものはn-DKタイプのプランでDKに対する続間をDKと一繋がり空間として1ルーム化という形で見られる。

表・2・7 住居形式と居住スタイルの対応

住居形式	2DK以上	1DKタイプ
事例数	8例 SA1, SA2, SA4 SA5, SA6, SA7 SA10, SA11	3例 SA3, SA8, SA9
内1ルーム化のある事例数	3例/8例 SA2, SA7, SA11	なし



また、DKに「座」がない例が6例あった。1DKタイプの3例全てにDK空間の「座」がないことは特徴的である。1DK以外のタイプでは、DKをその続間と1ルーム化したものはリビングキッチンとなってこの部分に3例とも「常座」がとられていた。1DK以上のプランの残りの5例の内、DKに「座」がとられていたのはとSA10の2例であった。SA5は、自宅で仕事をしている。仕事以外はDKにある「常座」で過ごす。夫の没後、住居内部を改修し、その際、DKも自分にとって使いやすいようにしている。従って、SA5のDKは、むしろ1ルーム化したもののグループと考えることもできる。SA10は、連続はしているが室として異なる空間に「常座」を複数とる例であり、ヒアリングの中で唯一複数の「常座」を持っていた。

表・2・8 DK内における「座」の有無

	DKに「座」がある	DKに「座」がない
1ルーム化したもの	3例 SA2, SA7 SA11	
1ルーム化していないもの	2例 SA5, SA10	6例 SA1, SA3 SA4, SA6 SA8, SA9

2・2・5 「常座」と就寝行為の関係

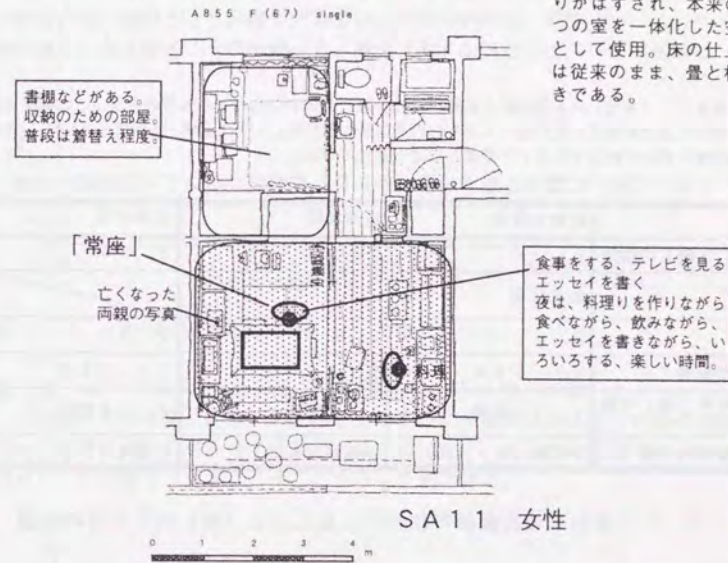
「常座」のある居間の性質をさらに詳しく見るために、居間での就寝行為の有無を調べた。その結果、赤羽台団地と根津地区とでは異なる傾向が見られることが分かった。

赤羽台団地では住居内の「座」が「常座」のみの一箇所であることが多いのだが、就寝が同じ空間で併せて行われる割合は根津よりも多い。就寝行為が「常座」と同室で行われる8例のうち、3例は1DKのものであるためそのような生活形態が誘導される可能性は極めて高い。しかし、根津では就寝行為が同じ空間で行われる例は5例であり、割合からは根津のほうが就寝行為場所と「常座」の分離が高いことが明らかである。

表・2・9 居間での就寝行為の有無

	就寝行為あり	就寝行為なし
赤羽台団地	8例 SA2, SA3, SA5, SA6, SA7, SA8, SA9, SA11	3例 SA1, SA4, SA10
根津地区	5例 SN1, SN5, SN7, SN9, SN10	9例 SN2, SN3, SN4, SN6, SN8, SN11, SN12, SN13, SN14

<1ルーム化>  
DKと続間の和室6畳をひと続きの空間として使用。間を仕切っていた間仕切りがはずされ、本来の2つの室を一体化した空間として使用。床の仕上げは従来のまま、畳と板敷きである。



図・2・4 1ルーム化した住み方の例



## 2・2・6 「座」を中心とした赤羽台団地と根津地区の個人空間の特製と比較

住居にある室数は、赤羽台団地が平均2.5室、根津が2.6室である。その人にとって「常座」のある室の面積は赤羽台の方が広い。これは、赤羽台団地でDKとそれに続く一室を1ルーム化して使用する例が多かったためもある。しかし、「座」の数は、根津で多い傾向が見られ、「常座」のある室内に複数の「座」がある傾向も根津に強い。就寝空間と「常座」のある空間が一致する割合は赤羽の73%に対し、根津は36%である。\*1

室の数はほとんど同じで、面積規模では赤羽台が大きい。赤羽台団地の住居にはDK空間が予め設計されているがそこには「座」を設けない例が多い。設けられている場合は空間を当初の設計のままの形では使用していない場合が大半(5例中4例)であることが分かった。根津、赤羽台の両地区の全体的な傾向として床座の志向が強い。(表2・2参照)このこともDKに「座」を取らない理由の一つと考えることができる。

\*1) 根津地区で、「常座」のある空間と就寝空間の分離した例が全体の36%であるが、この結果は東京都内の都市木造密集地区における一人暮らしの高齢者の住空間について分析した木原ら(1991)の研究で食寝分離の割合が約37%という結果とはほぼ一致している。

表・2・10 「座」に関する基本的事項から見た住空間について—2地域と比較

	赤羽台団地	根津地区	全体平均
住居内の「座」の総数	2	2.6	2.36
住居形式	集合住宅	主として都市型の戸建て住宅	
室数	2.5	2.6	2.55
居間の室面積	13.54㎡	9.14㎡	11.28㎡
居間にある「座」の総数	1.36箇所	1.6箇所	1.48箇所
就寝行為との一致	73% (8/11)	36% (5/14)	52% 13/25

## 2・2・7 一人暮らしの高齢者の住居内に見られる「座」のとり方の特徴

一人暮らしの高齢者は住居内に平均して一人2箇所以上の「座」をとっている。日常生活の大部分をカバーする「常座」を持つ。下宿等の準世帯の人を除いて全ての例で「常座」では食事も行われている。「居間」にある「常座」以外の「座」は目的の限定された「目的座」であった。これらの「座」には床座の傾向が強が見られた。

平均の数値から判断すれば、「居間」以外の空間にも少なくとも1カ所は「座」がとられていることになる。高齢者の場合<生活の集約化>の面のみが強調されているが、1室に全てが集中するのは、かなり肉体的にも老化が進んだ時点ではないだろうか。また、どんなに小さな行為でも、何かをするための場所が住居に複数あるということに大きな意味があるのではないか。この点についてはこれからの分析でも検討していきたい。

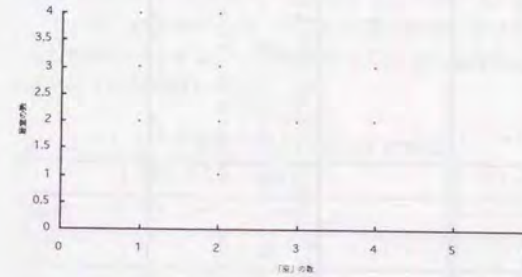
## 2・3 個別要素間の関係

ここでは、「座」の数と室数の相関を見ることから住空間での場の形成と、住戸自体の規模の関係を数量的に検討した。

## 2・3・1 「座」の数と室数の関係

2つの要素間の相関は強くない。即ち、本調査において高齢者が住居内で形成する場の数は必ずしも居室数に拠るものではないとすることができる。

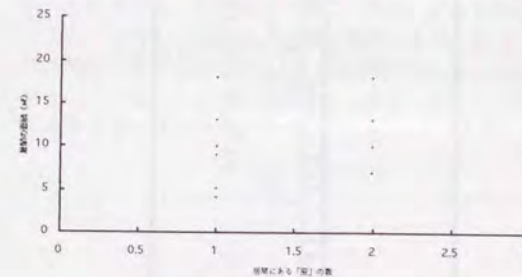
部屋が増えれば「座」が増えるわけではなく住まい手の生活スタイルの違いが「座」の数を決める主要な要因と考えるべきと思われる。



図・2・5 「座」の数と居室数の関係 相関係数:0.42

## 2・3・2 「居間」の面積—「居間」にある「座」の数

「常座」のある室(居間)の面積とその室内に形成される「座」の数の相関は強くない。広ければたくさんの「座」をとるのではなく、個人の生活のスタイルが「座」のとり方に影響を与えることがここからも予測できる。



図・2・6 「座」の数と居間の面積の関係 相関係数:0.40



表 2・1・1 「座」の基本データ一覧

	SA1	SA2	SA3	SA4	SA5	SA6	SA7	SA8	SA9	SA10	SA11	平均
座の数	1	3	2	2	4	2	1	1	4	2	2	2
住居形式	2DK	2DK	1DK	3DK	2DK	2DK	3DK	1DK	1DK	2DK	2DK	
室数	3	2	2	3	3	3	3	2	2	2	2	2.45
居間面積	9.94	17.58	9.94	7.45	12.96	9.94	18.36	9.94	9.94	25.2	17.65	13.54
居間の座の数	1	2	1	2	1	1	1	1	3	2	+	1.36
茶室での食事	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	11/11
居間での就寝	+	+	+	-	+	-	+	+	-	-	+	73%

根津地区

	SN1	SN2	SN3	SN4	SN5	SN6	SN7	SN8	SN9	SN10	SN11	SN12	SN13	SN14	平均
座の数	6	2	1	2 (付2)	3	1	2	4	2	1	2	2	3	2	2.67
住居形式	3K	2K	3DK	2 (準)	1DK	2K	2K	2DK	1 (準)	3K	3K	2K	2K	2LDK	
室数	3	2	4	4	2	2	2	3	1	3	3	2	2	3	2.57
居間面積	9.94	4.97	9.94	9.94	9.45	7.45	4.97	9.94	7.46	9.94	10.0	8.70	12.9	9.94	8.97
居間の座の数	2	1	1	1	3	1	1	3	2	1	2	1	2	1	1.57
茶室での食事	+	+	+	-	+	+	+	+	-	+	+	+	+	+	12/14
居間での就寝	+	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+	35.7%

2・4 一人暮らしの高齢者の「常座」がある室の特徴  
 (「座」と「座」を取り囲む物的な環境要素との関係)

ここまで見てきたように、一人暮らしの高齢者の住まいには日常生活の中で中心的な役割をする「常座」がある。「常座」では他の「座」に比べて長い時間が過ごされ、また行う行為も数多い。その意味から、「常座」のある室の空間形態や開口部や入り口の位置、あるいは「座」の向きなどには特徴的なものが見られるのではないかと考えられる。この節では「常座」のある室の特徴を以上の点に注目して検討を進める。

2・4・1 「常座」と入り口との関係についての検討

「常座」がある空間は、根津地区では玄関が見える位置にある例が14例中8例あった。赤羽台団地はそのプランの性質上根津の様な位置に「常座」をとることはほとんどできない。そこで、外から入って来る人を見ることのできる位置に「常座」があるかどうかを考慮した。

表・2・1・2 「常座」と入口の向きの関係

	「座」が入り口に向く	「座」が入り口に背中向き
赤羽台	7	4
根津	11	3

入り口と「常座」について、入り口(玄関)に向かう、背を向けるの二つの向きのとり方がある。「入り口に向かう」向きとは、入り口から入ってくる人を体の向きを変えることなく見ることが出来る向きを言う。赤羽台団地では入り口に向くものが11例中7例、根津では14例中11例である。両地区とも入り口を向くような形の「常座」が取られていることで一致した傾向を示し、高齢者の持つ「常座」の特徴の一つと考えられる。

根津地区の場合、玄関続きの室に「常座」がある例が8例ある。そのうち6例が玄関向きの「常座」であった。他の2例のうちの1例は1DKのマンションであるが、玄関に対して背中向きであるが、テレビ付インターフォンで補っている。また、この人はインターフォンを付ける以前は「常座」卓の上に鏡を置き、チェーンを掛けたドアを見張っていたという。



2・4・2 「常座」と開口部（窓、玄関）の関係についての検討

次に、玄関を含む開口部と「常座」の向きを見た。

表・2・13 「座」と開口部の向きの関係

	「座」において開口部が目に入る	開口部に背を向けている
赤羽台	8	3
根津	14	0

たいていの「常座」は窓や玄関を通して外が見える向きをとっている。玄関を通して外を見ているのは根津の3例である。(SN2、8、12)根津で玄関と「常座」がひと続きの空間にある場合、このように外を見ていたり、夏場等は開け放していたりする場合があった。(SN10は玄関に対して背を向けているが玄関の戸は開けている)

赤羽台団地で「常座」の背後に窓があるタイプが3例(SA1、4、6)あるのが特徴的である。この3例はいずれも入り口の方向を「常座」で体を動かさずに見ることが可能な点でも一致していた。

(補) 窓は外を見通すことができる仕掛けである。しかし、ヒアリングでは外に対する関心が積極的に言葉に出ない場合もあった。根津地区の方に窓の外を見るという行為が多い。赤羽台団地で外の景色を積極的に見るという行為がなされる例の住戸位置を調べると前に住棟のない見通しのきく2階以上であった。

つまり、高層階で見通しのきくところでは戸外の周辺環境を自分のものとして取り込むことができるが、それ以外では戸外はあまり意識されていない。「窓の外は気にならない」とほとんどの人が答えるが、その中に、「前の住棟の人と目があった。」と付け加える人がいた。

2・4・3 入り口と開口部に対する「常座」の向きの関係

赤羽台団地、根津地域で見られた「常座」と入り口に対する向き、開口部に対する向きとの二つの軸で高齢者の「常座」をプロットすることを試みた。

「常座」と入り口との向きの関係では、「常座」が入り口から入ってくる人を見ることのできる位置である傾向は赤羽台団地、根津地区ともに強い。しかし、根津には、赤羽台団地のプランでは見られない、玄関と同じ間口の続間になっている座敷がある。さらに、この「座敷」が「居間」として使用されることが多かった(8例)。このような形の「居間」では、「入り口」が「常座」に隣接し、外の景色を見たりといった開口部の役割をすることがある。赤羽台団地では玄関のある空間に「常座」が取られることはない。入り口続の空間としてはDKがある場合もあるが先にも述べたようにDKに「常座」がとられることもなかった。

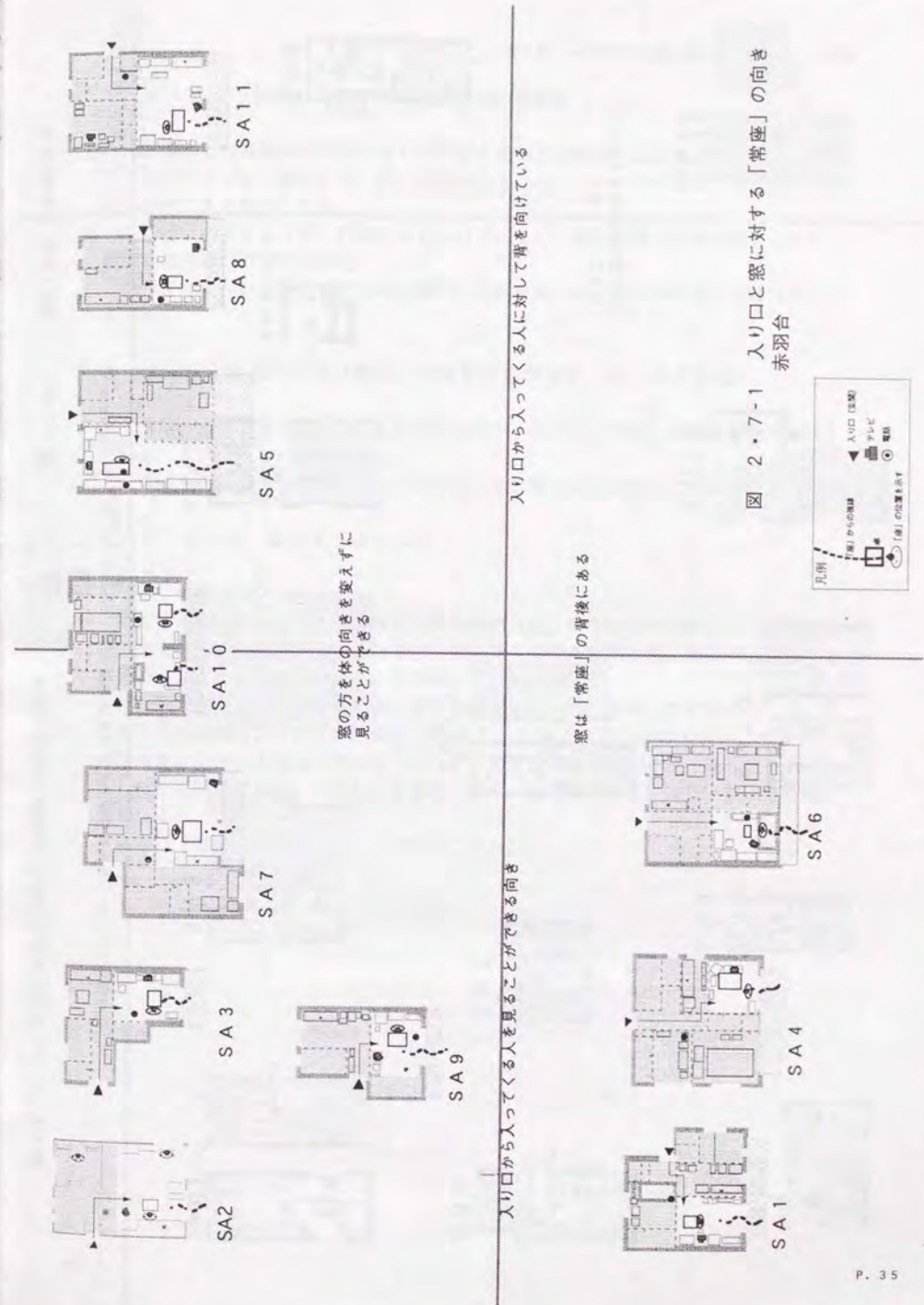


図 2・7-1 入り口と窓に対する「常座」の向き  
赤羽台



2・4・4 「常座」とテレビ、電話の位置関係

一人暮らしの高齢者が日常の多くの時間を過ごす「常座」にはSN13を除いて全ての場合にテレビが置かれていた。当然のことだが、テレビの位置は「座」から無視なく視野に入る場所にある。

電話は、必ずしも「座」の傍にあるわけではなく、別の部屋にある場合も赤羽台、根津とも各5例づつ見られた。

参考までにテレビまでの平均の距離は1.62mであった。二つの地域ともほぼ同じであった。

2・4・5 居室内での「常座」の位置と訪問者の「座」の取り方

「常座」で壁に寄りかかることができるのか、または「常座」の背後を他者が通り抜けることができるのかを調べた。

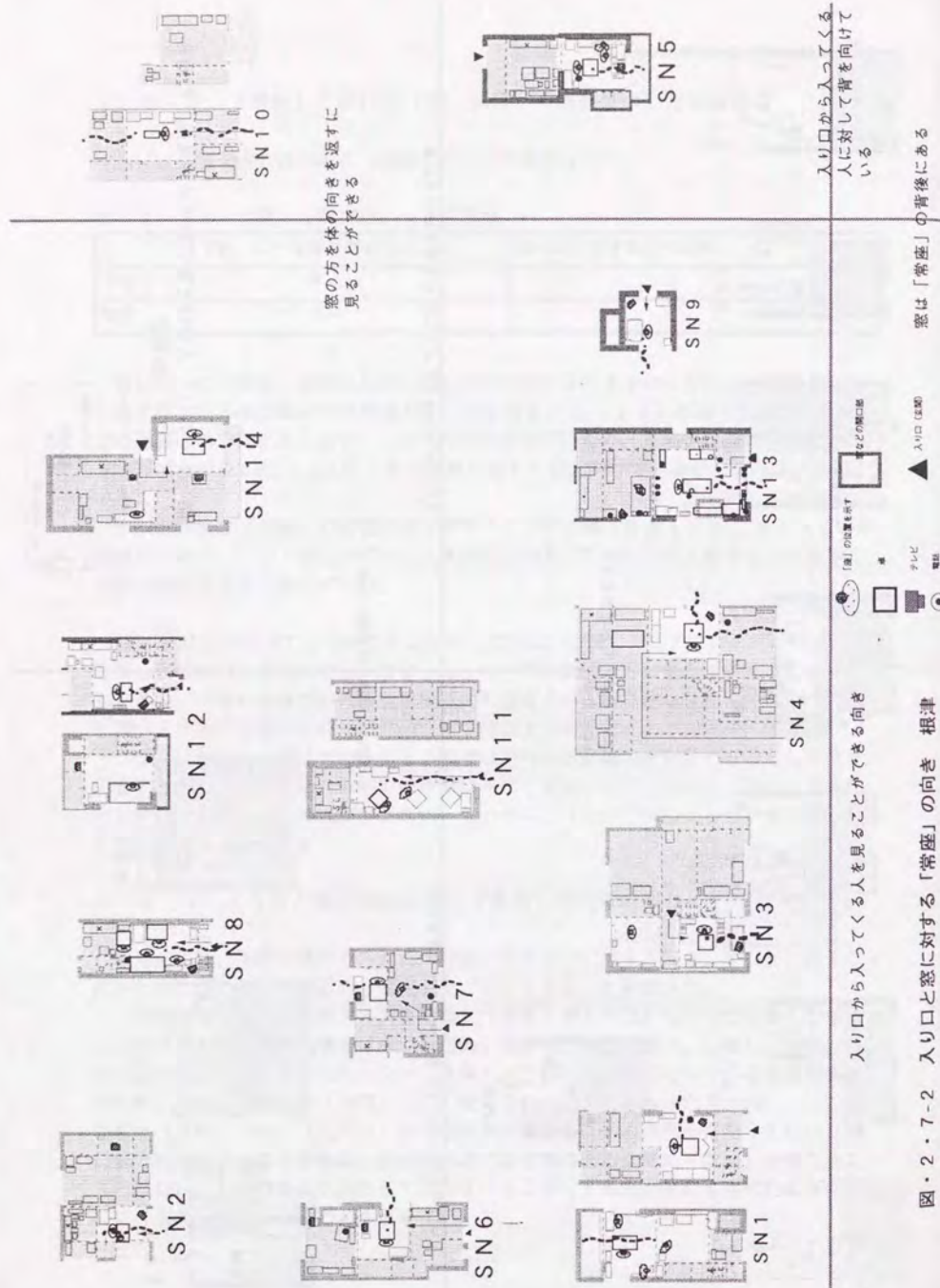
「常座」の背後が壁や戸棚で人が通り抜けられないようになっているのは次の例である。

- SA2、3、4、6、8、9、10
- SN3、5、11

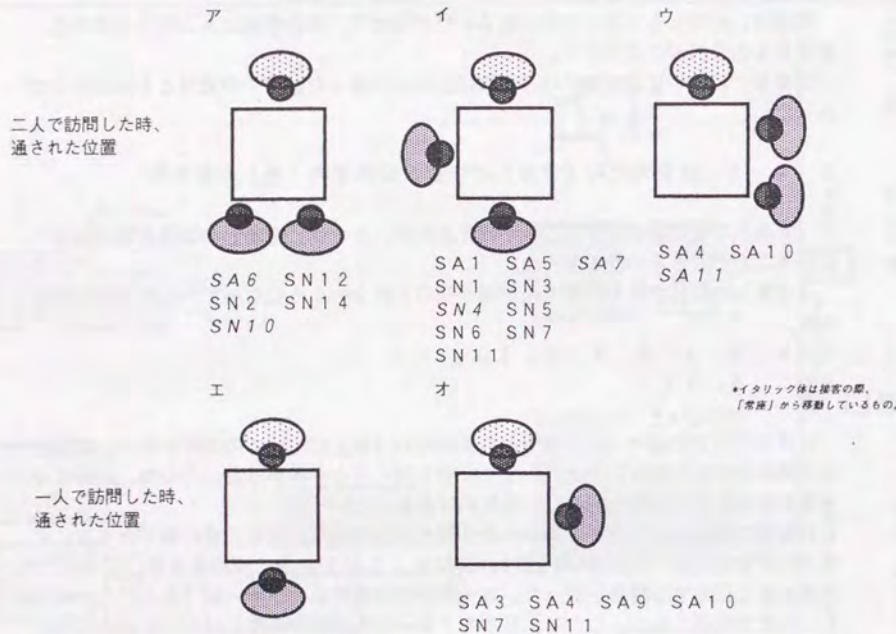
初対面の調査者が通された場所から接客時の「座」についての分析を行う。調査者は高齢者の日常の場所に通され、そこで話を聞くことが多かった。その時、高齢者及び調査者が占める位置を記録し、分析の対象とした。

初対面の調査者と正面から向かい合う例が少なかった。即ち、卓の隣り合う辺にそれぞれが位置することが多い。逆に、SN3、SN12等、卓の大きさに依らず二人の調査者と正対する関係を取った。コーナーの位置関係はソマーが「最も話しやすい」とした位置関係である。しかし、日本のフォーマルな接客の型にはない並び方の様に見える。

接客は「常座」で行われることが殆どであった。



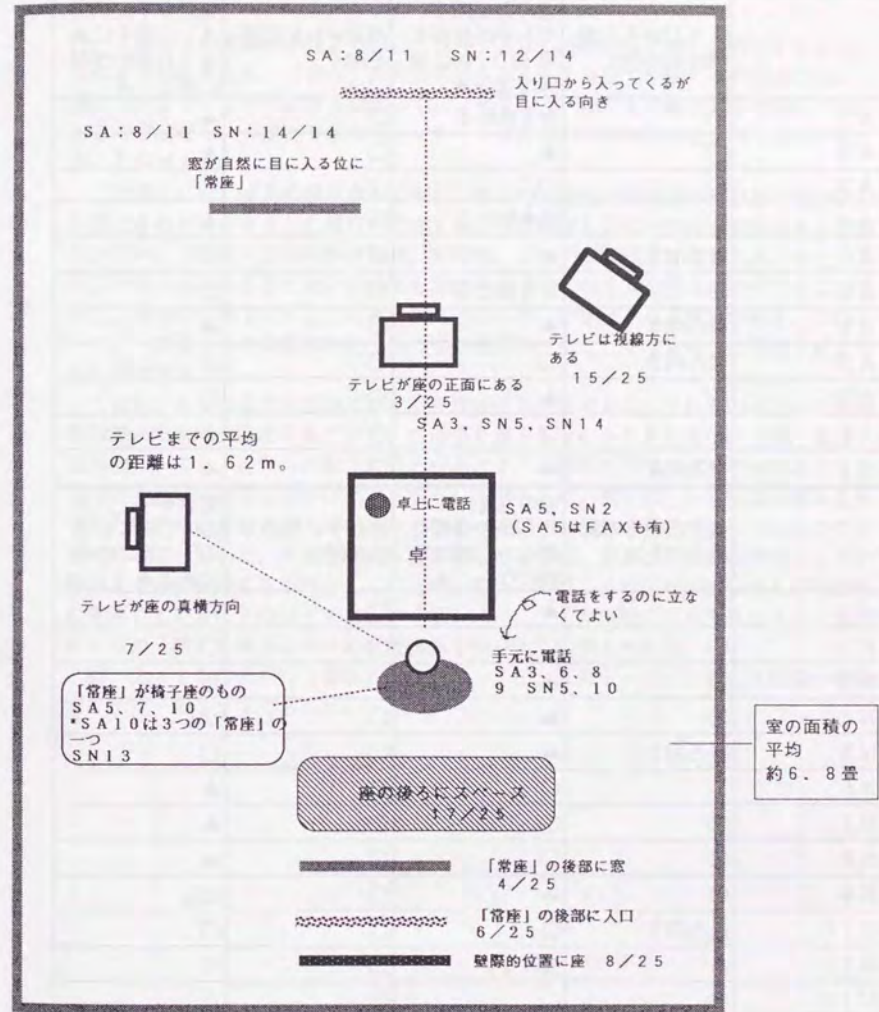




一人暮らしの高齢者の家で、調査者は高齢者の「常座」に通され、「常座」のとられている卓に「座」をとるように勧められる場合が殆どであった。そのとき、一人暮らしの高齢者は「常座」で接客する割合が多かった。高齢者と調査者の位置関係を示したのが上の図である。

初対面の調査者に対して、正面ではなく、卓の隣り合う辺に座るように勧められる人が割合多い。SN 3、12では、卓は大きくないのに、二人の調査者と正対する位置関係をとっている。この様な例は珍しかった。コーナー同士の(ウ)の位置関係はソマーが「最も話しやすい」とした位置関係である。(イ)の型は、卓が正方形のこたつの場合が多いことから自然に多くなることが考えられるが(ウ)の様な型は日本の接客の形としてはあまりなかったのではないだろうか。それが、一人暮らしの高齢者の「常座」で良く見られたことは非常に興味深い。

図・2・8 接客時の訪問者の「座」



図・2・9 「常座」と開口部、テレビ、入り口等との位置関係



表 2-14 「常座」と物的環境との関係

	入り口からの動 線方向を向く	窓の方を向く 何らかの情報を 得る○：特に意 識はない▲	座がテレビの方 を向く	電話が手元にあ る：○近くにあ る：△別の空間 にある：▲
SA1	○	背を向ける	○	▲
SA2	○	▲	○	▲
SA3	○	○	○	○
SA4	○	背を向ける	○	▲
SA5	後ろ向き	▲	○	○
SA6	○	背を向ける	○	○
SA7	後ろ向き	▲	○	▲
SA8	後ろ向き	○	○	△
SA9	○	▲	○	○
SA10	○	○	○	△
SA11	後ろ向き	▲	○	▲
	入り口からの動 線方向を向く	窓の方を向く 何らかの情報を 得る：○特に意 識はない：▲	座がテレビの方 向を向く	電話が手元にあ る：○近くにあ る：△別の空間 にある：▲
SN1	○	▲	○	△
SN2	○	○	○	○
SN3	○	▲	○	△
SN4	○	▲	○	なし
SN5	後ろ向き	▲	○	○
SN6	○	○	○	▲
SN7	○	○	○	▲
SN8	○	○	○	▲
SN9	○	▲	○	なし
SN10	後ろ向き	○	○	○
SN11	△	窓はない	○	△
SN12	○	○	○	△
SN13	○	▲	なし	▲
SN14	○	○	○	▲

## 2・5 「常座」の構造

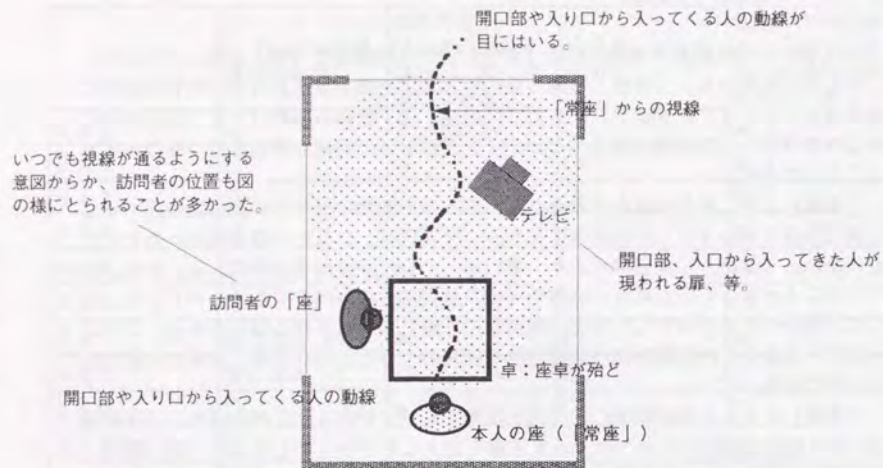
一人暮らしの高齢者の住居内には「常座」という特徴的な「座」が取られていた。これまでの結果から、「常座」はある必然性と意図を持って住居の中の特定の場所に選択されていくことが分かる。よって、「常座」は、単なる座標点として住居の中にあるのではなく、方向性や家具のセッティングにおいて明確な構造を持つものと考えることができる。

「常座」には、家具の組み合わせや開口部との方向性の取り方の点で先の節で示した様になりにはっきりした傾向が存在する。「目的座」にはその様な傾向はあまり見られない。「常座」には座卓があり、開口部、テレビが無理なく目に入る。また、入り口から人が入ってきた場合には体を回転させずにその方向を見ることができる。そして、自分の正面をはずした位置に訪問者の「座」が想定される傾向がある。このように、一人暮らしの高齢者の住生活の中の様式の一つとして「常座」の構造を捉えることができる。

「常座」を支える卓や周囲には生活を反映するモノがある。これらのモノには生活者の様々な意味が込められており、生活像を捉える手がかりともなった（例：栗田1974他）。また、それらの配され方と行為とモノの関わり方は、生活者が組み立てた生活の仕組を空間的に浮かび上がらせるものでもある。例えば、一見乱雑に積み重ねられた机の上の書類も積んでいる本人にとっては一目瞭然の秩序を持っているのだと言われることがある。乱雑な状況も当事者にとっては、あることをする場所としての機能を十分に発揮する空間としての意味を持つ。このことは、たいていの人が経験的に理解していることのはずである。「場」は、こうした空間の秩序を行為をする場所としての「座」と関わるモノの位置関係を中心として捉えられる。

図 2・11に全ての「常座」（SA1-11, SN1-14）のある部屋の平面図をクローズアップで示した。

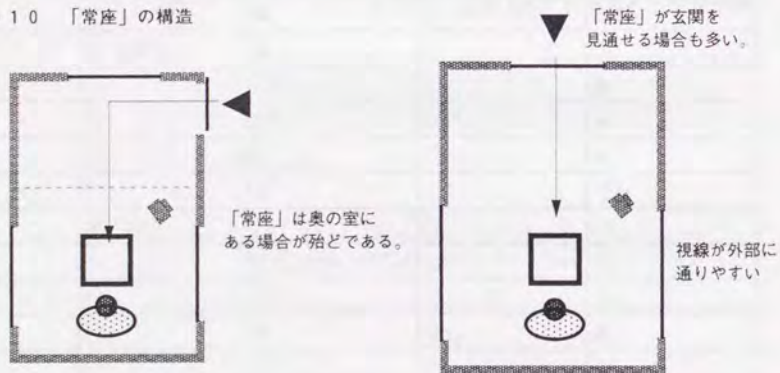




一人暮らしの高齢者の「常座」は、卓に支えられている。この調査の場合、座卓が大半でテーブルでの椅子座は少ない。この点に関しては、住宅の設計も関与していると考えられる。「常座」では、視線の範囲内に窓などの開口部や、玄関等の入り口から人が入ってきたときの動線が収まるようになっている。テレビは必ず「常座」からの視野の中に入るが、電話はその限りではない。

訪問者の「座」は「常座」の正面よりも隣り合った辺上にとられることが多い。このような位置関係にすることで、外部への視線の通りを確保することができる。

図・2・10 「常座」の構造



補(1) 赤羽台で見られた典型的な「常座」

補(2) 根津で見られた典型的な「常座」

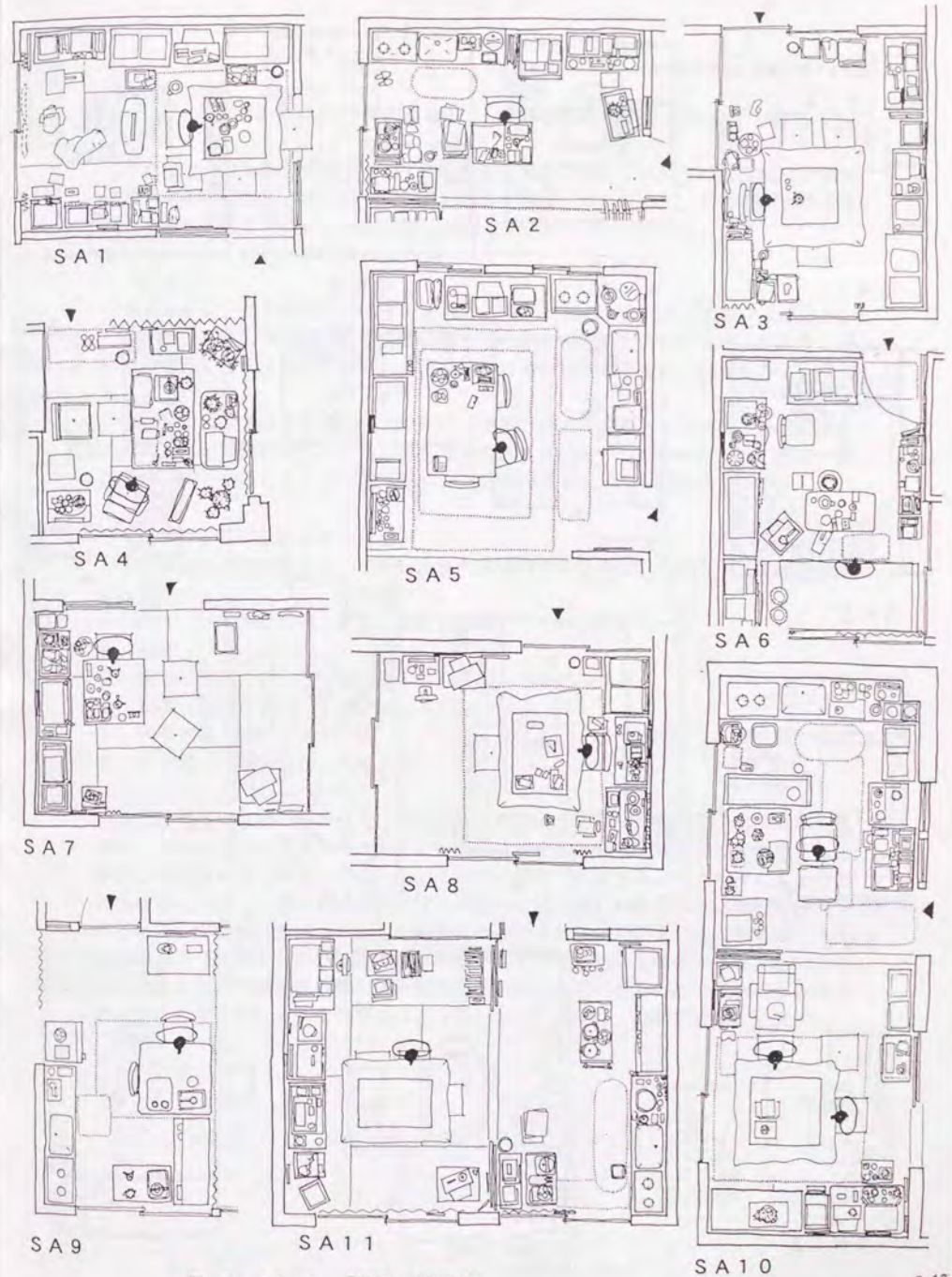


図 2・11・1 「常座」(赤羽台)



2・6 「座」と行為の空間的な関係 一場の形成の仕方についての検討一

これまで、「常座」を中心として検討を加えてきたが、この節では住居内で行われる日常生活の行為がどの「座」で行われるかに着目する。さらに、行為を通して「座」と「座」の関係を見ることから「場」の構造を知る手がかりとした。

2・6・1 「座」で行われる行為

まず始めに、住空間内にあるそれぞれの「座」で行われ行為の類型化を試みた。ヒアリング時に回答された行為が日常生活の全ての行為であるとは考えられないが、行為の内容にはある程度それぞれの回答者の日常の様子の特徴の一部を見ることができる。

「座」には「常座」の様にいくつかの行為が行われる「座」もあれば、「目的座」の様にある行為だけが行われる「座」も見られる。「座」で行われる行為の種類や数はその「座」を核として広がる「場」の適応性の度合を示す手がかりとなる。

<ヒアリングで回答された行為>

一人暮らしの高齢者によって答えられた住居内での行為は、次のように整理できる。

- a. 食事
- b. 対人、対外的な行為：接客、電話をする
- c. 趣味
- d. 娯楽（時間つぶしの様な場合も含む）：テレビを見る等
- e. 仕事（金銭を得ることのできるもの）
- f. 家事一般：アイロンがけ等
- g. その他：宗教的行為、メイク等

また、例えば仏壇があればそこで宗教的、精神的な行為が行われることを推測できるが、そのことがインタビューの中で自分の日常生活として実際に言葉で表現される場合と表現されない場合とがあった。これは「鏡台」に対するメイクや身だしなみという行為についても言える。分析では、仏壇などは「座」がとられる可能性を持つものではあるが生活者が言葉に出した場合にのみ「座」はカウントした。例えばメイクにしても、「仕事をしているので人に不安を与えないためにも毎朝メイクをしてから外に出る」という話がある時、例え短時間であってもその行為の持つ意味の重みは大切なものと受け取れる。この場合は、「座」として表現し、分析の対象とした。

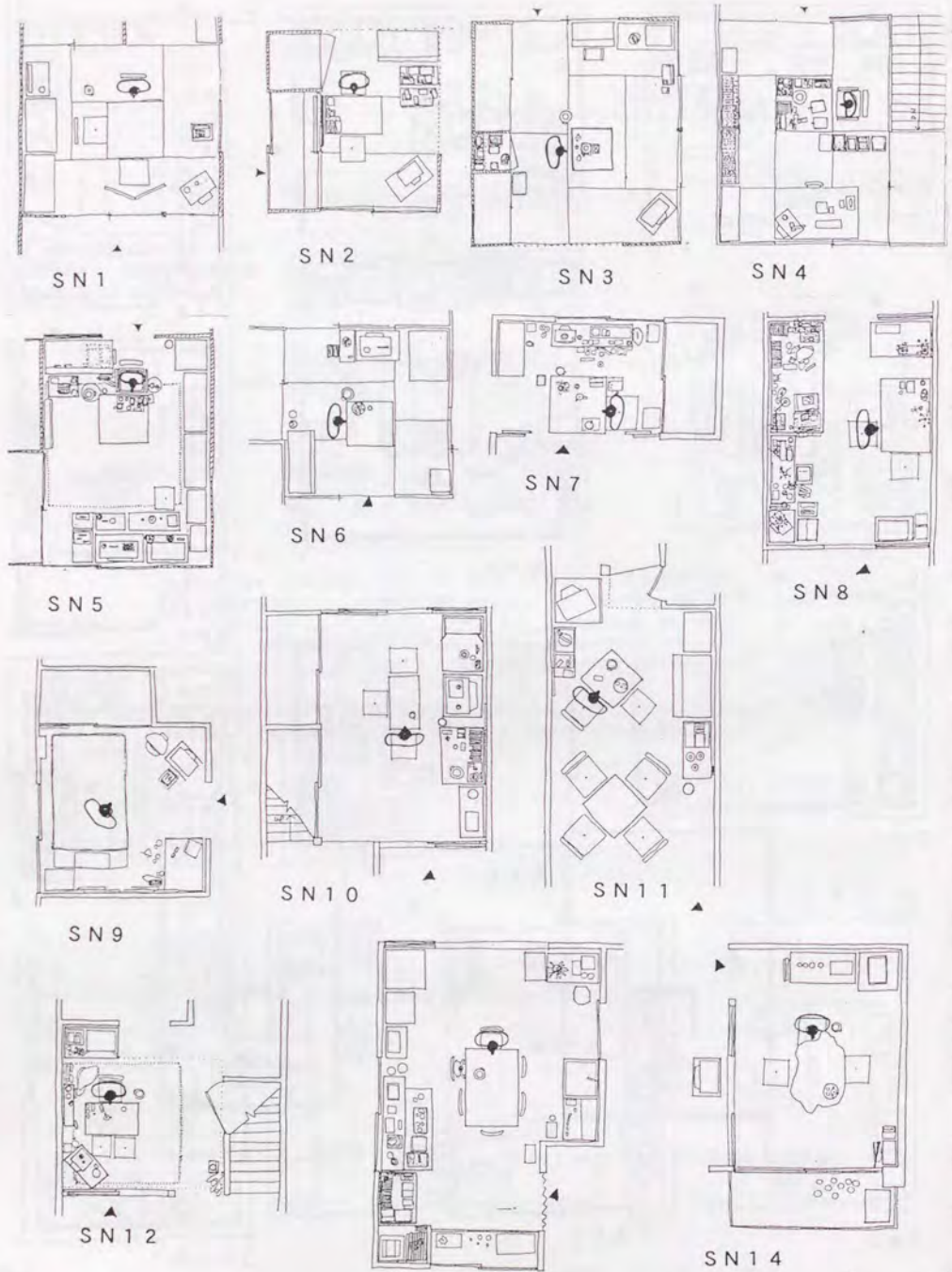
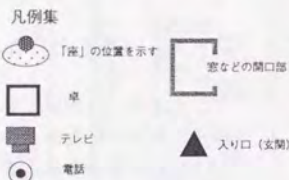
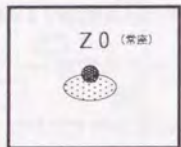


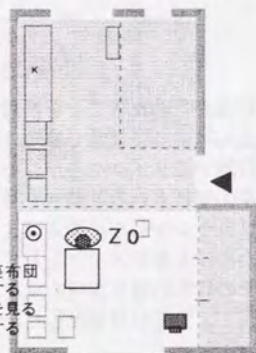
図 2・11・2 「常座」(根津)

根津SN1-SN14





SA1

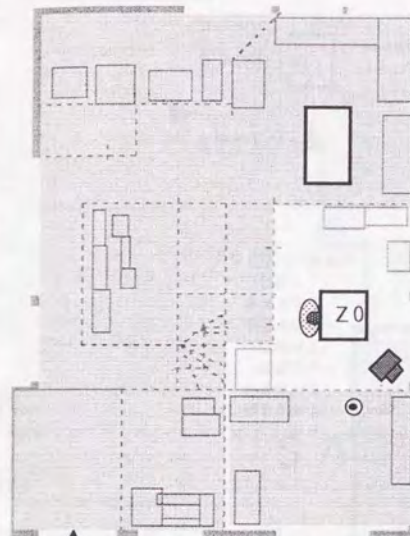
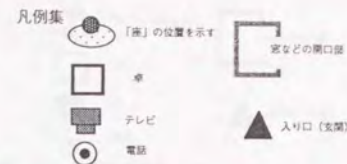
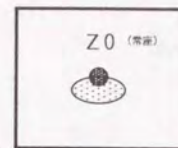


SA8

女性 74歳  
午前中に掃除や一日分の料理。  
その後、医者や目医者等。パチンコと  
テレビが好き。夕方以降寝るまで(布  
団に入ってから)テレビはつけっぱ  
なし。

図・2・12・1 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容

住居内の「座」は一つ。(「常座」のみ)



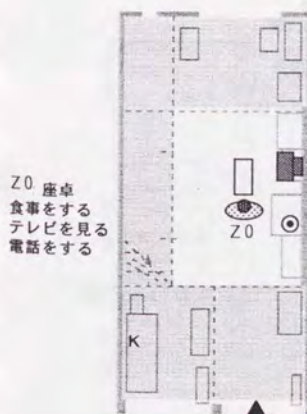
SN3

女性 80歳  
隣に住む妹が頻繁に訪れて二人で過ごす  
ことが多い。数十年來の下宿人が2階に  
住む。近所の人などの出入りも多い。  
特に趣味はない。テレビを見るのが好き。



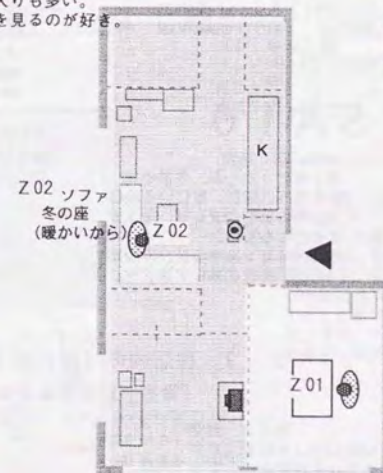
SN6

女性 77歳  
踊と民謡を地域のサークル等で  
教えている。朝食後はテレビ。  
昼ごろまで上野のデパート等を  
一回り。昼食後昼寝。夕方から  
踊などを教えに外出。老人クラ  
ブでは習いごと。旅行へも頻  
繁にでかけている。



SN10

男性 65歳  
趣味は釣。家にいる時は一日中テレビ。  
週3回くらい夕食を兼ねて飲みに行く。



SN14

女性 67歳  
朝1、2時間散歩。午前中から3時ころ  
までテレビはつけっぱなし。3時ごろ外出。  
早めにもどる。

図・2・12・2

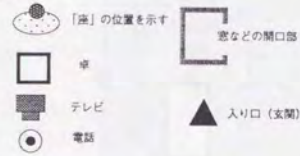
住居内の「座」と「座」で行われる行為内容

住居内の「座」は一つ。(「常座」のみ)



Z0: 「常座」  
Z1: 「目的座」

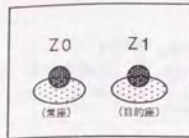
凡例集



SA10

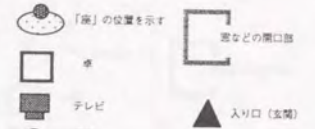
女性85歳 無職  
週2回デイホーム、午前中は  
授骨院へ、毎日、家にいる時は、  
大正琴の練習やテレビ。友人が  
来ることもある。  
飲食はZ0 aを中心に、3つの  
「常座」を行き来して過ごす。

図・2・12・3 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
「常座」が複数あるタイプ

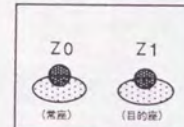


2つの「座」は同じ空間内にあり、  
Z1での行為の一部は「常座」Z0の  
行為と重複している。

凡例集



SA3



2つの「座」は同じ空間内にある。  
Z1の行為は「常座」Z0の行為と  
重複しない。



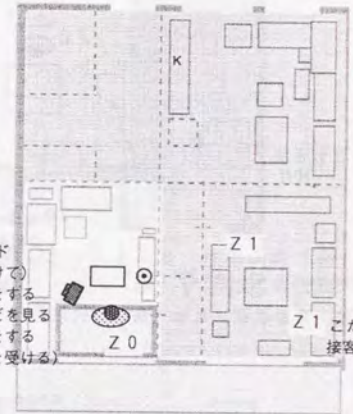
SA4

女性79歳 無職 ほとんど家で過ごす。  
読書と編物が趣味。朝5時ごろから布団の  
中でラジオ。朝食を済ましてから布団の中  
で読書やテレビ。起きてからは、手芸(網  
もの等)や読書(推理小説が好き。図書館  
を利用)。

Z1布団の中で  
ラジオ、読書



2つの「座」はそれぞれ異なる空間に  
ある。Z1の行為は「常座」Z0の行為と  
重複しない。

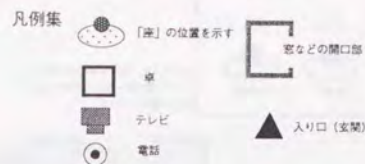


SA6

女性 78歳  
朝は散歩。午前中は掃除や縫いの。  
午後は買い物や庭いじり。友人(SA5)  
と一緒に食事をする事も多い。夜は  
テレビ。趣味は油絵。油絵の道具や作品  
が「常座」の周辺に。「常座」はベッドに  
あるが、接客は別室のこたつで行う。

図・2・12・4 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
住居内に「座」が2つある。





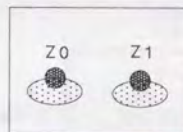
2つの「座」はそれぞれ異なる室空間にある。Z1の行為は「常座」Z0の行為と重複しない。



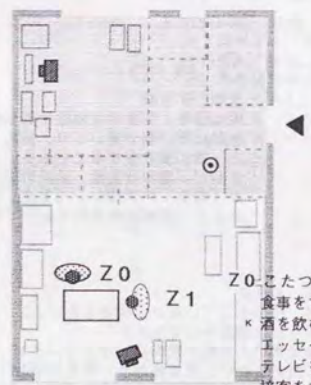
Z1: 仏壇 拝む

SA7

Z0 食卓+椅子  
食事を  
アイロンをかける  
テレビを見る



2つの「座」は同じ空間内にある。Z1の行為は「常座」Z0の行為と重複しない。



SA11

Z0: 榻榻み+座布団  
食事を  
酒を飲む  
エッセイを書く  
テレビを見る  
接客をする

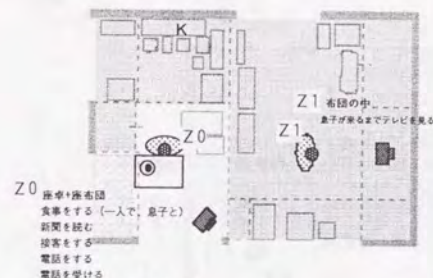
Z1 接客時は「常座」から移動する。

男性 68歳  
「家の中では生活の音がしない。刺激を求めて外へ」行く。昼は行きつけのレストランで。6時ごろ帰宅してから、テレビはつけっぱなし。客は呼ばない。

図 2・12・6 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
住居内に「座」が2つある。



2つの「座」はそれぞれ異なる室空間にある。Z1では「常座」Z0で行われる行為の一部が行われる。



Z0 座卓+座布団  
食事を  
新聞を読む  
接客をする  
電話をする

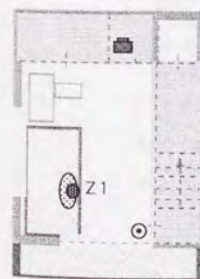
SN2

Z1: 寝床の中  
本を読む

Z0 座卓+座椅子  
本を読む  
書きものを  
テレビを見る

SN4

男性 72歳  
間借りをしている。4時30分に起床後、大家の台所で朝食。その場で語学の勉強。午前中は、上野公園などへトレーニング。帰宅後、自室で本を読む、散歩等。一番の銭湯へ。夜は再び、本を読む等。



SN12

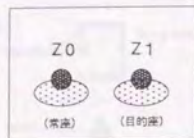
Z0 座卓+座椅子  
(玄関を直接見る)  
食事を  
お茶を飲む  
本を読む  
(テレビを見るより好き)  
書きものを  
電話をする  
(座のそばまで持ってきて)  
テレビを見る  
接客をする

Z1 2階のベッド  
読書をする、ラジオを聴く

女性 65歳  
朝は暗いうちから散歩。読書が好き  
小学校の時の同級生と月に1回は旅行。その友人たちと週1回は電話。電話は、「常座」まで持ってきて長話をする。

図 2・12・6 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
住居内に「座」が2つあるタイプ





2つの「座」は同じ空間内にあり、Z1での行為の一部は「常座」Z0の行為と重複している。



Z0: こたつ+座布団

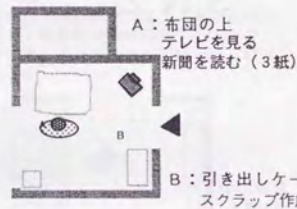
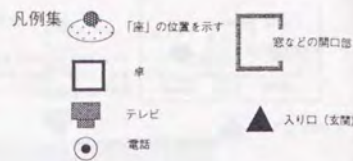
食事をする  
テレビを見る  
(ずっとつけっぱなし)  
新聞を読む  
接客をする

Z1 隣の部屋

との境目  
あたり  
接客をする  
(調査者)

女性 75歳 無職  
特に趣味はない。「行き当たりばったりに  
生きている」  
家にいるときは、テレビはたいていついて  
いる。近所に住む友人がよく来る。友人も  
「常座」で応対。

SN7

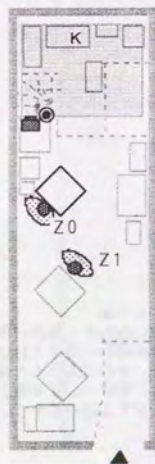


A: 布団の上  
テレビを見る  
新聞を読む (3紙)

B: 引き出しケースの前  
スクラップ作成作業

SN9

男性 66歳 新聞配達  
新聞店の寮に住み込み。部屋では  
新聞を読み、目についた記事を切り  
抜いたり。テレビを見たりする。  
新聞を読んだり、テレビを見るの  
は、布団。切り抜きなどの作業は  
道具箱の所。



SN11

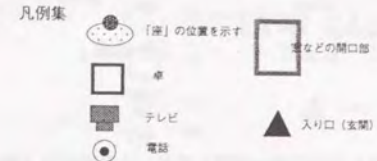
女性 65歳  
午前中はパートなど。午後も外出することが  
多い。元雀荘なので、今でも週2回くらい、  
近所の人が6時30分位に、マージャンをや  
りに来る。  
夜は、テレビ。12時ごろ就寝。

Z0 食事、接客  
読書、新聞を読む  
テレビを見る等

Z1 接客

図・2・12・7 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
住居内の「座」が2つ。

Z0: 「常座」  
Z1, Z2...: 「目的座」



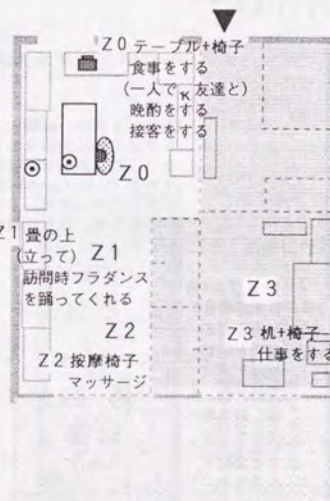
Z0 座卓+座布団  
(板の間)  
食事をする  
テレビを見る  
新聞を熟読する  
略語辞典を作る

Z2 机+和文タイプ+椅子  
時々仕事をする

Z1 キーボード  
コーラスの練習

女性 78歳  
コーラスが趣味で3つの団体に所属。  
家でもキーボードで練習。その他、  
新聞を読んで「略語辞典」を作るの  
が趣味。午前中は、家で仕事(家で  
時々タイプの仕事)やコーラスの練習。  
午後はコーラスに出かけ、夜に略語辞  
典作り、が平均的な一日。

SA2



Z0 テーブル+椅子  
食事をする  
(一人でK友達と)  
晩酌をする  
接客をする

Z1 畳の上  
(立って) Z1  
訪問時フラダンス  
を踊ってくれる

Z2 按摩椅子  
マッサージ

Z3 机+椅子  
仕事をする

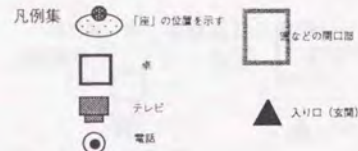
女性 68歳  
家で自営。9時から5時ごろまで自宅にある  
事務所で仕事。その間、近所の人の自由な出  
入り有り。昼や夜は、仲の良い友達と食事をする  
ことも多い。

SA5 図・2・12・8 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
住居内の「座」が3つ以上。

異なる空間にある。それぞれの「座」での行為の重複はない。



Z0: 「乗座」  
Z1, Z2...: 「目的座」



「座」は全て同一空間にあり、それぞれの「座」での行為の重なりは見られない。



「座」は2つの空間に分散している。  
Z0とZ1での行為の重なりは見られないが、Z0とZ2で行為が  
重なる場合がある。

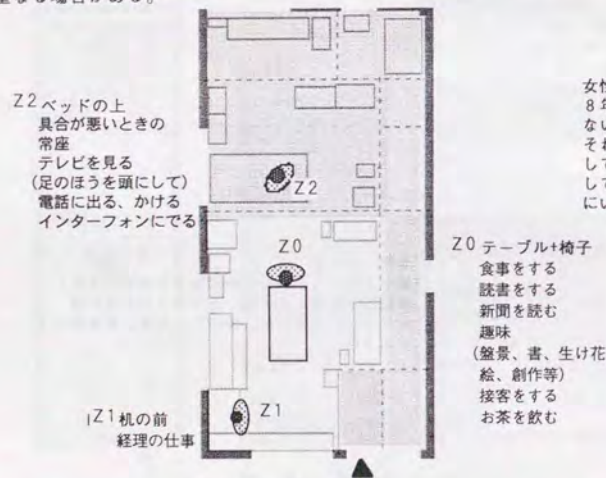
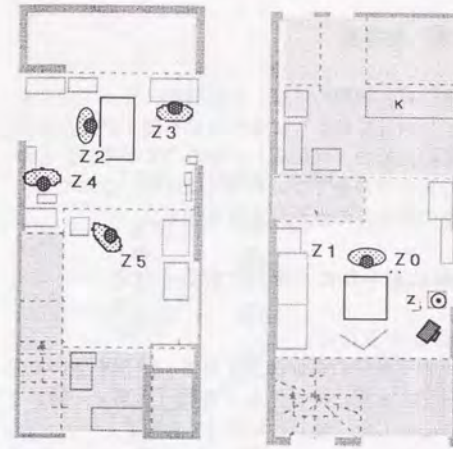
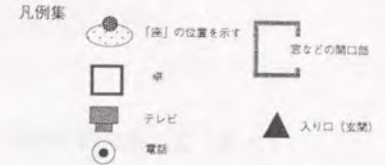


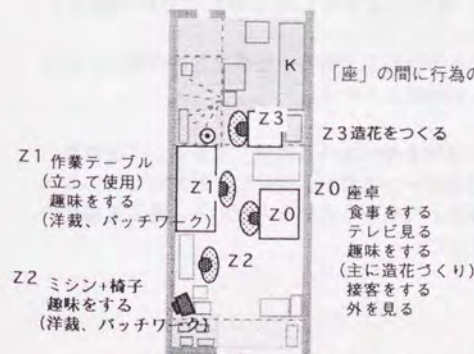
図 2・12・9 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
住居内の「座」が3ヵ所以上。

Z0: 「常座」  
Z1, Z2...: 「目的座」



Z0とZ2、Z2、3、5の間に行為の  
重複が見られる。

女性 80歳  
インタビューの約3ヵ月前に夫を亡くす。  
夫は、彫金の職人で、家で仕事をしていた。  
住み込みの弟子がいた時代もある。ずっと  
夫の仕事を手伝ってきた。インタビュー時は  
その頃の生活のリズムはそのまま。昼間は、  
夫の遺品を整理したりして過ごす。2階は  
夫の仕事場で作品や、道具がたくさんある。  
また、ベランダには夫の目を楽しませるため  
に育てた植物がたくさんある。



「座」の間に行為の重なりが見られる。

76歳 女性  
造花などの手芸が趣味。老人クラブの活動を  
熱心に行う。造花などもサークルで教えたり。  
午前中はゲートボールや造花などのサークル。  
午後もクラブの集まり等で出かけることも多い。  
家にいる時、夜は造花作りやラジオや新聞。

図・2・11 住居内の「座」と「座」で行われる行為内容  
住居内の「座」が3ヵ所以上。

「座」は異なる空間に分散している。



2・6・2 住居内で形成された「場」の特徴

調査の対象とした一人暮らしの高齢者には、複数の「座」を住居内に持っていても日常の行為は殆どその中の一つの「座」(＝「常座」)に集中させる傾向が見られた。「常座」以外の「座」はある特別な行為のための「目的座」であることが多い。しかし「常座」とそのほかの「座」の行為の重なりが全くないわけではない。ここでは、住居内にある「座」と「座」の間の行為の重なるの点から検討を加える。

2・6・2・1 一人暮らしの高齢者に見られた「座」と行為の対応

①日常を過ごす「常座」には複数の行為が重なる。

「食事」が別の「座」で行われる例は根津地区の準世帯(SN9)の例を除いて見られなかった。ただし、日常的な「座」を2カ所を持つSA10は「食事、一服」を中心とした「場」とそうでない行為を中心とした「場」とに分けている。

②ある専用の「座」がある場合がある。

家で仕事を持つ人の仕事机(SA7)、歌の練習をするためのキーボード(SA2)やメイクのための鏡台(SN5, SA4等)など単一目的のための「目的座」である。

③複数の「座」を持つ場合には、ある「座」での行為が重複する場合と、しない場合がある。

「常座」で行う行為が別の「座」で行われる。例えば、SN12は趣味である読書を「常座」の他に2階のベッドでも行う。SN11は「常座」でも接客をするが、場合によっては別の「座」で接客をする。(親しさの度合で分けているようであった。)これらの例に対してSN4等は、一つの「座」ですべての行為を行っていた。

④住居内に複数の「座」がある場合、一つの空間にある場合といくつかの空間に「座」が分散している場合がある。

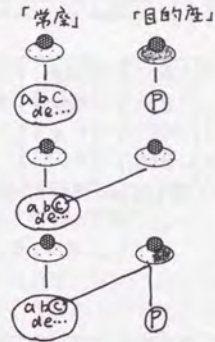
住居に複数の室があっても、SN10の様に、他の室には「座」を取らず、1室で日常を過ごす例と、SN1の様に家全体に「座」を取る例。

⑤行為と「座」の対応関係を見ると、同じ行為が同じ室空間でなされる場合と異なる室空間でなされる場合がある。

SN1の場合、接客は1階でも2階でも行う行為である。仕事などの作業は亡夫の仕事部屋である2階にある複数の「座」に対応している。

「常座」の他の「座」は、ある特定の目的を持った「目的座」である。「目的座」で行われる行為は「常座」と重複する行為が一つもない、完全に目的別に行っている人と、「常座」で行う行為の一つを別の「座」でも行うという人がいる。ある行為をするもう一つ別の「座」を持つ人は少なかった。

「常座」と「目的座」の関係



A 「目的座」では「常座」で行われる行為とは別個の行為を行う。

B 「目的座」では「常座」で行う行為のいくつかを行う。  
(調査では、たいてい一つの行為が重なっていた)

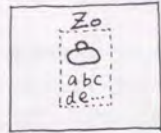
C 「目的座」は、「常座」で行われる行為の一つ(もしくは二つ)と、別個の行為が行われる。

住居内に3つ以上の「座」を取る高齢者は7名であった。その内、「目的座」同士で同じ行為が重なる例はポータブルな「座」を取るSN1、作業する複数の「目的座」を取るSN8に見られたのみである。

図・2・13 「常座」と「目的座」への行為の振り分け方のタイプ



「座」が一つ（「常座」のみ）

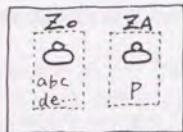


SA1 SA8 SA9  
SN3 SN10 SN6 SN14

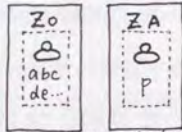


Z: 「座」  
ZA: 「常座」で行われる行為は行われる「目的座」  
ZB: 「常座」で行われる行為の一部が行われる「目的座」  
ZC: 「目的座」・・・ZA+ZBタイプ

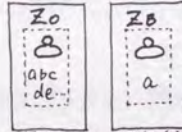
「座」が二つ



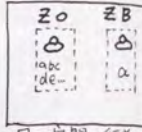
同一空間・行為の重複なし  
SA4 SA11



異なる空間・行為の重複なし  
SA6 SA7



異なる空間・行為の重複なし  
SN2 SN4



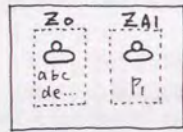
同一空間・行為の重複あり  
SA3

SN7 SN9 SN11

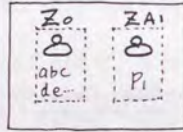
SN12

SA3

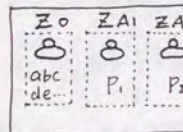
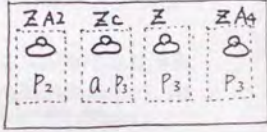
「座」が3つ以上



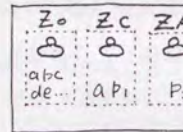
SA2



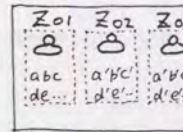
SN1



SA5

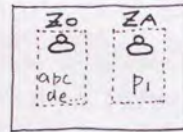


SN8



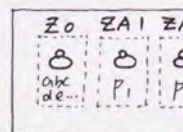
SA10

37戸の「常座」で  
こまめに物入れ



SN13

体用が重い時、ZCは  
「常座」として、  
近接行為は室外で行う。



SN5 行為重複なし

## 2・7 「常座」の周囲のモノの在り方

この節では、「常座」で行為を行う際に実際に関わる環境に着目する。研究の概念でも述べたがその環境には、「座」に居て視界に入る環境や、「座」での行為に際して使用するモノを中心とした環境などがあげられる。そこで、まず始めに「常座」の周囲にあるモノの配置や分布に着目して分析を行うことにした。

### 2・7・1 一人暮らしの高齢者の「常座」でモノの在り方の概要

一人暮らしの高齢者が最も長い時間を過ごす「常座」は座卓で支えられている。赤羽台団地、根津地区のヒアリング調査では赤羽台のベッド+ティーテーブルの「座」、ダイニングテーブルの「座」2例、根津地区のテーブルの「座」を除いて全て床座であった。ほとんどの高齢者は座卓の上に急須、湯のみなどを置く。また、「座」のそばにはポットがある。テレビのリモコンは座卓上の手元すぐ近くにある。これらは日常の「場」の構成の仕方について「動かないですむように」という答えが多かったことを反映している。

モノには日常生活の内容が反映される。茶道具やテレビのリモコン、新聞といったものはたいていの人が手元に用意している。「テレビを見る」「新聞を読む」は、たいていの「常座」での行為としてあげられた。

一人暮らしの高齢者の「常座」では、「常座」で行う行為に使うモノが「座」の近辺にある場合が多い（2・6・3参照）。このことは、例えば、高橋（1991）によっても、老人ホームの居室内での生活用品の分布について『まず自分の座った位置から（これは椅子座でも床座でも）手の届く範囲に物が置かれ、さらに、床座の場合は床が物の置き場となって広がっていく。』という指摘がなされている。高齢者の日常生活では、「移動」を極力減らす傾向が強いようである。

### 「座」の周囲のモノの在り方の捉え方

資料編に示した図は、一人暮らしの高齢者の日常の「座」にあるモノを写真及びヒアリング資料によりピックアップしたものである。これらのモノは、回答として得られた日常の生活行為には使われていないものもある。しかし、それらは被験者にとってごくありふれた、あるいは小さな日常の行為（例えば、爪を切る、ちょっとメモをとるなど）に使うモノで、特に日常行為としてあげられなかったものと捉えることが自然であろう。そこでこの節での分析にはこれらのモノ全てを取り上げた。

図 2・14 行為内容に着目した「座」の組み合わせ一覧  
(図 2・13 参照)



## 2・7・2 日常生活とモノ

「常座」の周囲のモノから、その人の日常生活の内容や（何をするのか）時には、生活の活性度も推測することができる。日常の行為として得られた回答が「常座」で、「テレビを見るだけ」であっても、ほぼ一日中、同じ「座」に居ることがモノが集まることになる。その中にはハンドクリームや爪切り、メモ用紙と鉛筆の様に、ピアリングでは特に行為としてあげられない小さな行為のための小道具などが見られる場合も多い。そうしたモノが「常座」の周辺に堆積して「常座」とモノ、行為の関係を形作っていると見られる例も少なくない。

個々の物品について持ち物調査のような詳しい調査は行っていないが、「常座」の周辺で確認することができたのは次の様なモノであった。

- a) 基本的な日常生活に必要なモノ
- b) 絶対に必要ではないがあると便利なモノ
- c) 趣味、仕事などの行為に必要なモノ

以上の実際に手にして使うモノの他に、写真や花、植木などの見るモノがある。仏壇やテレビなどもこの研究では見るモノとして扱った。

モノはその人の日常生活を映し出している。極端な例であるが、高齢者施設などでほとんどケアに頼っている生活、施設の提供する日課だけに参加している人の生活は、同じ施設に住んでいても多くの趣味や楽しみ方を持っている人よりも持ちモノのバラエティは貧困であり、それはごく基本的な日常を満たすレベルに限られる傾向がある。

## 2・7・3 行為を誘発するモノの存在について

## - 観察者が認知する「座」としての「モノ座」の概念 -

モノ環境を構成する要素としての「見るモノ」の中には、金魚などの小動物や植物の様に育てたり、鑑賞したりして楽しむ種類のものがある。ほとんどの人が所有していた仏壇にもこれと似た関わり方が、たいていの場合存在すると思われる。モノの分析では仏壇もモノとした。研究では、手を合わせる等、具体的な行為をあげた者（SN1、SN5）については「目的座」としたが、上の様な捉え方をすれば他の例についても行為を行う「座」の一つとして見る事ができる。つまり、「見るモノ」にはくそのまま置いておくモノ>と、仏壇などの様に<積極的に関わることを含めて見るモノ>とに分けることができる。<積極的に関わることを含めて見るモノ>は、調査時に「座」としてあげられていなくても、世話をしたりする行為のための「座」が存在すると考えることができ、この様な「座」を「モノ座」として本研究では定義した。モノ座：観察者の側から、生活者の「見る」という行為の他に生活者の積極的な関わりが予測できるモノを「モノ座」とする。

「モノ座」は居間から、居間以外の空間、またベランダなどへの広がりを見せることもある。「モノ座」の存在は、個人空間を充実させ、場合によっては個人空間を一

回り大きくしている。

表・2・15 仏壇の保有状況とモノ座

	仏壇の保有	モノ座		仏壇の保有	モノ座
SA1	○		SN1	○	○ベランダで植物栽培が趣味
SA2	○	○室内に植木	SN2	○	
SA3		○ベランダにサボテン等を置く	SN3	○	
SA4	○	○室内に植木。「寝室の植木には毎朝話しかけながら水をやる」	SN4		
SA5	○		SN5	○	
SA6	○	○ベランダに植木。室内に金魚。	SN6	○	
SA7	○	○テーブルに花の鉢	SN7	○	△玄関先のサツキが自慢
SA8	○	○ベランダに植木	SN8	○	
SA9			SN9		
SA10	○	○植木（室内やテーブルの上、ベランダにたくさん）。「時々風呂用の腰掛けに座って眺める」	SN10	○	
SA11		○ベランダに植木	SN11	○	○植木
			SN12	○	
			SN13	○	○室内に金魚、植木。「生き物を見るのは楽しい」
			SN14		





図・2・15 「モノ座」の形成

## 2・7・4 「常座」の周囲でのモノの分布

日常最も長時間いる「常座」の周囲にあるモノが「常座」を中心にとどの様に分布しているかを、同心円上にプロットした。

□方法 「常座」の中央部を中心に0.5mごとの同心円を描き「常座」からそれぞれの距離に何がいくつあるか、また、分布の仕方自体の傾向について類型化を試みた。  
資料：インタビュー時の観察と写真のデータによる。数え方：カウントする際、ペンざら、箱に入った小物類等、一つにまとめられたものは一つとしてカウントした。

モノは、「使うモノ」と写真や飾りなど精神的な意味が込められた「見るモノ」とに分けてプロットした。同時にモノがどの様にしてあるか、在り方にも着目した。モノの在り方には「置かれている」場合と「収納されている」場合があった。

モノが「置かれている」場合、座卓の上や床の上や、「常座」のそばなどにあった。「常座」の近くに戸棚やワゴンなどを置いてそこに物品が収納されることもある。一人暮らしの高齢者の場合、モノが非常に多く、周囲に堆積している印象を押し並べて受けるのだが、同じ様な状況でも「置く」型と「収納」の型とが存在する。「場」の構成のされ方として両者は全く異なるものである。

プロットされたモノは、何らかの行為に必要な「使うもの」としての意味を持つものが多く、比較的手近な位置（「座」から1m以内のあたり）に分布している。同時に、写真や人形、仏壇など、「見る対象」となり得るものがある。これらは「座」のそばではなく、1.5mから2.0m離れて「座」を囲うように分布していることが多かった。

指示代名詞の指示領域（西出 1991）にあてはめれば、「使うモノ」は「コレ領域」を中心とした所にあり、日常実際に使うわけではないが精神的な思い入れ等があり「見る対象」となるものは「ソレ領域」に多い傾向があった。同心円上では、「使うモノ」は特に1.0mまでの部分に集中する。つまり、先のコレ領域でも人に近い部分である。また、「見るモノ」の集中する1.5mから2.0mのあたりはソレ領域でもほとんど境界部分である。

モノ分布の把握は完全に遺漏なくおさえられたものとは言えないが、以下に確認できた範囲での分布の状況を表に示す。



表・2・16 「座」を中心としたモノの分布状況（一人暮らし平均、地区別）  
 <赤羽台団地地区> <根津地区>

	0.5m	1.0m	1.5m	2.0m	2.0m以上	0.5m	1.0m	1.5m	2.0m	2.0m以上
□	0	0.7	0.5	0.4	0	0.1	0.8	0.4	0.4	0.3
○	1.6	5.8	2.7	0.6	1.2	2.4	4.5	1.7	0.9	0.4
●	0	1.7	1.5	2	1.8	0	0.6	1.8	2.1	1.3

(凡例)

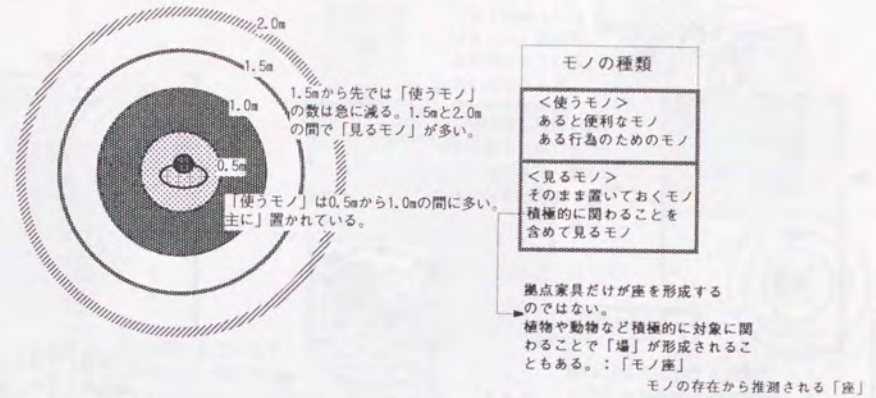
- : 収納されている「使うモノ」
- : 置かれている「使うモノ」
- : 見ることのできるモノ（飾ってあるモノ）

(単位 個)

\*個人別のデータについては資料編参照。

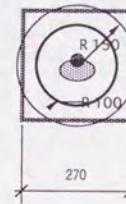
平均した数値を単純に全体の傾向として捉えることはやや問題もあるのだが、結果からての届く範囲に使うモノが置かれていることが多いことが読み取れる。また、置かれている<使うモノ>は、根津地区の方がより手元近くにある。「常座」から1m以内の手を伸ばせば届く範囲にある<使うモノ>の数は赤羽台団地の方が若干多く見られる。

図・2・17は、四畳半の居室のプロポーションとモノの分布に使った同心円を重ねたものである。ヒアリング調査の中で「四畳半は使いやすい」という人がいたので試みた。



図・2・16 一人暮らしの高齢者の「常座」の周囲のモノ環境のモデル

(補) 「4.5畳は使いやすい」



一辺270mの枠の中心に座を置き、半径1mと1.5mの同心円を描いた。半径1mは、いわゆる「コレ」領域であり、モノの分布のデータでは最も多くのモノを観察できた位置である。この位置は立ったりしなくてもモノに手が届く。1.5m離れると、移動が必要だがこのあたりは1mの圏内に続いてモノの多い領域であった。

図・2・17 4.5畳のプロポーション



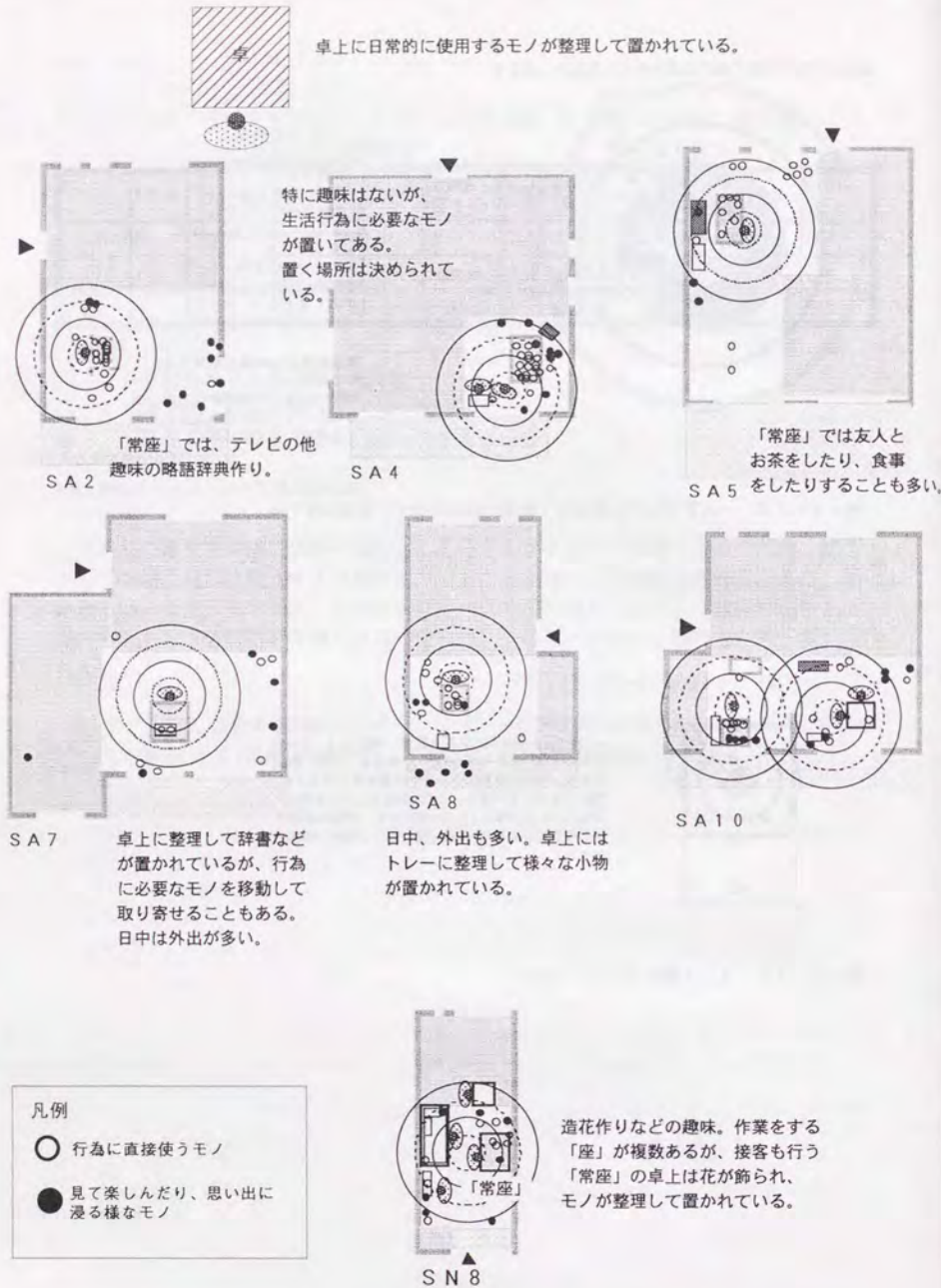


図 2・18・1 「常座」の周囲のモノの分布

「常座」の周囲にモノが置かれている。

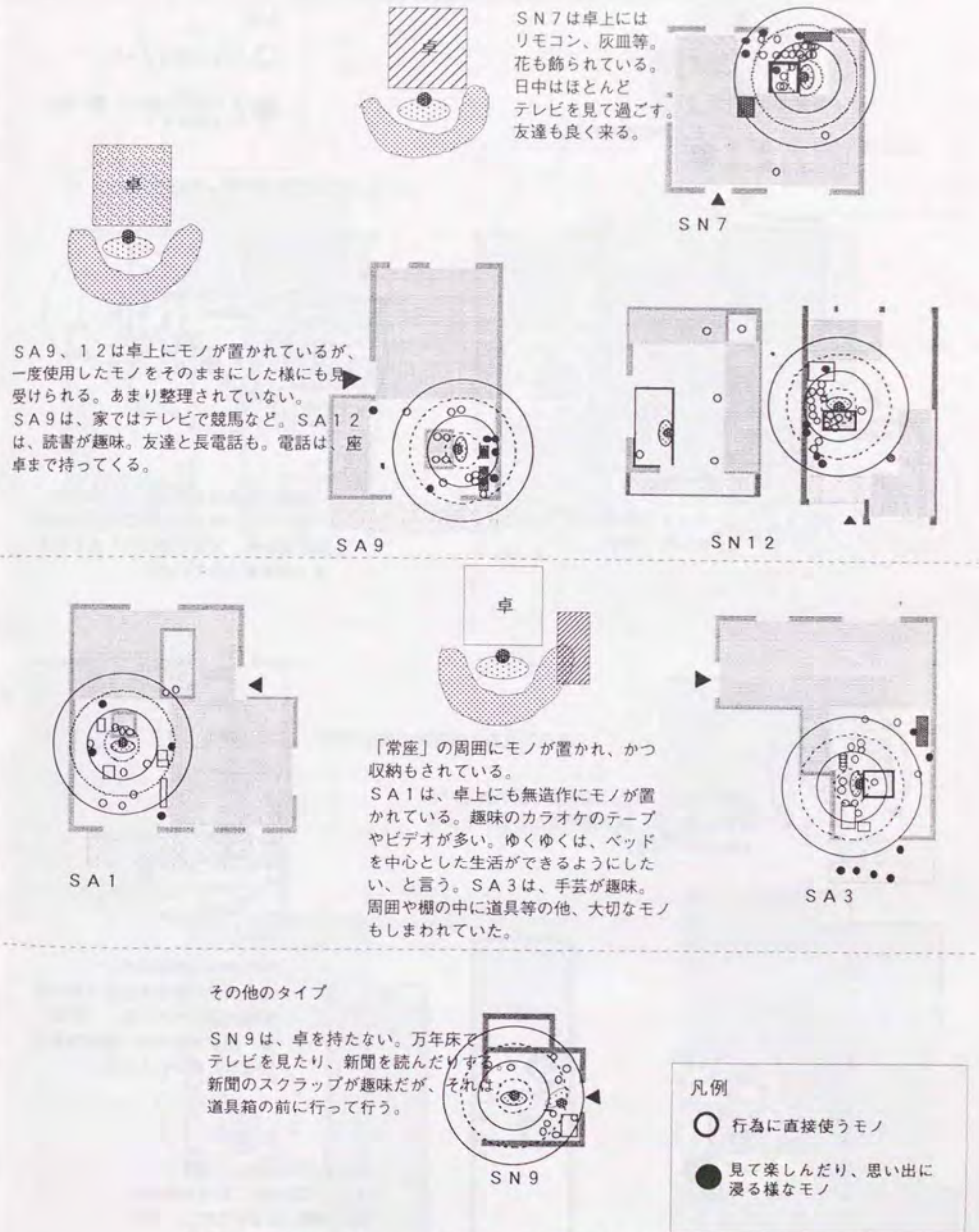
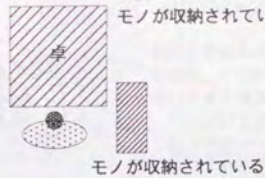


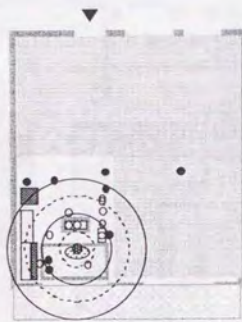
図 2・18・2 「常座」の周囲のモノの分布



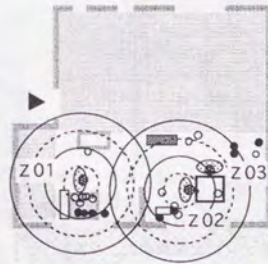
卓上にはモノが整理して置かれ、「座」のすぐそばにはモノが収納されている。



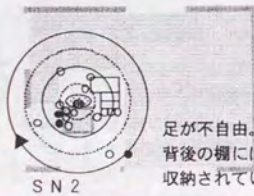
- 凡例
- 行為に直接使うモノ
  - 見て楽しんだり、思い出に浸る様なモノ



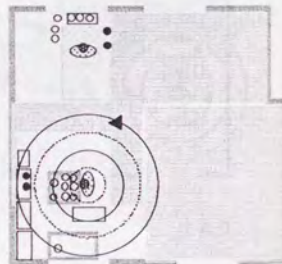
ベッドに腰掛け、ティーテーブルに向けた「常座」。



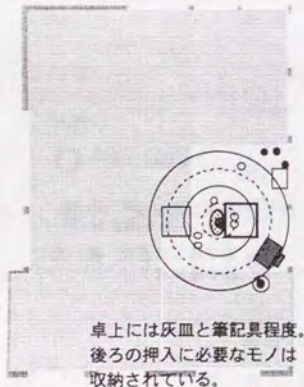
「常座」が複数あるタイプ。Z01の「座」では、卓上にたばこなどの小物類が置かれ、背後の棚には、よく使うモノが収納されている。



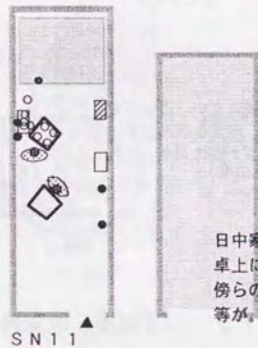
足が不自由。卓上には電話も置かれている。背後の棚には、薬や書類など必要なモノが収納されている。



物理学者で冒険好き。現役時代の書物を含めて多くの書籍に囲まれている。「常座」は、座卓であるが、筆記用具等整理して置かれている。



卓上には灰皿と筆記具程度。後ろの押入に必要なモノは収納されている。



日中家にいないことも多い。卓上には茶道具、灰皿が置かれ、傍らの棚には本やたばこ、CD等が。

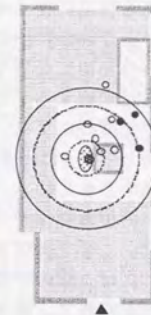
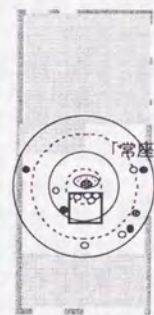
図 2・18・3 「常座」の周囲のモノの分布

「常座」の周辺や卓上に見られるモノの量が少ない。

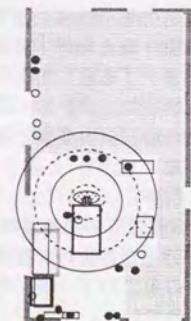
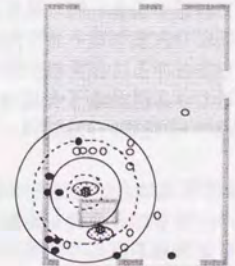
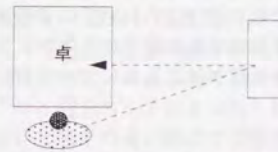


- 凡例
- 行為に直接使うモノ
  - 見て楽しんだり、思い出に浸る様なモノ

□ 「常座」ではテレビを見ていることが多い。



□ 「常座」では、趣味もする。必要な道具は周囲から運んで来る。



図・2・18・4 「常座」の周囲のモノの分布



## 2・7・5 モノ環境と「場」の関係

それぞれのモノ環境からモノの量的な面での多少による違いや種類（基本的な生活に必要なモノ、あると便利なモノ、趣味に使うモノ）の差が捉えられる。日常生活の行為から、これらは一人暮らしの高齢者の生活そのものを反映している。

さらにモノの配置の仕方から、「生活者が仕組んだ空間」としての「場」の構造を知ることができる。これは、ある行為に使うモノの配置がある行為をするための準備の行為の性質を（移動があるか、ないか）決めるためである。

本論では、「座」で行為を行うために必要なモノを揃えるのに特に移動を伴う場合を「セッティング行為」と定義する。セッティング行為がその「座」で必要かどうかは「座」とモノ環境の位置関係による。一人暮らしの高齢者の「常座」での行為は食事等を除いて殆どの場合セッティング行為は必要なかった。「座」での行為に必要なモノが「座」の周囲に集中されていることが多い。第1章で触れた「ステーション」はこの様にモノと「座」の位置関係が「座」で行為を行う際、行為に必要なモノを用意するのに移動が必要ない、手を伸ばせば届く位置にある場合を言う。

「常座」の「ステーション」には、卓のそばに棚などを置き、そこに眼鏡やペン、読みさしの本や網物の道具などを収納し、卓上にはテレビのリモコンや湯のみと急須、「座」の隣あたりにポットを置き、移動することなく様々な行為ができる仕組みを作ったもの、卓上や「座」の周囲に次第に日常の生活行為に際して使用されていたモノが集積していったと見られるものが主に見られた。従って、一人暮らしの高齢者の「常座」の「ステーション」の形成のされ方は、「収納」と「座」の近辺に「置く」という2つのタイプに分けることができる。「置く」場所は、「座」の近辺の床上や卓の上である。その様子には整理されていて計画性の感じられるもの（例：SA4）と、生活の中で徐々に堆積していったのではないかという印象の強いもの（例：SN7、12）とがある。「ステーション」のタイプにはあとで図に示すようにいくつかのタイプが見られた。また、モノと「座」が前述の様な位置関係であれば「ステーション」であり、勉強机や裁縫道具の棚が傍にあるミシンや楽譜の棚が傍にあるピアノなどにとられる「座」も「ステーション」型である。

<使うモノ>が「常座」のそばにあることが一見して確認できない例も見られた。SN3：「常座」には座卓の上に灰皿、茶道具がある程度であり細々としたモノは見られない。しかし、詳しく聞いて行くと、「座」の背後の押入に日常の小物や薬を揃えたかごがすぐ出せるように入っている。この様にしている理由は「人に見えないように、隠す」と言うことで、この意識を持っているせいか住居内の様子もござっぱりと秩序立っていた。（\*1）

一人暮らしの高齢者には趣味などのためのセッティング行為はあまり見られなかった。セッティング行為は食事や接客のためのお茶などの様に限られる場合も多い。日常生活の中での「一服」のためには、たいていの場合あらかじめ茶道具等は手元にセットされていた。

「常座」での日常の行為にセッティング行為を伴う事例はSA11である。この人はエッセイを書くことが趣味で、その道具をまとめて部屋の隅に置き、書くときには「常座」まで道具箱を移動する。「料理をしながら、テレビを見ながら、エッセイを書きながら、酒を飲みながら・・・」夜を過ごすことが楽しみだと言い、この人の場合、エッセイのためのセッティング行為も、食事の用意も、同列にあると見ることできる。訪問時は、自分の楽しみのための道具はすべて片付けられ、整然とした室内の様子であった。

また、行為のなかには「ほんやりする」「くつろぐ」「考え事をする」といったものもあり、そこに「居ること」だけの場合もある（\*2）。この様な行為の場合「座」におけるモノとの関わりはない。（積極的に「居る」場合、テレビを見たり、音楽を聴いたりといった行為が伴ってくると考えることができる。）

「座」が、「ステーション」型であっても「セッティング行為」が必要な場合もあり得る。「モノ座」では、植物や動物の世話である場合など特に、セッティング行為が多いことが予測される。

その他に、「座」には、テーブルの様に「座」となる場所が具体的に示され、常に「座」に誰もいなくても「座」となることが認知される場合と、縁側の日だまりのように状況により「座」として選択され、通常は「座」であることが外見からは判断することのできない「座」がある。常にあるのではなく時に応じて選択される「座」での行為はセッティング行為のある、なしにかかわらず「ポータブルな座」を形成する。

\*1) これに非常に良く似た例は他に夫婦世帯の主婦PA1に見られた。

\*2) これらの一見何もしていない行為も「行為」として考える見方がある。（黒田直 1989 「行為の規範」）

（注）「常座」の周囲のモノ環境「コレ、ソレ領域」

「常座」の周囲のモノ環境を表わした図に人の「コレ」「ソレ」の平均指示領域\*1（西出1990）にあるものを大まかに捉えて分類した。（資料編）

コレ領域のモノは立ったり移動をしないで手に入れやすい位置にある。ソレ領域についてはその遠い部分では移動が必要になる。遠い部分に日常使うものが置かれる例は多くなかった。高齢者の場合はセッティング行為が必要ないように仕組まれている。コレ領域を含む比較的近い部分に実際に使うモノがあり、ソレの縁に当たるような部分になると実際使用することはないが、生活のなかで何かの意味合い（例えば写真、飾り等）を持つと思われるモノが多くなる。これらは言うならば「見る」（あるいは「見せる」）対象としてのモノである。

\*1) 西出（1990）は、コレの指示領域は『身体に準じる、身体の延長的な空間領域』、ソレ領域は『少なくとも自分からの距離だけではなく「相手の領域」を認識した現われという面がある』と説明している。



## 2・7・6 モノに付された意味について

「座」をとり囲むモノについて忘れてはならないことは、これらのモノは具体的に行為に関わる「場」を形成するだけではないということである。モノ全てには生活者一人一人の思い入れがある。高齢者の場合思い入れは特に強いことが言われている。従って、高齢者が生活の中で持ち続けてきた数多くの古いモノに込められた気持ちは、高齢者の住環境を形成する上で重要な位置を占めていると考えられる。例えば、スエーデンの老人ホームには、高齢者が現役で活躍していた時代のモノが置かれ、飾られている。

これらのモノに附された意味の重要性は自宅から老人ホームなどの居住施設へ移転する高齢者に関わる諸研究でも指摘されている。例えば、自宅から居住施設への転居の際、長年使用してきた家具等の一部の施設への持ち込めることは、場所が変わった後でのその人の生活にとって重要な意味を持つと言う(外山 1988, 大原1989)。大原(1989)は、居住施設への入所後、『インバクトの起きやすい時期があり、この時に生活基盤としての住居環境が安定していれば、危機を乗り越える上で有利になることがある』としている。その安定した住環境は、特に活動性の高い人以外の一般の高齢者にとっては、『前住居からの家具等によって占められること』によって得られる。以上では、前住居から施設への移動に「場」の概念は含まれていないが、「場」はパーソナルな日常生活の様式も反映しているため、モノと同時に移動できることが必要とも思われる。即ち、こうしたモノの意味と「場」に個々人の生活が反映されていることを併せて考えると、「常座」に形成された「場」をそのまま施設へ「移す」ことも考えられる。

## 2・8 一人暮らしの高齢者の個人空間の特徴

## 2・8・1 個人空間を形成する「座」の特徴

この章では、住居内での「座」の分布、「座」とされた場所の特徴、「座」で行われる行為、「座」とモノの位置関係を中心に一人暮らしの高齢者の住居に形成された個人空間の特徴を捉えた。「座」では、日常の生活行為に関わる環境との関係によって「場」が形成されている。個人空間の領域的な特徴は「座」の分布から、質的な特徴は「場」の形成の状況から知ることができた。よって、個人空間の核である「座」、「場」についてデータを蓄積したり、形成状況の類型化を様々な角度から試みることは、住居を計画する時に重要な資料と成りえるのではないかと考えられる。

一人暮らしの高齢者の住居内の「座」、「場」の特徴を以下に整理する。

1. 一人暮らしの高齢者の住居には、日常生活のほとんどの行為がなされ、家にいる場合にはたいていそこにいる「座」が見られた。これを「常座」とした。
2. 「常座」は開口部や入り口の方に向く傾向がある。
3. 「常座」は、ほとんどの場合、座卓(こたつを含む)にある。従って、起居様式は床座が多い。(調査事例中、椅子座の「常座」は、根津1例、赤羽台団地3例(そのうち1例は、座卓の「常座」も持つという複数の「常座」を持つタイプ)
4. 「常座」にはテレビがある。そしてテレビがつけばなしになっていることが多い。(SN13のみテレビはなし)
5. 「常座」での行為に関わるモノとの位置関係は「座」の近くの手を伸ばせば届く位置にある「ステーション型」が多い。
6. 一人暮らしの高齢者の場合「常座」では、食事行為も行われる。(下宿生活の準世帯2例を除く全てに見られた。)
7. 「常座」の他に1、2ヵ所の「目的座」を持つ。「目的座」には、ある特定の目的に対応した家具にとられる傾向の強い「目的座」と、「常座」で行われている行為のいくつか(たいてい一つ)行われる「目的座」があった。
8. 接客行為も「常座」で行われる場合が多い。ただし、客の種類や状況に応じて別の座卓などに接客の「座」がとられることもある。客の「座」は「常座」からの視線を遮らない位置に取られる場合が多い。
9. 生活者を取り巻くモノには、実用的な目的を持つものの他に、時々見て楽しんだり、思い出に耽るなどの意味を持つモノがある。これらは、部屋の周囲の棚や壁などを中心に配置されていた。「常座」を大きくとり囲んでいる場合が主で、「常座」の卓上にあることはごく少数例である。
10. 「常座」を中心に形成される「場」は、「常座」で行われる行為に関わる環境と「常座」の関係によって形成されるだけではなく、生活者にとって価値や意味のある居室内外の環境(写真、飾りモノ、育てている植物、外の景色など)によっても形成されている。
11. つまり、「場」の広がり、窓の外の景色を生活の中に積極的に取り入れてい



る場合や、外部に対して興味を持っている場合など（例えば玄関をいつも開け放して外の雰囲気を感じている）住居外へ及んでいるものとして捉えることができる。

1 2. 逆に、外部に対して閉ざされた環境（例えば、玄関や窓には鍵をしめ、カーテンをひく）を作っている人もいる。この場合は、「場」は住居内で完結し、外への広がりはない。

1 3. 見るモノの内、鉢植えの植物や小動物の様に世話が必要な場合、モノのある場所に行って世話をするという積極的な行為を伴う。見るモノでもこの様にそのそばに行き行って何かしらの直接的な働きかけを伴う対象は「座」として理解することができ、本論では「モノ座」とした。

1 4. 「モノ座」を含めて個人空間を捉えると、1、2カ所の「座」しか取らない人の個人空間内でのアクティビティのある領域が「座」のある室以外にも広がっている場合がある。

### 2・8・2 個人空間からの高齢者の住居の計画の視点

高齢者の住居を考える時、いくつかの方向がある。その一つは、高齢化することで生じる物理的な機能の低下を補助することのできる住環境の提供である。住宅そのものの改編や、低下した機能を補う道具等の開発について考える、いわゆるバリアフリーの住環境の具現化を目的とする。この点に関しては、人間工学的な視座からのアプローチのものも多い。もう一点は、高齢者の日常的な住生活、即ち「住まい方」の実態の分析から、住空間を検討するものである。例えば、高坂（1990）は、高齢者の単身者住宅等の住まい方調査を通して、単身高齢者向けの住戸に関する提言を行った。高坂は、単身高齢者向けの住戸の規模について都市部で『居住室面積の最低が10.5畳分（17.5㎡）、住戸専用面積で30㎡必要』であると指摘した。しかし、平面については『・・・起居様式の多様性に基づいて多様な住み方がなされており、それへの対応が必要なこと、・・・』等にとどめている。住生活の反映として住居内部の多様性は明らかにされたが、平面についての方向性は規模に関する提案ほど具体的ではない。ここに、「個人空間」という視点を加えることによって、住まい方調査で現われた多様性の意味を明らかにすることができ、さらに多様性に対応する住空間を検討することが可能となる。

この章の結果に加えて、第3章以降で一人暮らしの高齢者の個人空間の経年変化、夫婦世帯の個人空間の検討を重ね、高齢者の住居の計画に対する提言につなげたいと考えている。

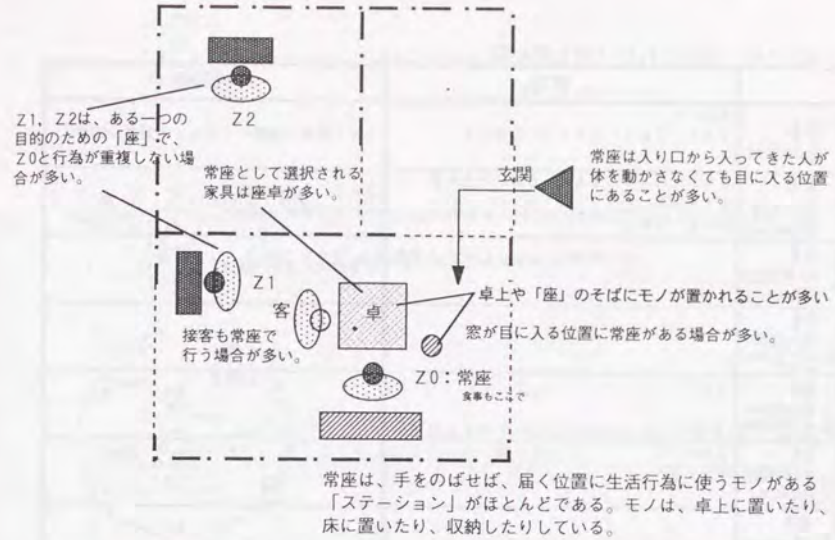
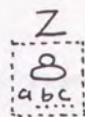


図 2・19 一人暮らしの高齢者の一般的な個人空間



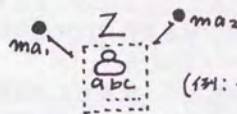
表 2 6まとめ 採取された「座」の一覧

	常座	目的座
座卓 卓上は、2)	SA11 SN1 SN6 SN13 SN14	SN1座卓(接客) SN11座卓(接客)
座卓 卓上はモノか 座卓は、1)	SA2 SA4 SA5 SA7 SA8 S A10-1, 2 SN6 SN8	SA6こたつ(接客) SN8作業台(趣味)
座卓 モノが無操作 に置かれる		SN8テーブル(趣味)
座卓 「座」の周囲に モノが置かれる		
座卓 卓上は、座卓 モノ、座卓 モノ	SN7	
座卓 卓上は無操作 周囲はモノ	SA9 SN12	
座卓 「座」の周囲に モノが置かれる モノ		
座卓 卓上は座卓 モノに収納	SA10 SA6(ベッドに腰かける) SN2 SN3 SN4 SN5 SN11	
座卓 卓上は無操作 + 45度傾		
座卓 卓上なし 座卓モノ + 座卓モノ	SA3	
座卓 卓上は座卓 モノ		
座卓 卓上はモノ	SA1	
机		SA2仕事机 SA5仕事机 SN14仕事机
道具を対象とした座		SA2キーボード SA4鏡台 SA5按摩 椅子 SN1座り机、仏壇、鏡台 SN5仏壇鏡台 SN8ミシン SN9道具箱 SA7仏壇
その他に見られた 「座」	SN9 布団の上 SN14 ソファ(冬専用の「座」)	SA3布団の中で読書やラジオ SA5スペース*1でフラダンス SA10踏台に腰掛けて外の景色を見る SN1 2階の座敷にポータブルな「座」、 作業をする *1室内の床面で少し広い場所 SN2布団の中でテレビを見る SN4布団の中で読書をする SN7座敷にポータブルな「座」(接客) SN12 2階のベッドで読書 SN13隣室のベッドに寝転んでテレビ(具 合が悪いときはベッドで過ごす)



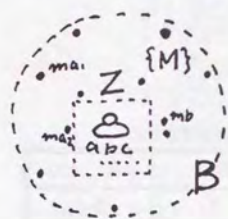
「座」Zで行なわれる行為

a b c ……

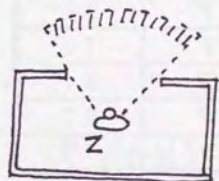


Zで行なわれるそれぞれの行為に関わるモノ(や人)

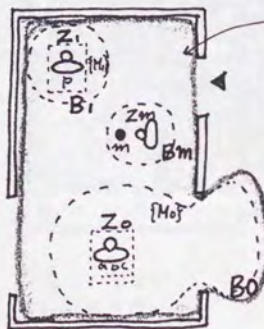
(例: 行為aに関わるモノ/ma1, ma2)



Zで行なわれる全ての行為に関わるモノの集合{M}と、Zの位置関係から捉えられる「場」B



Zから見える戸外の景色や別室の光景などがBに取り込まれる場合もある



「個人空間」は、「場」を核として形成されている

Z0: 「座」 一人暮らしの場合、食事を含む多くの行為が行なわれる。  
B0は、「常座」に形成された「場」  
Z1: 「目的座」 ある特別な行為のみが行なわれる場合が多い。  
B1は、「目的座」に形成された「場」  
モノを対象として形成される「場」も見られる。  
Zmは「モノ座」。



第3章 一人暮らしの高齢者の個人空間の経年変化に関する考察

この章は、1992年にヒアリング調査を行った高齢者に対して2年後の1994年に再度、同じ内容のヒアリング調査を行った結果から各自の環境移行の状況を分析したものである。

住環境がどのように変化したかを見る手段として、高齢者の場合、家具および家具配置の変化に加えてモノの増減等が考察の対象となる。以上の物的環境の変化を通して身体状況や生活の質の変化を捉えることができる。

本章で検討の対象とするデータは次の通りである。

表3・1 2年後のヒアリング調査対象者（記号は1992年度調査に対応）

整理番号	性別	年齢：1994	整理番号	性別	年齢：1994
SA3	F	81	SN5	F	81
SA4	F	70	SN6	F	79
SA10	F	85	SN7	F	77
SA11	F	69	SN8	F	78
SN1	F	82	SN11	F	67
SN3	F	82	SN12	F	67
SN4	M	74	SN13	F	70

調査の結果では「座」を中心とした居室の様子に大きな変化のあるものと、殆ど変化の無いものとの2つのタイプが見い出された。また、変化の様子にも、乱雑さを増すような変化と、健康状態の低下を補償するためのしつらいの変化等色々な種類のものが見られた。本章ではこれらについて、以下詳しく分析を行う。

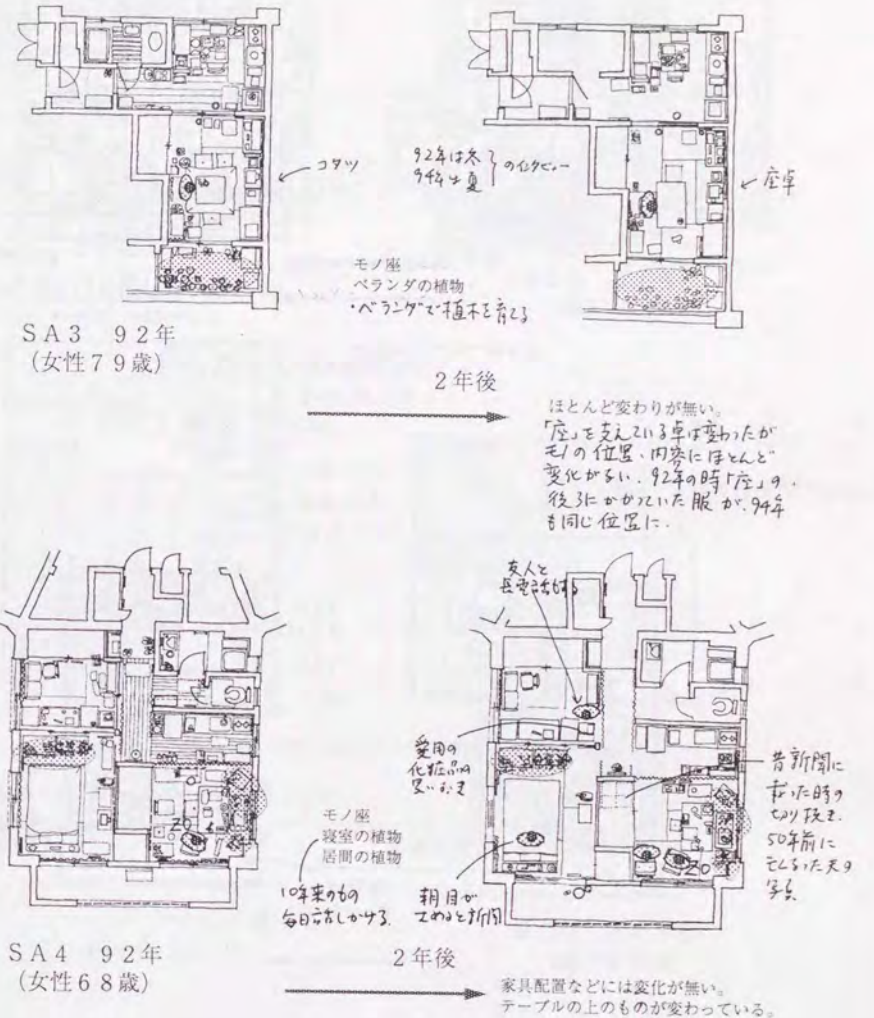
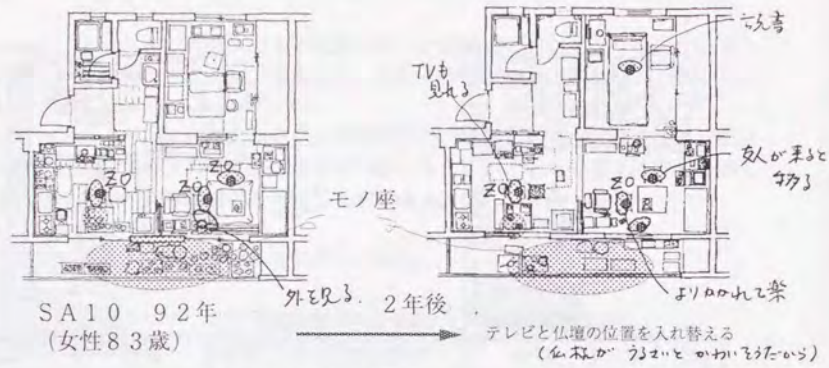


図 3・1・1 住居内部の家具配置、「座」の経年変化





モノ座：ベランダの植物  
テーブル上の植物など殆ど変化なし

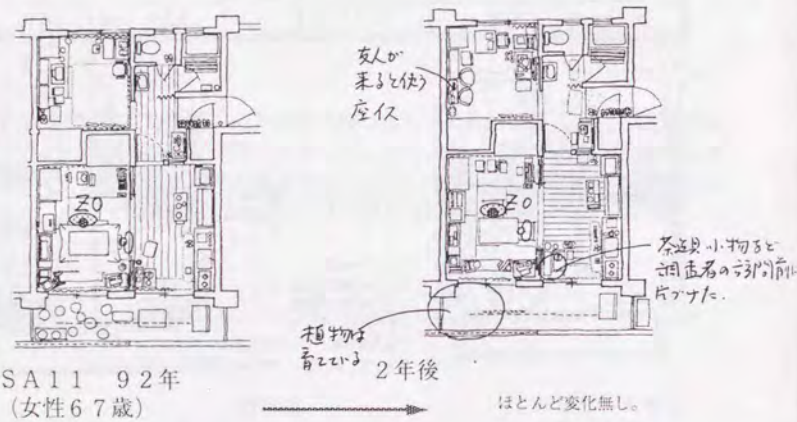
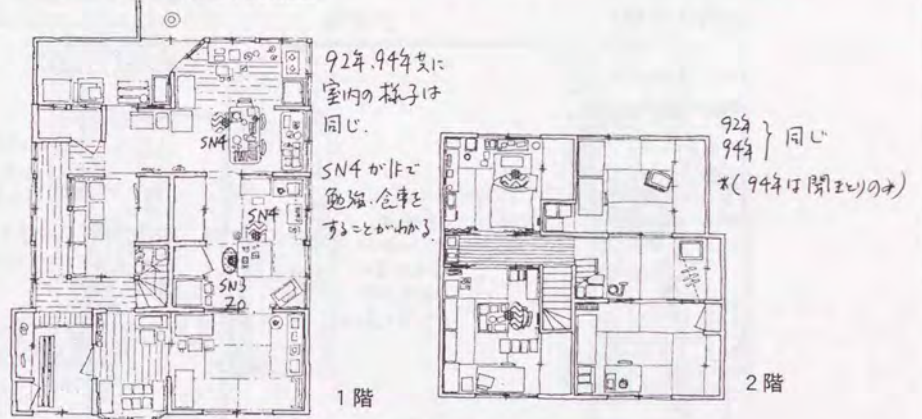
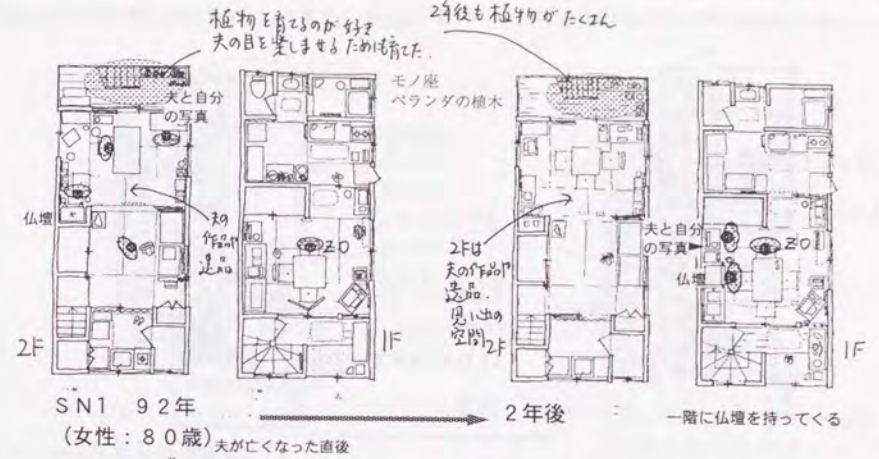


図 3・1・2 住居内部の家具配置、「座」の経年変化



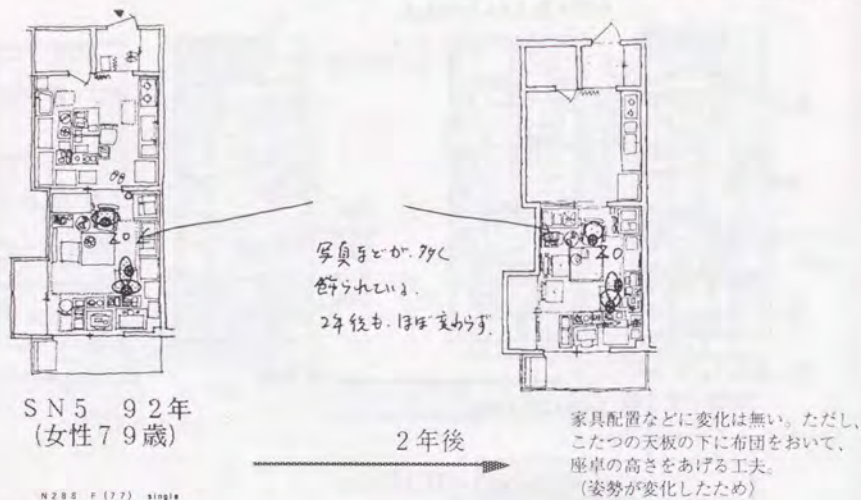
SN4はSN3宅2階に下宿。

- SN3 女性 80歳
- SN4 男性 72歳

2年後の様子 ほとんど変化は無い。

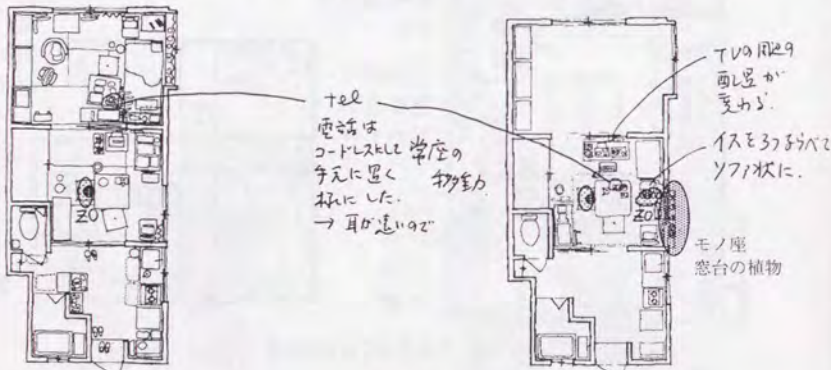
図 3・1・3 住居内部の家具配置、「座」の経年変化



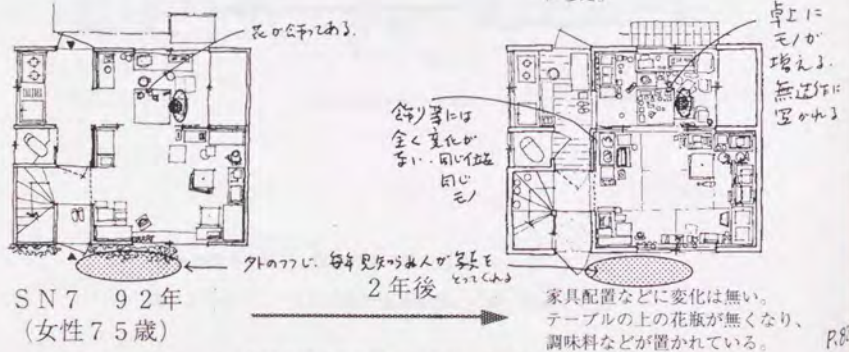


SN5 92年 (女性79歳)

N288 F (77) single

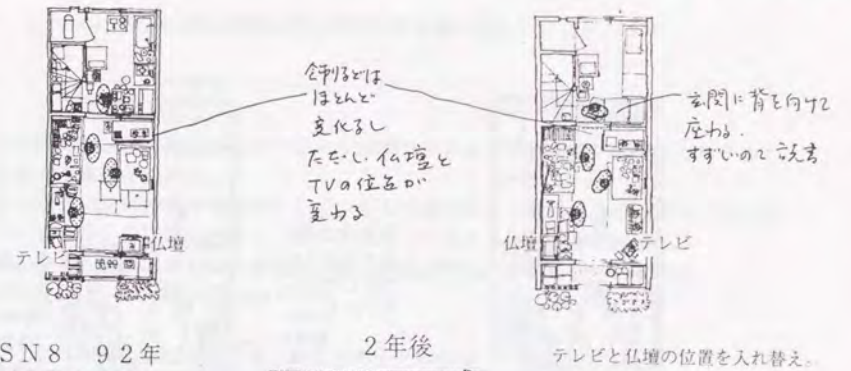


SN6 92年 (女性77歳)

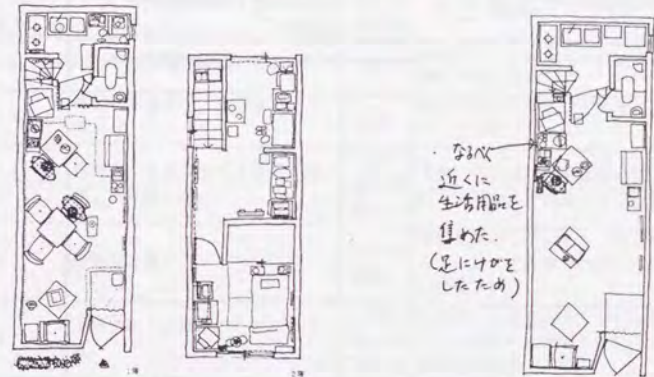


SN7 92年 (女性75歳)

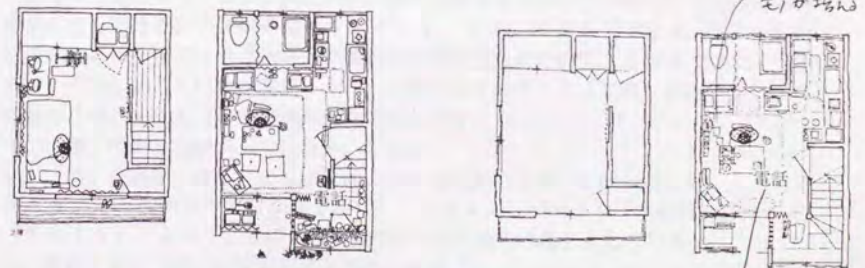
図 3・1・4 住居内部の家具配置、「座」の経年変化



SN8 92年 (女性76歳)



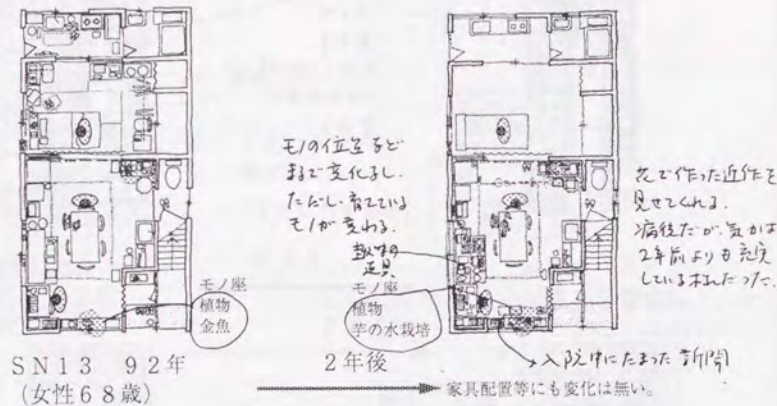
SN11 92年 (女性65歳)



SN12 92年 (女性65歳)

図 3・1・5 住居内部の家具配置、「座」の経年変化





SN13 92年  
(女性68歳)

図 3.1.6 住居内部の家具配置、「座」の経年変化

### 3.1 一人暮らしの高齢者の住空間の2年後の様子

#### 3.1.1 変化の概要

2年後の住居内の様子の変化のレベルは様々である。はじめに、家具配置を中心とした変化の概要を捉える。

2年後の住居内の様子の変化として、家具配置が大きく変わったのはSN1の1例のみであった。「居間」の中で、場所を交換したりする比較的小さな変化は4例に見られた。この5例の変化が「座」の数の増減に直接結び付いたのは、SN1、5、6の3例である。

表3.2 家具配置に変化の見られたものとその理由

項目 番号	変化内容	「座」 の変化 の有無	配置を変えた理由 (居住者による回答)
SA10	テレビと仏壇の位置の交換	なし	仏壇がテレビにあまり近いと仏様に煩くて悪いと聞いて。
SA11	座椅子を購入し、人が来た時は座卓に	なし	友達に座椅子が無いと座るのに疲れてしまうので。
SN1	仏壇などを2階から1階の「居間」へ移動した。	「座」が一部屋に。	2階へ行くのは体がきついだらうということで、子供がしてくれた。
SN5	小椅子を置く。	1カ所増加。	背筋を伸ばしたいとき(背筋が曲がっている)この椅子に座って伸ばすのに使う。
SN6	小椅子を3つ集めて窓際に並べる。	1箇所増、「常座」に	以前はソファがあって楽だったので、ソファ代わりに使おうと自分で椅子を集めてきた。
SN11	小さな戸棚などを「常座」の近くに持ってくる。	ステーションになる	何でも動かないで手が届くようにしている。

全体の傾向として、2年の間に大きな変化は見られなかった。個々の「座」の数が増えたものは上記の3例の他にSA3、4、10、SN11である。数そのものに変化のある7例のうち「常座」に関わる変化が見られたのは、SN6である。SN6は、座卓にとっていた「常座」から、小椅子を3脚並べて「常座」を新設した。「座」の数と「座」を支える物的環境の変化を次に示す。

1. 「座」のある空間が一つになる。SN1

2. 「座」が増加。今までに「座」がなかった空間に「座」が増えた。

SA4、10。ベッドで「新聞を読む」(SA4)、ベッドで「本を読んだりする」(SA10)、というように2例ともベッドを行為の「場」としている。

3. 季節による「座」の変化が見られた。SA3



SA3は、最初の調査の時は、冬期であった。午前中布団の中で、読書やラジオ。2年後の夏期の調査では布団の中の「座」がなくなっている。

4. 「常座」に大きな影響を及ぼす家具の配置の変化は少ない。変化が見られたものは、共に常座のステーション化をはかる意図が見られた。

SN6：新しく「常座」を作る。この「座」で何でもする。

SN11：「常座」で何でも手が届くようにしたくて戸棚なども移動する。

5. 大きな家具の配置の変化があっても「常座」に直接影響を及ぼさないこともある。SN1

これらの変化が個人空間の変化とどの様に結び付いていくのかを検討するために、「座」の数、「モノ環境」等、個別の項目ごとに分析を行った。

### 3・1・2 「座」の増減からの検討

3・1・1でも述べたが、「座」の変化は家具配置などの変化を伴わなくても生じている。目に見える環境の変化だけでは分からない、人と環境との関わりの変化もあるということが分かる。「座」の数の増減は、目に見える変化も見えない変化も含めて捉えることができる視点である。

表3・3 「座」の増減と変化の内容

整理番号	「座」の増減	変化の内容
SA3	-1	布団の中で読書やラジオを聴く「座」がなくなる。
SA4	+1	朝、新聞が来たらすぐ取ってきてベッドで読むようになる。
SA10	+2	日当りにあわせてベッドでも本を読んだりするようになる。窓際の踏台に座って下の道路や景色を眺める。(踏台は2年前もあったことが確認される。)
SN1	-3	居間に仏壇を持ってきて、他の部屋に行かなくてもすむ様にした。
SN5	+1	背筋を伸ばす小椅子を入れる。
SN6	+1	小椅子を並べて「常座」を作る。元の「常座」は接客用になる。
SN11	-1	接客する人の種類で場合分けしていた「座」をなくす。

根津の3例は日常最も長い時間を過ごす室に「座」が付加された。室に対して「座」が持つ意味は、SN1、SN5は新しい場としての機能が室に付加したと言える。SN6は、これまで日常の「座」としていた場所は接客のための「座」として、新たに椅子を3つ並べた日常の「座」を作った。これは、室内での「常座」の新設、変更である。

住居全体の中での意味を考えると、「座」が増えたことでSN5、6は今までにな

かった場が住空間に生じ、SN1では今までは別の室にあった場が居間に移動してきたと言える。また、SN12は1992年には2階のベッドで昼間本を読んだりするとしていたのが、2年後のインタビューでは2階にも座卓があり、そこで読書を行いベッドではしない、と回答した。これは、ベッドを「座」とした場の消滅と、新しい場の発生であり、あるいは「座」として選択する場所の変更である。

一人暮らしの高齢者の住居の中で「常座」そのものが移動すること、その他の「座」の極端な数の増減はきわめて少なかった。この理由の一つとして、「常座」は、基本的な日常行為を含めてたいの行為のための「場」を既に取り込んでいることが考えられる。「常座」があることが、ある変化(例えば、一人暮らしになる、勤めをやめて一日中家にいるようになる、等)に対する「変化」の結果と見るができるのではないだろうか。

一人暮らしの高齢者の住居の中のその他の「座」はある単一の目的を持った「目的座」であることが大半である。これらの「目的座」はこれ以上「常座」に取り込むことはできない行為のためのものと考えられることができる。

### 3・1・3 「常座」の周囲の変化

「座」の周囲のモノの分布の変化は、<見るモノ>に関する変化よりも、<使うモノ>で目だった。SN7とSN12では、もともと「座」から動かずに行うに必要なモノを手にすることのできる「ステーション」型の「常座」だったが、2年後には、さらに座卓上や「座」のすぐ近くの床上にあるモノの量が増大した。SN12は2年前は電話は玄関の近くの床の上にあり、使う度にコードを引っばって座卓まで運んでいたが、常に座卓上に置くようになった。2つの例とも、「常座」で行う行為の内容には大きな変化はない。そこでの生活行為をサポートするモノがそのまま置かれていたり、そばにあると便利なモノが置かれていたりしていると見られる。

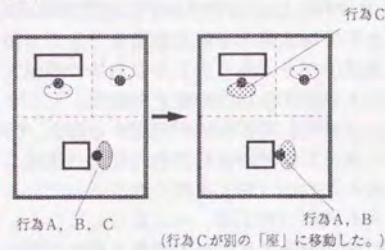
SN11も使うモノが増えたているが、これは「常座」を「ステーション」にするために、意図的にモノを「常座」の近くに集めた例である。2年前も「座」から立つことなくたいの日常行為ができるようなしつらえであったが、食事のためのジャーやその他日常的な小物の入っていた引き出しなどを「座」の周囲に配置し、さらに行為のための移動を少なくさせるように改変された。足の怪我などの身体的な変化によって住居の中での生活の比重が増えたということが、2年前に比べて「常座」の行為内容が増加し、モノの集中度を高める結果につながったと考えられる。

「座」と「座」で行う行為に関わるモノの位置関係(調達のための移動の有無など)は、「座」の場所はそのままで、変化した例が見られる。

時間の経過によって、「常座」には「ステーション」型に変化する(もしくはその度合を強める)傾向が見られた。「ステーション」化について日常生活の中の要因として 1.訪問者の減少 2.「常座」に滞留する時間が長くなる。 3.体力の低下の3点が推測できる。

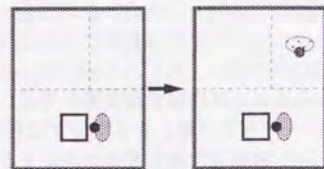


「座」の数や配置は変わらないが、「座」で行われる行為の内容や量が変って、「座」の<重み>が変化する。



<例>  
「常座」には多くの行為が重なっているが、そこで行われる行為のいくつかを別の「座」で行うようになる場合がある。「常座」の<重み>が少し軽くなる。  
例えば、SN8は、夏に訪問したところ涼しい台所の「座」で、趣味の造花づくりをしない時には本を読んだり、新聞を読んだりして過ごすようになった。

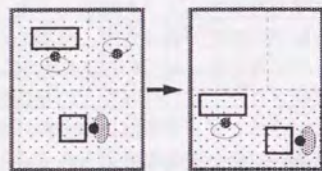
今までなかった「座」が取られ、新たな「場」が形成された。



例えば、SA10は日中の日当りに合わせて「座」を変えていく。時間によっては、ベッドで本を読んだりする様になった。  
→「座」が増えた。

(「座」の増減は既に「座」のある室内でも、その他の空間でも起こる。)

今まで住居内に分散していた「座」が一つの空間だけに取られるようになる。



SN1は、体調を崩し、2年の間に入院を繰り返した。そうした体力の低下によって2階にあった夫の仏壇を下に下ろし、2階に行かなくても済むようにした。  
→1階に「目的座」を移す。

図・3・2 「座」の分布の仕方の経年変化

### 3・1・4 「常座」で行われる行為の変化

2年後の調査で「常座」での行為内容が変化していたものはSA11、SN1、7、11である。(表 3.4)

SA11は、サークルの友達を呼んで「宴会」をするようになった。この人はエッセイを書くなど多趣味で、これらのサークル活動やボランティア活動で外へ出ることも多いが、家でも趣味のエッセイをはじめとして多様な生活を繰り返している。2年前にはヒアリングに訪問する数ヵ月前まで実母が存命だったためもあってか、友人が家に来るとい話は聞かれなかった。

逆に、SN6やSN12ではよく来ていた友達が全く来なくなった。また、SN11は、以前は出歩きが多い日常だったが足に怪我をしてから出歩きはなくなり、「常座」の滞在時間も長くなった。しかし、双方の例とも、生活の活性度が失われたわけではない。

ここで、SA11は、今まで家に人が来なかったのが来るようになり、SN7、SN12は来なくなったという事実に注目したい。SN7、SN12は、家にこれまで来ていた友人が来なくなったが、その友人とは外で会うことに決めて活発な交流をしていたり(SN12)、銭湯で知り合った友人と旅行に行ったり、サークルで旅行に行ったり(SN7)と、対人関係が断絶してしまったわけではなく、人との付き合い方のスタイルが変化したと捉えることができる。しかし、この3例について「常座」の周囲のモノの分布の変化を見ると、人との付き合いに自宅を介するかどうかは客観的な住居内部の様子にかなり大きな影響を与えるのではないかと考えられる。勿論、3例のみの結果から結論づけることは危険であるが、「人」という要素が、個人空間の様相の決定に深く関与することが予測された。

「場」は個人空間の中で行為が行われたり、モノが比較的集中するなど、密度の高い場所と考えることができる。それぞれの「座」で行われる行為の変化から「場」の密度や内容の変化を伴った個人空間の変化を捉えることができる。特に、「常座」は個人空間の中で最も密度の高い部分の一つである。従って、その変化は多くの示唆を与えるものと考えられる。



表3・4 「常座」で行う行為の変化

番号	項目	家族以外の人に対する接客行為の増減	趣味的な行為の増減	そのほかの時間の過ごし方の変化の有無
SA3		家族以外の接客なし	変化なし	変化なし
SA4		家族以外の接客なし	特に趣味はない	変化なし
SA10		変化なし	変化なし	変化なし
SA11		友達に来て宴会をするようになる	変化なし	変化なし
SN1		夫の弟子が来なくなる	特に趣味はない	ヘルパーさんとおしゃべり、昼寝をするようになる
SN3		変化なし	特に趣味はない	変化なし
SN4		家族以外の接客なし	変化なし	変化なし
SN5		変化なし	変化なし	変化なし
SN6		変化なし	家で趣味(民謡と踊り)はしない	昼寝をするようになる 電話をコードレスに。 「常座」で電話可能に
SN7		良く来ていた友達が来なくなる	編ものをするようになる	変化なし
SN8		変化なし	変化なし	変化なし
SN11		変化なし	編ものをするようになる	外出が減って「常座」にいる時間が長くなる
SN12		良く来ていた友達が来なくなる	変化なし	変化なし
SN13		家族以外の接客なし	内容に変化はないがやる気が起こる	音楽を聴きながら行為をするようになる

## 3・1・5 「座」で行われる行為の変化

住居内にある「座」と行為の対応のさせ方が変化した事例はSN1、SN6、SN7である。SN1は一室で全てがこなせるように場を集中させた。SN6は、訪問したのが夏であったため、「涼しい場所」としてこれまで造花を作る場所であった台所のテーブルでも、暇なとき読書や新聞を読んだりするようになった。その「場」の持つ意味がその人の住空間の中で重みを増した。つまり、外見上は変化がないが、個人空間は2年前と変化していると言えることができる。SN6は、「座」を新設した。新しい「座」は「常座」になった。以前の「常座」にはなかった「昼寝」行為が加わり、電話も「常座」でできるようにコードレスフォンが取り入れられた。SN11は、2年前にはやらなかった網ものが「常座」での行為として加えられた。

「座」と行為の対応の様子は個人空間の全体像の概要と密度を知る手がかりとなる。「座」に関する変化が複数の室にわたるのは、11例中3例であった。他は、「常座」のある室内での増減である。即ち、住居内での日常の行為のために使用する領域から見た個人空間が大幅に変化することは少ない。「座」で行われる行為内容の変化は目立ち、「場」が内容的に変化したことを示している。

## 3・1・6 「モノ座」の変化の様子

ここまで見てきたように、住居内の「座」の数や行為内容、物的環境の変化は、ある程度の変化がほとんどの事例で見ることができた。例えば、「座」の数の変化は「目的座」を中心に11例中7例に見られた。しかし、「モノ座」の変化は目立たなかった。2年後の調査の特徴の一つとしてあげることができる。居室の中で植木を育てていた人達は皆、2年後の訪問の時にも同じように植木を育てていた。植木の入れ替え等があったことも考えられる。植木を育てる習慣として維持されている。また、SN13では、2年前「動くものを見るのは楽しい」と金魚を飼っていた。2年後の訪問では金魚のいた場所ですつまいもの水栽培をしていた。「病院から退院して帰ってきたらさつまいもが芽を出していた。生き物が育っていくのを見るのは楽しい」と話す。また、SA4の人は、寝室を中心にたくさんのポトスを栽培している。「話しかけるといい、と聞いてから毎日声をかけて水をやっている。十数年来育てている。」

以上のから、「モノ座」には一般の「目的座」以上に意味がある場合も十分に考えられ、「座」でのモノに対する働きかけが盛んな場合も多いのではないと思われる。SN1は、体の調子が悪くなって、日常の「座」は全て「居間」に移動した。しかし、夫が生きていたときから「仕事をしている夫の目を楽しませるためにも」熱心に2階のベランダで育てていた植木の世話は、病気退院後の訪問時にも続けられていた。会話から、植木の一つ一つに思い出や意味があり、この人の大切な日常の一部であることが理解できた。また、この婦人は、日常生活のための「座」を全て1階に集め、日常生活のために使用する住居領域は見かけの上では小さくなったが、「モノ座」としてのベランダの植物や、それを眺める2階の和室は、夫の遺作や遺品がそのままになっている。2階の和室で遺作などを見ることは良く行われる行為と見られた。この



室は一種の「モノ座」が溢れる、この人にとって非常に意味のある空間であると言えることができる。SN1の個人空間は、日常的な「座」を全て1室に集め、縮小したかに見えるが、個人空間の領域的な広がりには変化していないと言える。

「モノ座」が、あまり変化しない理由として、「モノ座」が習慣や生活に根付いた好みによるものであることが考えられる。日常の生活習慣を維持させることが生活の質を守ることであれば、「モノ座」は留意すべき日常の事象である。

### 3・1・7 個人空間と身体状況の関係

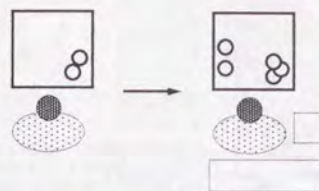
「座」の数、「座」で行われる行為内容、「座」と行為の対応、「座」の様子、モノ環境と「座」での行為時の関係等の視点で変化の様子には、大きく分けて全く変化のない例と変化がある例がある。

加齢に伴って最も起こりやすい変化の一つは体力の低下であるが、病気等実際に低下の事実がある例でも変化の有無や幅は異なる。そういった変化の仕方の違いは、加齢によって体力が低下することでこれまでの生活の質が維持できなくなることを何らかの形で抑える努力が一つにあると思われる。最も如実に示している例がSN5で背骨が曲がって姿勢が変形し、一般的な生活姿勢がとれなくなった。そのため、これまで通りの日常生活をこれまでと同じ行動様式で行うために、こたつの天板の下に自分の布団をはさんで高さを上げるなど工夫を加えている。手元に置かれたモノの量に若干の増加が見られた。

体力の低下や環境の変化に適応するために、「座」を「ステーション」化させたり、SN7の様な工夫をしていると考えられる。

「常座」で行われる行為内容の変化は、「常座」の質の変化、ひいては日常生活の変化の一端を示すものとして捉えられる。

#### 1. 「座」-モノの位置関係の変化①・・・ステーション化

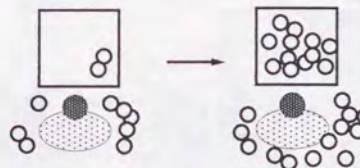


#### 2. 新しく「座」を作る。

SN6は、新しく作った「常座」をステーションに。  
SN11は、もともとの「常座」をステーションにした。  
また、SN12は電話を座卓の上に置くようになる、等。



#### 3. 「座」-モノの位置関係の変化② ステーションのモノの量が増える例



SN7や12は、「常座」の周囲や、卓上にモノが置かれるタイプのステーションだが、2年後には置かれるモノの量が増えた。特に、卓上に置かれるモノの量の増え方が目立つ。調味料など日常的なものがそのまま置かれている印象を受ける。

#### 4. 座での行為の仕方（様式）を維持するための工夫を加える。

SN5で見られた例。姿勢が変化し、普通の生活姿勢がとれなくなる。座卓の高さが合わなくなってしまった。「常座」での行為の内容や、やり方を変えないための工夫として本人が行う。



例えば、合わなくなった座卓の高さを、天板の下にマットを置いて高くする。

#### 5. 「場」の分布の変化-「場」の集中



SN1は、病気になり体を休めるためにも2階にあった仏壇を1階に降ろすなどして生活の上で2階を利用しなくてもよいようにした。





SA 3

築屋状態に  
大きな変化  
はなし。

こたつから座卓になったが「常座」の位置、  
ステーションであることには変化なし。  
モノは「座」右手の棚と、「座」の近辺に  
置かれている。



SA 4

築屋に変化はなし。

「常座」の位置、ステーションであることに  
変化はない。モノは卓上に配置されている。  
モノの種類が変化している。



SA 10

築屋に変化はなし。

「常座」が複数ある。92年はテーブルと  
座卓に2カ所。座卓の2カ所は全く同じ  
性質の「座」であった。94年には、座卓  
の2カ所のうち1カ所が「常座」として  
確定し、もう一つは接客時に本人が座る。  
「常座」は92、94年とも全くのステー  
ションではない。趣味の行為の時などの  
セッティング行為など。



SA 11

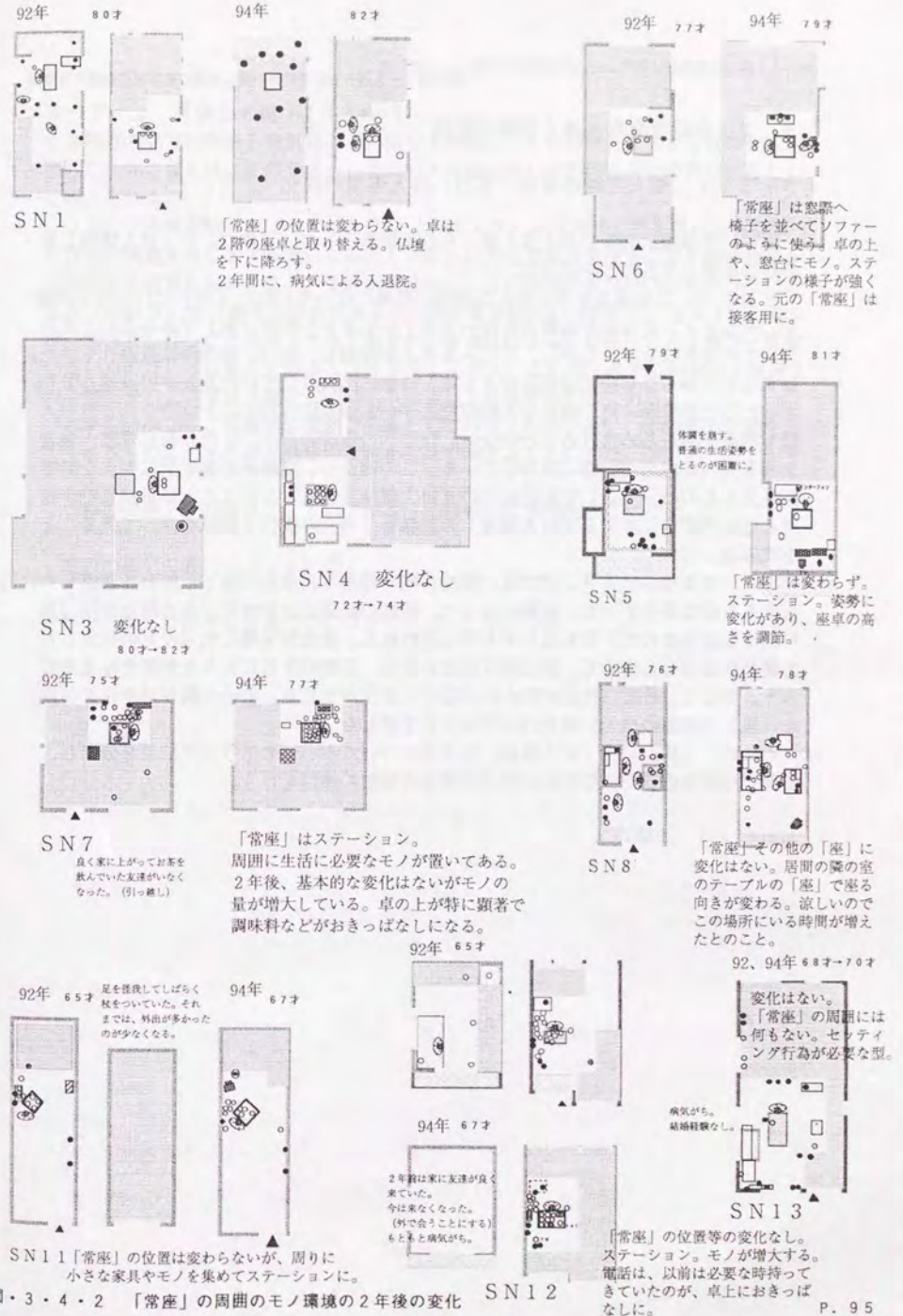
築屋に変化はなし。

「常座」の位置、セッティング行為を行う  
ことが基本であることには変化はない。必要  
なモノは道具箱の様なものにセットしてあ  
る。通常は、茶道具程度と、特に必要な  
道具は卓上にあるらしいのだが、訪問者が  
あると、盆の上にまとめて、他の場所に移  
すらしい。

凡例

- 行為に直接使うモノ
- 見て楽しむだけ、思い出しに  
添える様なモノ

図・3・4・1 「常座」の周囲のモノ環境の2年後の変化



図・3・4・2 「常座」の周囲のモノ環境の2年後の変化

SN 12